「国際共同研究推進のための
研究者受入促進・ネットワーク強化に係る調査研究」

平成２３年度　委託業務成果報告書

平成２３年１２月

社団法人科学技術国際交流センター（JISTEC）

本報告書は、文部科学省の平成23年度科学技術試験研究委託事業による委託業務として、社団法人科学技術国際交流センター（JISTEC）が実施した平成23年度「国際共同研究推進のための研究者受入促進・ネットワーク強化に係る調査研究」の成果を取りまとめたものです。

はじめに

本報告書は文部科学省からの委託を受け、社団法人科学技術国際交流センターが実施した「国際共同研究推進のための研究者受入れ促進・ネットワーク強化に係る調査研究」の平成23年度の成果を取り纏めたものである。

第3期科学技術基本計画」（平成18年3月28日閣議決定）の下、「科学技術創造立国」を目指して諸施策が展開されてきたが、平成23年度からの「第4期科学技術基本計画」においては、「世界と一体化した国際活動の戦略的展開」が重要政策の一つとして位置づけられているほか、「新成長戦略」（平成22年6月18日閣議決定）では、「『トップレベル頭脳循環システム（仮称）』の構築」や「東アジア・サイエンス＆イノベーション・エリアの構築」などが示されている。

これらを踏まえ、本委託業務においては、アジア諸国（特に中国）をはじめとする研究者の受入れを通じて我が国の研究者受入れ状況等の調査を行い、内外の研究者の研究活動の活性化や国際共同研究のための研究者受入れ体制、研究者ネットワークの強化に向けた課題について以下の観点から分析し取りまとめた。

1） アジア諸国をはじめとした外国人研究者が我が国で研究活動を行う上でのより良い環境作りの成功事例と諸課題
2） 我が国で研究活動を行うアジア諸国の研究者が帰国後に我が国の受入研究機関との継続的・発展的な交流促進に携わる上での成功事例と諸課題
3） アジア諸国の研究者が中心となって国際共同研究計画書を立案するためのネットワーク形成や研究活動の支援のための諸課題

尚、本調査を遂行するにあたり実施したアンケートおよびヒアリング調査にご協力いただいた多くの機関関係者に深謝の意を表する。

平成23年12月

社団法人科学技術国際交流センター

平成 23 年度「国際共同研究推進のための研究者受入促進・ネットワーク強化に係る調査研究」
委託業務　成果報告書

目　次

１．調査目的
２．調査の実施項目と実施日程
３．調査方法／実施報告
　３－１．中国政府派遣研究員の受入れ
　３－２．生活・研究の円滑化への支援
　３－３．日中間対話の実施
　３－４．帰国後の活動に資する体験の機会の設定
　３－５．帰国した中国政府派遣研究員等への調査
　３－６．中国政府派遣研究員及び受入研究者・受入研究機関への調査
　３－７．外国人研究者受入についての調査
４．本年度の研究課題について
５．調査／実施結果
　５－１．中国政府派遣研究員のための日中間対話の実施結果
　５－２．帰国後の活動に資する体験（企業、研究機関訪問）の実施結果
　５－３．帰国した中国政府派遣研究員等への調査
　５－４．中国政府派遣研究員及び受入研究者・受入研究機関への調査
　５－４－１．「中国政府派遣研究員制度」派遣研究員アンケート結果
　５－４－２．「中国政府派遣研究員制度」受入研究者アンケート結果
　５－４－３．「中国政府派遣研究員制度」受入事務担当者アンケート結果
　５－４－４．大学訪問調査結果
　５－５．外国人研究者受入についての調査（別冊）

添付資料　「中国政府派遣研究員制度」に係るアンケート調査票

別冊報告　「外国人研究者受入についての調査」報告書

1．調査目的

本委託業務では、日中文化交流協定（昭和 54 年 12 月署名）に基づく中国政府派遣研究員の受入れ等を活用し、以下の（1）（2）（3）について調査分析を行った。

（1）アジア諸国をはじめとした外国人研究者が我が国で研究活動を行う上でのより良い環境作りの成功事例と諸課題

（2）我が国で研究活動を行うアジア諸国の研究者が帰国後に我が国に受入研究機関との継続的・発展的な交流促進に携わる上での成功事例と諸課題

（3）アジア諸国の研究者が中心となって国際共同研究計画書を立案するためのネットワーク形成や研究活動の支援のための諸課題

また、本事業が平成 23 年度にて終了することから、これまでの調査研究事業の集約として、優秀な外国人研究者を我が国へ呼び込むための施策の検討に向け、今後の受入方策等に資するための調査結果を総括した。

2．調査の実施項目と実施日程

業務項目	実施日程（含む準備期間）								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1.中国政府派遣研究員の受入れ		研究支援費の支給							
2.生活・研究の円滑化への支援	電話・メールによる生活・研究の相談								
3.日中間対話の実施		日中対話の準備・実施							
4.帰国後の活動に資する体験の機会の実施		機関訪問							
5.帰国した中国政府派遣研究員等への調査						訪問調査の実施			
6.中国政府派遣研究員及び受入研究者・受入研究機関への調査	国内訪問調査、アンケート調査								
7.外国人研究者受入についての調査				調査の実施・解析					

3．調査方法／実施報告

3－1．中国政府派遣研究員の受入れ

平成 22 年 10 月に受け入れた中国政府派遣研究員のうち、平成 23 年 4 月から 9 月に滞在した 24 名の研究生活支援を行った。 また、中国政府派遣研究員の受入大学等に研究支援費（一人あたり 21 万円）を支払った。本年度は 3 月に発生した原発事故等の影響により、本国へ一時帰国した研究員があったため、受入教授に原発事故後の指導状況について確認の上、研究支援費の支払いを行った。

３－２．　生活・研究の円滑化への支援

平成 23 年 4 月から 9 月に滞在した 24 名の中国政府派遣研究員および大学等事務局からの電話、メール等による生活・研究関連の相談に応じ、的確な支援を行なった。

３－３．　日中間対話の実施

中国政府派遣研究員と日本の専門家とが合宿形式で討議する機会を設けた。テーマは福島第一原子力発電所での事故を受け「原発事故後の日中関係と今後の展望」とし、意見交換を行った。その結果は中国政府派遣研究員のホームページに掲載した。

対話課題	日本人専門家	実施日	実施場所	中国側研究員
原発事故	日中創研（株） 浅香哲男社長	平成 23 年 7 月 28 日、29 日	フォレスト 本郷	5 名

３－４．　帰国後の活動に資する体験の機会の設定

中国政府派遣研究員が大学等研究機関や民間企業を訪問し、視察と情報交換を行う機会を設定した。訪問先機関については、中国政府派遣研究員の希望に基づき、震災、太陽エネルギー関連の京都大学防災研究所、京セラ本社および同社ファインセラミック館とした。

課　題	実　施　日	訪　問　先	参加研究員数
防災	平成 23 年 6 月 16 日 木曜日	京都大学防災研究所 京都府宇治市	11 名
太陽エネルギー	平成 23 年 6 月 17 日 金曜日	京セラ本社 京都府京都市	11 名

３－５．　帰国した中国政府派遣研究員等への調査

中国政府派遣研究員の派遣実績の多い大学等研究機関が所在する都市の中から過去に訪問実績の無いウルムチ市と昆明市の大学を訪問した。また中国政府派遣研究員の選考・派遣事業を担う国家留学基金委員会（CSC）を訪問し中国人学生・研究員の海外派遣状況等につき聴取した。

面談調査実施日・場所	面談調査者氏名	面談調査者所属
平成 23 年 11 月 8 日 於：新疆ウィグル自治区 　ウルムチ市	レケビ　イミティ ズリフェア　アマヌーラ レシアティ ダウライティ パインチャハン　ガイリケ	新疆大学経済管理学院 新疆大学芸術設計学院 新疆農業大学食品科学学院 新疆農業大学獣医学院
平成 23 年 11 月 10 日 於：雲南省 　昆明市	タン　ショオチ ワン　レイ ジン　シャオピン ワン　フイメイ ガオ　フェイ	雲南省公路科学技術研究所 雲南省公路規制勘察設計院 雲南大学西南辺疆少数民族研究中心 昆明学院 雲南省第一人民医院

平成 23 年 11 月 11 日 於:北京直轄市	ジョウ ジェン	国家留学基金委員会欧亜阿事務部

３－６．　中国政府派遣研究員及び受入研究者･受入研究機関への調査

中国政府派遣研究員の帰国に際し、中国政府派遣研究員本人、受入研究者、大学等事務担当者へのアンケート調査を行った。また、神戸大学、九州大学を訪問、研究員、受入教授に面談し共同研究状況等について調査を行った。

３－６－１．　アンケート調査

①　中国政府派遣研究員　（該当34名）

･･･来日の動機、受入研究機関、研究者の選定、共著論文等の成果を挙げるための方策などについて

②　受　入　研　究　者　（該当34名）

･･･受入基準、共同研究環境、共著論文等の共同研究発展等について

③　受入機関事務担当者　（該当17名）

･･･中国政府派遣研究員受入制度の改善のための研究環境及び生活環境等について

３－６－２．国内大学訪問調査

- 平成23年4月15日(金)　神戸大学大学院農学研究科
- 平成23年5月27日(金)　九州大学大学院医学研究科

３－７．外国人研究者受入についての調査

優秀な外国人研究者を我が国へ呼び込むための施策の検討に向けた現状把握のため、全国の研究機関にアンケートやヒアリング調査を実施した。また委員会を組織し受入方策等について議論、検討を行った。調査の結果詳細は別冊「『外国人研究者受入についての調査』報告書」にまとめる。

調査項目	調査内容	対象機関	回収率
アンケートA	外国人教員、研究員支援のための環境整備の状況について	独法、国研、民間の78機関 （平成22年度科研費採択上位機関から選択）	75%
アンケートB	全般の詳細調査	全310機関（上記78機関＋232大学）	75%
ヒアリング	全般（特にワンストップセンター、マニュアル、緊急時の情報伝達について）	《一次調査》九州大学、立命館アジア太平洋大学 沖縄科学技術大学院大学、京都大学 《二次調査》東京工業大学、早稲田大学、物質･材料研究機構、産業技術総合研究所、理化学研究所、高エネルギー加速器研究機構	

4．本年度の研究課題について

Ｉ．中国からの派遣研究員の状況と調査

【国費留学生・訪問学者制度について】

CSC は過去 10 年間毎年 1300 名を海外に派遣し、日本には 500-700 名を派遣している。PhD 課程への留学生が主で、日本への 500-700 名の内、400-500 名を占めている。したがって訪問学者は１００－２００名である。

派遣期間は PhD 課程が 4-5 年、訪問学者（中国政府派遣研究員）は 3-12 ヵ月である。

帰国した国費留学生・訪問学者は（海外での研究成果を国家に還元すべきとの考え方で）帰国後 2 年間は短期渡航を除き国内に留まることが義務となっている。帰国後 3 年目以降は私費留学、外国の招聘にて国外渡航は可能だが、国費の Funding 申請は帰国後５年後以降に可能としている。

【中国政府派遣研究員制度】

概ね１５年以上教職、研究経験を有し、かつ、日本語能力が相当程度に達していると認められる研究員を、受け入れ研究機関等で行われる研究に参加させることにより、当該研究員の研究能力の向上と受け入れ研究機関等における学術の発展を図ることを目的としている。受け入れ機関は６カ月または１年とし、往復旅費と滞在費は中国政府が負担し、受け入れ環境の整備に要する経費（研究支援費という）を日本政府が負担する。（１６年度報告書２０頁に概略説明。）

【中国政府派遣研究員の受け入れに伴う調査研究】

「研究環境国際化の手法開発」（１５年度、１６年度）の方針を受けて、中国政府派遣研究員の受け入れを進めつつ、文部科学省において、「外国人研究者とのネットワーク構築に係る調査研究」（１７年度、１８年度）、「アジアにおける国際活動の戦略的推進のための外国人研究者受入れ促進手法開発」（１９年度～２１年度）、「国際共同研究推進のための研究者受入促進・ネットワーク強化に係る調査研究」（２２年度～２３年度）の調査研究を行った。

中国政府派遣研究員の受入れ実績

年度	中国政府派遣研究員　受入者数				
	合計	国立大学	公立大学	私立大学	その他研究機関
平成 15 年度	125	123	0	0	2
平成 16 年度	91	74	1	16	0
平成 17 年度	101	79	1	20	1
平成 18 年度	104	90	1	11	2
平成 19 年度	39	25	2	11	1
平成 20 年度	59	41	4	13	1
平成 21 年度	53	39	2	11	1
平成 22 年度	62	46	1	15	0

Ⅱ．具体的な本年度の調査研究活動で得た成功事例と諸課題

１）アジア諸国をはじめとした外国人研究者が我が国で研究活動を行ううえでのより良い環境作りの成功事例と諸課題

①中国政府派遣研究員

雲南省公路科学技術研究所 チーフ エンジニアのタン ショオチ氏（譚 暁琦）は橋梁の専門家で 2009 年度に６ヵ月間東北大学に派遣され、科学技術は世界広く交流する必要があると考える所属する職場から、帰国後日本での研究成果が同研究所にとり役立つものと高く評価される結果を生み出した。このことは同氏所属の研究所が海外との交流を促進することに好影響をもたらし、具体的なチャンネルが乏しい現状であるが、機会があれば同研究所の人材をより多く海外へ派遣する環境を醸成する効果にもなっている。

②外国人研究者全般

２３年度に新たに行うこととなった外国人研究者全般の研究活動を行う上でのより良い環境作りについては、主要大学、独立行政法人研究機関等３１０機関にアンケートを配布し、２３４機関（７５．５％）から回答。この中から、国際化対応の顕著と見られる代表的な１０大学・研究機関、すなわち京都大学（国戦採択機関）、九州大学（国戦採択機関）、東京工業大学（国戦採択機関）、早稲田大学（国戦採択機関）、物質・材料研究機構、産業技術総合研究所、理化学研究所、高エネルギー加速器研究機構、沖縄科学技術研究基盤整備機構、立命館アジア太平洋大学を訪問しインタビューを実施した。

その結果、ワンストップセンターの設置・業務概要、アウトソース、マニュアルの整備概況、文書英文化、研修の実施状況、個別の生活支援（ビザ手続き、入居手続き、住環境の整備、事故緊急時の対応、診療手配、銀行関係の手続き、日本語教育、子弟就学の支援、自動車関係の支援等）の進め方、さらに今回は特に受託直前に起こった東日本大震災に対応した緊急連絡体制、緊急時の情報伝達の方式、防災訓練、オリエンテーション、表示など具体的危機対応などを詳細にヒアリングし、受入体制の整備の具体的方策をまとめることができた。

今回の調査の過程で、外国人研究者の生活支援に当たっては、必ずしも従来社会的・制度的な隘路として認識されてこなかった問題が摘出された。具体的には生活支援業務については、その業務性、資金支出の妥当性が明確になっていないこと、医療支援の現場においては、医療通訳と医療コーディネートの業務が混在することにより、行うべき業務内容と責任範囲が不明確となっていることなどが摘出された。

２）我が国で研究活動を行うアジア諸国の研究者が帰国後に我が国の受入機関との継続的・発展的な交流促進に携わる上での成功事例と諸課題

①中国政府派遣研究員

日本の受入機関や受入研究者との交流は、研究者個々人によりその頻度、内容、形態などに異なりがあるが、継続的に交流が成されている事例は多数認められる。一例に、ワン フイメイ氏（王　会玫）が挙げられる。同氏は現在雲南省立昆明学院数学系の教員にて 2010 年度に大阪大学に在籍し、帰国後も受入教授より継続的な指導を得て共同論文を国際的ジャーナルに発表した。また、受入教授の研究は同氏にとり新たな視点を与えるものであり、

今後も発展的に学び将来は大阪大学にてのPhD取得を目指すとしている。加えて、同氏にとり高名な自国の数学者が以前受入教授を訪ねた経緯を通じ、同数学者と繋がりを自ら作るなど日本での研究経験を積極的に利用している。

他事例として、2008年から2009年の一年間帯広畜産大学に派遣された新疆農業大学在籍のバインチャハン ガイリケ教授（巴音査汗 盖力克）のケースでは、派遣先の大学でPhDを取得し、帰国後も受入教授との継続的な研究情報交換に加え、研究分野を共にするその他日本の複数の大学とも日常的なコンタクトを行っている。また、派遣先の大学とは姉妹校関係にあり、非定期的ではあるが派遣先大学学長や同校関係教員による訪中を通じた人的交流が発展的に継続している。同教授が在籍する新疆農業大学では、新疆ウィグル自治区が隣接する８ヵ国（モンゴル、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、印度、ロシア）の諸大学とも交流を行っており、同教授も自身の研究分野（原虫）ではモンゴル、カザフスタン、キルギスの諸大学と交流を行っている。

中国政府派遣研究員は受入教授・研究室への再訪はもとより、進んだ実験設備が整っているなど研究を行いやすい環境にあるとして機会があれば再訪日したいと希望している。一方、中国政府派遣帰国後 2 年間は国内に留まることが義務づけられているため、外国での国際会議への短期招聘などを除き、その間の人的交流環境には制限がある状況となっている。上述のワン氏をはじめ今回面談調査を行った元中国政府派遣研究員ほぼ全員が、受入教授による中国への来訪を交流の機会として期待する実状にある。また日常的には、研究情報入手に受入教授・研究室とのメール交換、インターネットの利用、中国国内学会出席などの方法が多く実践されている。

３）アジア諸国の研究者が中心となって国際共同研究計画書を立案するためのネットワーク形成や研究活動の支援のための諸課題

①中国政府派遣研究員

多くの元中国政府派遣研究員は帰国後も派遣先の受入教授・研究室などとの継続的交流を通じ国際共同研究を遂行する重要性を認識しており、日常的な研究遂行の中、具体的な国際共同研究に携わる事例は少ないのが実状だが、現在雲南大学在籍のジン シャオピン教授（金 少萍）は2008年から2009年の一年間東京外国語大学に派遣された。

同教授は雲南ナシ族の研究で京都大学、國學院大學と交流を継続しており、昨年京都大学との共同研究会に来日出席を果たした。また、派遣元大学の雲南大学への定期的訪問では相互に研究発表を行っている。その他、同教授が所属する西南辺疆少数民族研究中心では、国立民族学博物館、東京大学、京都大学、地球環境研究センター（国立環境研究所）、九州大学、國學院大學、並びに東南アジア、韓国、オーストラリア、イギリス、イタリア、フランス、米国と人的交流と共同研究を行っている。

また、上述の新疆農業大学在籍のバインチャハン ガイリケ教授（巴音査汗 盖力克）は自身の研究分野で帯広畜産大学及び米国オハイオ州立大学と従来から国際共同研究を行っており、視野を広げるうえでも有意義と考えている。また、現在新疆科学技術庁のプログラムに申請中(3年間で合計100万元)だが､近年は申請件数が増加し競争的になっている、としているが、教授は自身の研究に大学院生を抱えるためには生活支援費をねん出する必要があり、そのためにもプロジェクトへのファンディング獲得は必須の状況にある。

５．調査／実施結果

５－１．中国政府派遣研究員のための日中間対話の実施結果

（１）実施概要

日時：平成 23 年 7 月 28 日（木）14:30　～　7 月 29 日（金）11:00

場所：フォレスト本郷（東京都文京区本郷）

形式：合宿形式

（２）対話テーマ

中国政府派遣研究員に対して議題の希望を聴取し、「原発事故後の日中関係と今後の展望」とした。

（３）出席者（敬称略）

【講師】日中投資創研　代表取締役社長　浅香哲男

【中国政府派遣研究員】（５名）

・九州大学（山東大学斉魯病院）　劉徳山

・東京工業大学（ハルピン工業大学）　劉福

・東京大学（中央民族大学）　阿里穆斯

・早稲田大学（中国政法大学）　薄燕娜

・早稲田大学（大連理工大学）　由志慎

（４）プログラム

【7 月 28 日（木）】

14:30-14:45　開会の挨拶、連絡事項

14:45-18:00　講師、中国研究員の意見発表

18:30-19:30　夕食

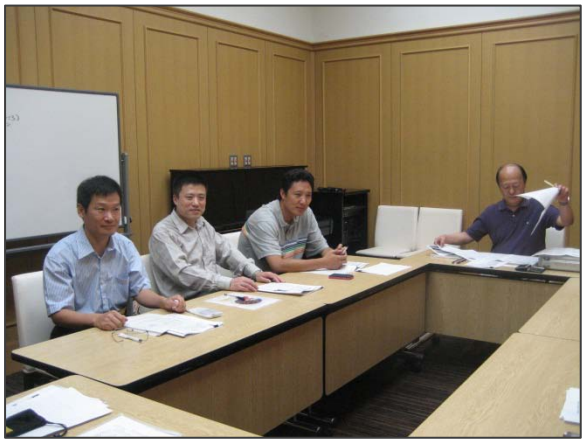
20:00-21:30　引き続いて対話

22:00-23:30　懇談会

【7 月 29 日（金）】

9:30　全体纏め

11:00　閉会



（対話の様子）

（５）講演・対話について：

はじめに最近の日中関係、原発の問題等について浅香講師から講演を頂いた後、中国政府派遣研究員から今年度の議題について意見発表を行った。

① 浅香講師の講演の内容について

・中国では最近儒教が注目されており、中国語の普及を国家戦略として「孔子学院」を拡大中
・最近の中国の外商投資企業の現状、特に成長著しい私営企業の現状の紹介
・中国に進出している日系企業は５万社を超え、中国抜きに日本の企業は成立たない。
・様々な問題は起こるが、隣国は選べないので良好な関係を保つ必要がある。
・日本は外国で物を販売する力が乏しく、また外国人を使用するのが極めて下手
・中国人は商業民族であり、品質管理と安全対策が不得手
・両国民の欠点を補って相互協力が出来ることが多くある
・中国は今後も農村改革（農民は7.2億人で余剰労働力が眠っている）を進め、改革・活性化路線を進めて行く
・中国は世界的な市場に変貌しつつあり、近々米国を上回る市場となろう
・日系企業においては人的資源の確保と管理の問題が深刻化してきている（人口は多いが良い人材は少ない)。
・日中は漢字を使い、箸で食事をする点を除けば、全く異文化圏の民族。この違いを双方とも十分認識する必要がある。
・高コスト、労働力不足、円高に苦しむ日本企業の海外進出は、これまでは工場移転型であったが、地震・津波による放射能汚染や電力不足により、中国への企業そのものの移転が進み、日本の産業空洞化は避けられないかもしれない。

② 中国政府派遣研究員の発表内容

・多くの中国人は大震災・津波にあっても、秩序を保ち、堪え忍ぶ被災地の姿に驚き、その忍耐力を評価し、これからの復興に注目している。
・日本人と中国人の水産技術研修生を差別することなく救助した日本人が津波で犠牲となった。多くの中国人がこれに感動し、自発的に募金活動が起こり、中国国民の対日感情が改善される一歩になった。
・原発後の日本政府（含む東電）の対応の遅さ、情報開示の不備、特に放射能物質を海に投棄した行為には大変不満で驚いている。
・中国もこれまで多くの自然災害、電力不足に直面しており、今回の災害の教訓から今後、自然災害・原発の安全運転について日中で協力を行うことが可能である。
・日本は自然災害が多い国で、その緊急体制が整っており、防災訓練、緊急情報発信システムが確立されていると思う。
・中国は防災・災害対策は政府主導であり、この面で日本から学ぶところがたくさんある。
・原子力発電の安全性について、今後日本から多くの経験を学んで行く必要がある。
・原発事故の処理で人為的なミスが明らかになってきたが、原発周辺の住民、日本国民、周辺諸国に対する社会的責任をより一層強化する必要がある。

・海への放射能物質の排出は、周辺の漁業への影響に留まらず、太平洋周辺諸国にも影響を及ぼす大きな問題である。
・情報開示、国民が知る権利は、国際社会からの信頼を得るために欠かせないもので、今回の原発事故での日本政府の情報開示が遅れ不満な声が挙がっている。
・中国の四川省大震災では日本からの救援隊の対応が、中国国民の好感を呼び、今回の中国からの救助隊派遣・支援物資に対し、日本国民からの感謝の声が聞こえる。
・中国メディアは今回の災害を大きく報道し、災害地の頑張っている人の姿、計画停電など国を挙げての復興対策に感動している。
・今回の災害、長引く原発処理、放射能対策は、外国人研究者の心理、日常・研究生活などに大きな影響を与えている。
・未だ続く余震、周辺地域への放射性物質の拡散、お茶・野菜・牛肉他の食品汚染、放射能汚水などの環境汚染が報告され心配である。
・今日本が直面している多くの問題について、日中間の科学技術交流を更に強化し、問題解決にあたることが期待される。
・短期の両国の学術交流、研究者相互訪問などによって協力することを期待している。

③ その他

・中国政府派遣研究員は各研究員のコミュニケーション能力の差もあったが、各人の意見、発言を十分尊重し取り進めた。
・日本と中国は一衣帯水と言われるが、まだまだ日中間の相違は大きく、そのギャップを互いに理解し、認め合うことが基本である。
・今回話し合ったことをこれからの学術交流に是非役立てて欲しい。

５－２．帰国後の活動に資する体験（企業、研究機関訪問）の実施結果

平成 23 年 10 月来日の中国政府派遣研究員に訪問先の希望を聴取したところ、東日本大震災を受け地震・防災、並びに最近注目されている太陽エネルギーの観点が挙げられ、京都大学防災研究所と京セラ本社・同社ファインセラミック館を訪問することとした。

■ 日程・訪問先

平成 23 年 6 月 16 日（木） 京都大学防災研究所（宇治市）
平成 23 年 6 月 17 日（金） 京セラ（株）本社（京都市）

■ 参加者 中国政府派遣研究員 11 名

受入機関	氏 名	中国所属	所 在
東京外国語大学	満全	内蒙古師範大学	内モンゴル自治区
東京工業大学	馮毅雄	浙江大学	浙江省
東京工業大学	宋李俊	重慶理工大学	重慶市
京都大学	郭永利	遼寧大学	遼寧省
東京大学	劉青	華南師範大学	広東省
東京大学	那仁朝格図	内蒙古大学	内モンゴル自治区

名古屋大学	孫啓鵬	長安大学	陝西省
北海道大学	韋山良	広西医科大学病院	広西チワン族自治区
北海道大学	馬軍	寧夏回族人民病院	寧夏回族自治区
東京大学	阿里穆斯	中央民族大学	北京市
早稲田大学	王美華	遼寧大学	遼寧省

（1） 京都大学防災研究所訪問

防災研究所の王博士に約2時間の講義を頂き、その後同研究所内実験設備他を案内頂いた。通常、同防災研究所の外部者の見学は難しいが、今回も中国政府派遣研究員の公式行事との観点から特別に引き受けて頂いた。

講演を依頼した王博士は京都大学の大学院・博士課程を経て、16 年日本に滞在し現在同研究所助教。これまで四川大地震他災害現場での日中共同調査研究の経験等から中国と日本の調査研究の進め方、更に中国人研究者が注意すべき論文執筆について助言を戴いた。

京都大学の防災研究所の歴史は古く、1951 年に地震、地質関連の京大理学部と耐震建築・土木関連の同大工学部との横割りの組織でスタートし、その後、阪神大震災の後に被害者の心のケアに関する心理学等も含め、自然災害全体の予知、総合防災全般に取り組む世界的な綜合研究機関である。

現在約 100 名の常勤教授他と約 200 名の大学院・博士課程学生、更に海外からの研究者、研修生約 50 名が同宇治キャンパスで研究を行っている。中国の大学・研究機関との交流協定に関しては、清華大学、北京師範大学、中国科学院等があり、他のアジア国では韓国、台湾、ベトナム、ネパール、インド、インドネシア、バングラディシュ、フィリピン、欧米ではイギリス、フランス、イタリア、オーストリア、米国、カナダの大学・研究機関と学術協定がある。

王博士から日中の研究者の研究に取り組む姿勢の相違点や日本人教授に対する尊敬・礼節を重んじることなどご自身の経験に基づいてお話し頂いた。中国では各研究者は上層部から研究課題、締切時期等を一方的に命じられ、それに基づいてその課題を達成するのに対し、日本では研究者の自主性が尊ばれノルマや具体的な指示は与えられない。初めて日本に来た中国の研究者は、受入教授から研究に関して指示がないのでどうしていいのか判らず、自分で目標、計画を立てられず孤独になり、疎外感を持ってしまうことがあるので注意すべきであるとのことであった。

（京都大学防災研究所訪問）

（王博士の研究室・・地滑りの計測器の説明）

(2)　京セラ本社・ファインセラミック館　訪問

京セラ本社では広報室　井上　敬司広報管理副室長に面談した。

京セラは太陽光発電のパイオニア企業であり、中国では天津に製造工場を有するなど中国との関係を非常に重視しており、今回特別に中国政府派遣研究員の訪問を受けて貰った。

中国からの政府要人他来賓・接客に慣れており、中国語版のDVDビデオで同社の企業理念、歴史、製品紹介、会社概要他の紹介があった。

同社は早くから太陽エネルギーに着目し、特に、本社ビル屋上をすべて太陽電池パネルで覆い発生した電気を本社で実際に使用するなど、地球環境保護を重視している。

ファインセラミック館では時系列的に同社の企業活動、製品開発の過程を英語と日本語の両方で分かり易すく説明がなされ、中国政府派遣研究員にもよく理解が得られた。

（京セラ本社での講演）

（ファインセラミック館訪問）

５－３．帰国した中国政府派遣研究員等への調査

（1） 日程

平成 23 年 11 月 7 日（月）～同 13 日（土）

（2） 訪問先

① 新疆ウイグル自治区ウルムチ市（平成 23 年 11 月 8 日）

② 雲南省昆明市（平成 23 年 11 月 10 日）

③ 北京直轄市　（平成 23 年 11 月 11 日）

（3） 訪問の目的

平成 23 年度は、帰国後のフォローアップの調査として従前の対象地域（平成 19 年度：北京直轄市、同 20 年度：上海市、蘇州市、同21年度：大連市、同 22 年度：ジャムス市、内蒙古）以外で中国政府派遣研究員の派遣実績の多い大学等研究機関が所在する都市の中から2カ所（ウルムチ市、昆明市）を選定・訪問した。

インタビューの対象者は平成 19 年度以降同 23 年度まで過去 4 年間来日したウルムチ市及び昆明市に所在する大学等研究機関在籍の「帰国した中国政府派遣研究員」とし、その対象者数はウルムチ9名、昆明5名の合計 14 名であった。

調査の目的は、次の項目について調査を行うことである。

⑴ 日本の研究機関、研究者との交流の状況、及び交流の継続・発展促進のための活動

⑵ 帰国後のキャリアパス

⑶ その他日本での生活環境

なお、雲南省では譚暁琦氏（インタビュー対象者）より別途同氏職場幹部との面談要請を現地で受け、雲南省公路科学技術研究所を訪問面談した。

また、帰国した中国政府派遣研究員等への調査については、前回まで国家留学基金委員会へ訪問に当たって調査の斡旋を依頼し、現地調査の結果を報告すると同時に同委員会との意見交換が出来たが、今回は後述の理由で同委員会の斡旋を得られなかったため、調査の帰路、北京で同委員会に長年にわたる協力と今回の調査の謝意を表しに赴いたところ、欧亜阿事務部周俭氏と会見し意見交換することができた。

【インタビュー調査場所・実施日・対象者】

①（新疆ウィグル自治区ウルムチ市、平成 23 年 11 月 8 日）

1. 热克比(レケビ)・依米提(イミティ)（Rekebi YIMITI）新疆大学　経済管理学院 講師
   (2009 年来日　横浜国立大学（経済）男性　41 歳)
2. 祖丽菲娅(ズリフェヤ)・阿马努拉(アマヌーラ)（Zulifeya AMANULA）新疆大学　芸術設計学院 副教授
   (2010 年来日　日本大学（芸術）女性　47 歳)
3. 熱夏提（レシアティ）・达吾来提（ダウライティ）（Rexiati DAWULAITI）新疆農業大学 食品科学学院 講師
   (2010 年来日　神戸大学（科学）男性　38 歳)
4. 巴音查汗（バインチャハン）・盖力克（ガイリケ）（Bayinchahan GAILIKE）新疆農業大学

獣医学院 教授
(2008 年来日 帯広畜産大学(生物)女性 47 歳)

②(雲南省昆明市、平成 23 年 11 月 10 日)
1. 譚(タン) 暁琦(ショオチ) (TAN Xiaoqi) 雲南省公路科学技術研究所 チーフ エンジニア
(2009 年来日 東北大学(工学)女性 49 歳)
2. 汪(ワン) 磊(レイ) (WANG Lei) 雲南省公路規制勘察設計院 橋梁結構工程師
(2008 年来日 早稲田大学(工学)男性 33 歳)
3. 金(ジン) 少萍(シャオピン) (JIN Shaoping) 雲南大学 西南辺疆少数民族研究中心 教授
(2008 年来日 東京外国語大学(言語文化)女性 53 歳)
4. 王(ワン) 会玫(フイメイ) (WANG Huimei) (雲南省立)昆明学院 数学系 教員
(2010 年来日 大阪大学(数学)女性 32 歳)
5. 高(ガオ) 飞(フェイ) (GAO Fei) 雲南省第一人民医院 主治医師
(2008 年来日 東京医科大学(医学)男性 38 歳)

③(北京直轄市、平成 23 年 11 月 11 日)
1. 周(ジョウ) 俭(ジェン)(Ms. ZHOU Jian) 国家留学基金委員会 (China Scholarship Council)
欧亚非事务部(欧亜阿事務部)

【インタビュー調査者】
1. 福田修一 (社)科学技術国際交流センター 参事役
2. 宮緒肖音 同外国人研究者サポートセンター 主事

(4) 調査結果
① 日本の研究機関、研究者との交流の状況、及び交流の継続・発展促進のための活動
ア. 受入教授との交流
受入教授との交流は積極的に行われている者も、ほとんど連絡を取っていない者もいて一概には言えない。進んでいない事例においても、教授との交流は有用、必要と考える意見が多かったが、研究者自身と同様受入教授にも交流の経験がなくその進め方が判らないのが実状である、受入教授等を招聘しレクチャーを頼みたいが実現のための情報を必要としている、受入教授には来訪してもらうため「外国専門家招聘制度」の適用申請を行う考えである、などの意見が出された。
新疆農業大学食品科学学院に在籍のレシアティ ダウライティ氏は 2011 年 9 月に神戸大学での 1 年間の派遣研究を終了し帰国したが、受入教授の豊富な知識に驚かされ、学ぶことが多々あるとし、今後のコンタクト継続に意を強くしている。同氏は派遣研究において理論面での習得に一定の目途を持つに至ったが、日本で進んでいる応用について受入教授とのコンタクト継続を通じて学ぶ意向をもっている。この一環として受入教授を招聘し、自身の置かれた現地研究環境を実際に観察してもらって、研究分野 (食品加工) での問題点を指摘願いたいとしている。
イ. 受入教授以外との交流

これも受入教授との交流同様積極的に行われている者も、ほとんど連絡を取っていない者もいて一概には言えない。進んでいない事例においても、交流機会を望んでいるが実現が難しい状況にあるとの回答が多かった。成功しているものは、日本人の研究仲間がおり、自身と同じ分野で共通の研究課題を有している場合や、派遣先大学からは毎年来訪あり、日本の研究発表を予定しているなどの恵まれた環境にある研究者もいた。

雲南大学西南辺疆少数民族研究センターのジン シャオピン教授は 2008 年から 1 年間東京外国語大学に派遣されたが、同大学は雲南大学に毎年訪問し研究発表を行っている。これは研究者個人の枠を越えた大学組織としての交流としても継続されているもので、研究者にとり研究情報や意見交換の機会として刺激となっている。

ウ．国際共同研究について

国際共同研究については成功している事例は未だ少ない。成功している一部の研究者にあっては、所属する大学機関が、日本においては関係分野が共通する大学、研究機関等と人的交流及び共同研究を行っており、また自身の分野では日本の大学と交流しており、日本で共同研究会があり訪問したこともあったなど恵まれた条件が見られた。

この事例は上述のジン シャオピン教授（雲南大学西南辺疆少数民族研究センター）が 20 年前から交流を継続している京都大学との共同研究会で、2010 年に宮崎県で開催され自ら出席が可能となったケースである。

また、新疆農業大学獣医学院に在籍のバインチャハン ガイリケ教授は姉妹校である派遣先大学（帯広畜産大学）、酪農学園大学以外にも日本大学、北海道大学と日常的な交流を継続しているが、帯広畜産大学原虫センター及び米国オハイオ州立大学と共同研究を行っている。国際共同研究は考え方を広げるもので重要であるとして、現在新疆科学技術庁のプログラムにも積極的に申請を行っている。

② 帰国後のキャリアパス

キャリアパスへの直接的影響を回答した例は少なかった。今回の訪問地域（ウルムチ市、昆明市）にある大学や研究機関においては海外への政府派遣研究員を評価するメカニズムが十分できていないと考えられる。

ただし、キャリアパスへの間接的影響については、論文の生産性の向上、競争的資金の申請の質の向上、PhD の取得への便宜、教室の教育の質の向上が顕著に見られるとの回答が寄せられた。

また訪問した機関の一部では、中国でも、各大学間で海外留学経験を有する教師の割合の多寡が大学評価に繋がり、日本への派遣はその一翼を担うこととなるという意味での高い評価も見られた。

今回調査では具体的な形での検証事例は見出し難い結果となったが、雲南省公路科学技術研究所のタン ショオチ氏については、同氏研究所の最高幹部から他多数の幹部も同席する中、「同氏が日本から成果を持ち帰り、当研究所にとって役立っている」との評価を所属機関としての謝意とともに直接聴取する機会を得た。キャリアパスを左右する要因は様々であろうが、このケースでは中国政府派遣研究員としての実績が同氏にとりプラス要因となった証左と考えられる。

③ その他日本での生活環境

生活環境については、業務項目“⑦外国人研究者受入についての調査”で研究機関等に対し中国人研究者に限らぬ外国人研究者の受け入れ調査を行っているが、この時使った質問表の質問で採用できる項目を帰国した中国政府派遣研究員に質問してみることとした。その結果を[別表1]に示す。

研究機関等に対しおこなった外国人研究者の受け入れ調査より中国政府派遣研究員の日本における生活支援などの評価が高い傾向が見られるが、これは他の国に比較して中国人研究者が多数であるため中国人同士のネットワークが機能しているため不便が感じられないこと、特に東京では後楽寮などの中国人専用の住居があることなどに起因していると見られる。

[別表1]

「帰国した中国政府派遣研究員等へのアンケート調査」

アンケート配布数　10 名

回答者合計　10 名

回収率　100%

1. 派遣期間中日本での生活環境面での支援について

	項　　目	有 (実数)	無 (実数)	回答なし (実数)	合計 (実数)
1-1	派遣先機関での日本の生活に役立つハンドブックまたは HP の整備有無	9	1	-	10
1-2	上記該当のハンドブックまたは HP において地震等緊急時に関する内容の有無	8	2	-	10
1-3	地震等緊急時に特化した独立したハンドブックまたは HP の整備有無	7	2	1	10

2. 研修等について

	項　　目	有 (実数)	無 (実数)	不明 (実数)	合計 (実数)
2-1	派遣先機関での日本の生活に関する研修の有無	5	5	-	10
2-2	上記設問に該当する研修において地震等緊急時に関する内容の有無	7	3	-	10
2-3	上記設問に該当する研修とは別に地震等緊急時に特化した研修の有無	4	5	1	10

3. 研修間のネットワークについて

	項　　目	有 （実数）	無 （実数）	不明 （実数）	合計 （実数）
3-1	派遣先機関とのネットワーク維持の有無	10	－	－	10

4. 具体的生活支援業務について

	項　　目	十分行われた（実数）	行われた（実数）	必ずしも十分でない（実数）	行われなかった（実数）	自分で行った（実数）	該当なし（実数）	合計（実数）
4-1	入居のための住宅手配	5	3	－	1	1	－	10
4-2	電気、ガス、水道、電話の開設等の住居環境の整備	5	2	1	1	1	－	10
4-3	ビザ手続きへの支援	6	1	－	2	1	－	10
4-4	診療のための手配	5	2	1	－	1	1	10
4-5	自動車保有・運転のための手続き支援	－	－	－	5	－	5	10
4-6	銀行関連の手続き支援	5	1	－	2	2	－	10
4-7	子弟就学への手続き支援	1	－	－	3	－	6	10
4-8	日本語教育への支援	3	4	1	1	1	－	10
4-9	事故等緊急時の対応支援	1	3	1	2	－	3	10

5. 家族の教育について

	項　　目	有 （実数）	無 （実数）	該当無 （実数）	無回答 （実数）	合計 （実数）
5-1	子弟が就学した学校の有無	2	－	7	1	10

6. 派遣期間中の宿舎について

	項　　目	派遣先機関保有の宿舎（実数）	派遣先機関の借上宿舎（実数）	自己手配の民間アパート（実数）	その他（後楽寮）（実数）	合計（実数）
6-1	派遣期間中の宿舎の形態	6	－	－	4	10

7．地震等緊急時への準備対応について

	項　　目	有 （実数）	無 （実数）	無回答 （実数）	合計 （実数）
7-1	緊急時の対応についての不安の有無	1	8	1	10
	不安がある場合の具体的な不安の対象 （複数回答可）	実数			
	宿舎建物の損壊	1			
	家具等諸設備の物損	－			
	水道	－			
	下水	－			
	電気	－			
	ガス	－			
	宿舎エレベーター	－			
	飲料水等の物資不足	－			
	その他	－			

7-2．地震等災害時における情報伝達の手段と経路について

	項　　目	有 （実数）	無 （実数）	無回答 （実数）	合計 （実数）
7-2-1	派遣先機関の情報伝達責任者への認識の有無	5	5	－	10
7-2-2	情報伝達手段への認識の有無	7	3	－	10
	認識がある場合の具体的伝達手段 （複数回答可）	実数			
	館内放送	1			
	インターネット	5			
	電話	2			
	携帯電話	2			
	説明会の開催	1			
	告知板	3			
	管理人等の個別訪問	－			
	その他	－			

＊日本での生活環境をより良くするための意見（自由記述）

回答記載者　：　2名

	コメント
1	派遣機関・派遣先・派遣研究員三者の連携が必要。研究・学習の情報把握も行って欲しい。
2	交流の機会が少なく、機会が増えることを望む。

④ 雲南省公路科学技術研究所への訪問面談

＊事由：譚 暁琦氏（上記インタビュー対象者）より別途同氏職場幹部との面談要請を現地で受け実施したもの。

【面談出席者】

・王 永光 雲南省公路科学技術研究所 書記

・賀 建民 雲南省公路科学技術研究所 副院長

・譚 暁琦 雲南省公路科学技術研究所 チーフ エンジニア（元中国政府派遣研究員）

他、同研究所幹部9名

（王 書記 談）

･譚 暁琦先生は橋梁の専門家で、日本滞在中には JISTEC にお世話になり感謝している。

･科学技術は世界広く交流する必要があり、譚先生は日本から成果を持ち帰ってきてくれて、当研究所にとっても役立っている。

･日本の中国政府派遣研究員支援が終了しても、JISTEC が今後科学技術研究と技術的サービスに関し交流のプログラムを持つことを期待している。

･科学技術には国境が無く、若い研究者が外国に行って視野を広げることは必要である。

･譚先生とは JISTEC も今後とも直接コンタクトするようお願いしたい。また、これを機にこれからも交流機会を期待したい。

⑤ 国家留学基金委員会（China Scholarship Council、以下 CSC）

･国費留学生・訪問学者（中国政府派遣研究員等）は派遣先から一時帰国する場合、短期（1週間程度）を越える期間については事前許可申請を行うこととしているが、本年の東日本大震災の際では斯かる申請はなく、また派遣研究員及び家族等からの問い合わせも全く無かった。他方、CSC は日本への派遣研究員に対するコンタクトは一切行わなかった。

･CSC は過去 10 年間、13,000 名を海外に派遣し、毎年その中で日本には 500-700 名を派遣している。全体として PhD 課程への留学生が主で、 日本への 500-700 名の内、PhD 過程への留学生は 400-500 名を占めている。

･派遣期間は PhD 課程が 4-5 年、訪問学者（中国政府派遣研究員等）は 3-12 ヵ月である。

･帰国した国費留学生、訪問学者は帰国後 2 年間は短期渡航を除き国内に留まることが義務となっている。このことは、2 年間は国内に留まり海外での研究成果を国家に還元すべき、との考え方に立脚しているものと諒解する。帰国後 3 年目以降は私費留学、外国の招聘にて国外渡航は可能だが、国費の資金 (Funding) 申請は帰国後5年目以降に可能としている。

･日本への訪問学者（中国政府派遣研究員等）、留学生にとっては日本語習得の研修機会が十分提供されることが特に重要と思える。

･文部科学省による中国政府派遣研究員支援は終了したが、同省と中国教育部との従来の大学院博士課程の学生を対象にした留学・研究の相互交流を継続する傍ら、いずれまた中国政府派遣研究員支援の再開を期待したい。

⑥ ネットワーク形成について

平成17年度「外国人研究者とのネットワーク構築に係る調査研究」には委託契約の内容でネットワーク形成が掲げられており、帰国した中国政府派遣研究員への遡及調査を実施したが、当時イン

ターネットの整備の不十分から郵便や電話、受け入れ教授への問い合わせ等により調査を実施せざるを得ず、全国調査を行ったが調査の回答率は4年間で39．8％に止まった。
今回の調査に当たっては、直前に国家留学基金委員会の担当者の移動があったこと、既に文部科学省の中国政府派遣研究員への支援制度が終了していたことにより、同委員会から各地大学へのフォローアップの調査が難しい状況にあった。このため、JISTECでは訪日中のメールアドレスを使い、集中的に担当者が調査に当たった結果、ウルムチ市及び昆明市に限られるものの、100％の所在確認を行うことが出来、物理的に訪問が困難なものを除いた研究者を訪問することとした。訪問できなかった研究者も含めての補足状況は[別表2]の通りである。
このことからも、今後中国に関するネットワーク形成には次のような観点から調査を進めることが効果的と考える。
(1) 中国政府派遣研究員を必ずしも継続的でなく受け入れていた大学・研究機関、ないし受け入れ研究者がネットワークを形成するより、中国に対し継続的に調査・協力を行っている専門機関が集中的に調査する方が、調査ノウハウの維持、窓口の一本化の観点から効果的、効率的である（日本の受け入れ研究者からも、連絡の取れなくなった研究者について、判明した連絡先を教えてほしいという希望が JISTEC に寄せられている）。
(2) 特に特定地域に対してこのような専門機関が集中的に調査することにより、当該地域での訪日研究者のネットワークが形成できる（当該地域の中心研究者が関係機関と連絡を取ることにより、容易に彼ら自身のネットワークが構築できた）。今後このネットワークを活用すれば、安価かつ容易にネットワークの維持をすることが出来る。
(3) 訪日研究者の多くは日本への再訪問を希望しているし、今回の調査でも既に日本に再訪問しているために訪問調査できなかった研究者が相当数いることが判明した。中国からみれば隣国の一つであり、また日本から見れば良質の研究者を大量に供給できる中国は人材確保の観点から重大な関心を持って調査することが必要である。

[別表2]中国政府派遣研究員派遣実績大学等研究者の動静

	訪問日時	所属機関	Title	訪問学者氏名（中文）	訪問学者氏名（英文）	言語	所属
1	新疆ウイグル自治区ウルムチ市						
	11 月 8 日	新疆大学	Mr.	热克比·依米提	Rekebi YIMITI	日	経営管理学院講師
	11 月 8 日	新疆大学	Ms.	祖丽菲娅・阿马努拉	Zulifeya AMANULA	日・英	芸術設計学院副教授
	11 月 8 日	新疆芸術大学食品科学学院	Mr.	熱夏提・达吾来提	Rexiati DAWULAITI	日	食品科学学院講師
	11 月 8 日	新疆農業大学獣医学院	Prof. Dr.	巴音查汗・盖力克	Bayinchahan GAILIKE	日・英	獣医学院教授
	当日不都合	新疆科技厅(転職)→西鵬鋼結構工程有限会社	Mr.	吾米提・阿布力孜	Wumiti ABULIZI	日	(前職)開発中心エンジニア

	当日出張不在	新疆芸術学院	Mr.	艾孜买提・阿布都克里木	Aizimaiti ABUDUKE LIMU	日	美術学院 美術教育 教研室　主任
	在日本	新疆大学	Mr.	**居来提・热依木**	Julaiti REYIMU	日・英	教師(講師)
	在日本	新疆大学	Mr.	阿布都沙塔尔・买买提明	Abudushataer MAIMAITI MING	日	資源・環境学院　講師
	在日本	新疆財経大学	Mr.	艾合买提・尼亚孜	Aihemaiti NIYAZI	日・英	金融学院　助教授
2	雲南省昆明市						
	11 月 10 日	雲南省公路科学技術研究所	Ms.	譚 暁琦	TAN Xiaoqi	日・英	チーフエンジニア
	11 月 10 日	昆明学院	Ms.	王 会玫	WANG Huimei	日・英	数学系　教員
	11 月 10 日	雲南大学	Ms.	金 少萍	JIN Shaoping	日	西南辺疆少数民族研究中心 教授
	11 月 10 日	雲南省公路規制勘察設計院	Mr.	汪 磊	WANG Lei	日・英	橋梁結構工程師
	11 月 10 日	雲南省第一人民医院	Mr.	高 飞	GAO Fei	日・英	主治医師

（5）所感

今回の調査ではインタビューをおこなった全員が日本での研究経験を高く評価している。即ち、日本の研究水準と研究環境が自国で接するものよりも優れており、帰国した中国政府派遣研究員の多くが日本との研究を継続することを有益と考えている。例えば、派遣訪日後に受入教授の研究分野と多少のミスマッチが判明し、帰国後学習成果をそのまま使うことが困難となったケースでも、日本で得られた知見、経験に意義を見出し、役立たせる努力を積極的におこなっている。

帰国した中国政府派遣研究員には、日本での研究期間が 1 年間では短く 2～3 年を理想とする考えも多く、再訪日の機会を得たいとしているが、国費制度の適用には帰国後 5 年以降となるなどの制約もあり、俄かに実現し難い実状がある。帰国した中国政府派遣研究員にとり可能なことは、自らが日本との研究継続の意思と目的をもってメール送信などの方法で受入教授他関係者に対し日常的な接触を図ることであろう。日本側も斯様なアプローチには、積極的に対応する姿勢が期待されよう。

また、中長期的には日常の交流成果として日中関係機関相互での人的交流、共同論文の創作などに加え、姉妹関係の構築などを通じた組織的な交流に繋がる枠組み作りも更なる発展への課題となろう。

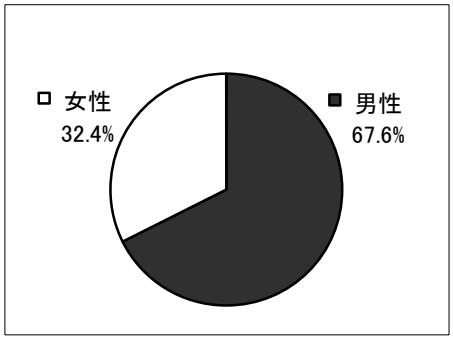
５－４．中国政府派遣研究員及び受入研究者・受入研究機関への調査

以下に中国政府派遣研究員 34 名、受入研究者 34 名、受入事務担当者 17 名より取得したアンケート調査の集計結果を示す。尚、調査結果の概要と３者より取得した意見等を比較分析した表を、別冊報告書第５章第３項（１）（P39-40）にまとめる。

５－４－１．「中国政府派遣研究員制度」派遣研究員アンケート結果

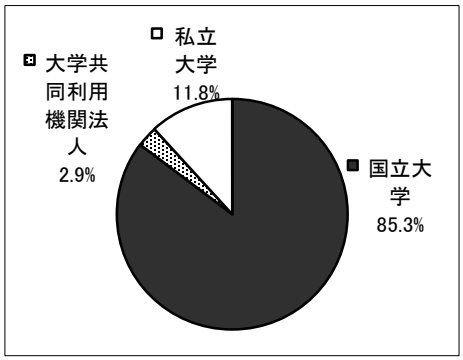
中国政府派遣研究員の基本データ

a.　中国政府派遣研究員の性別



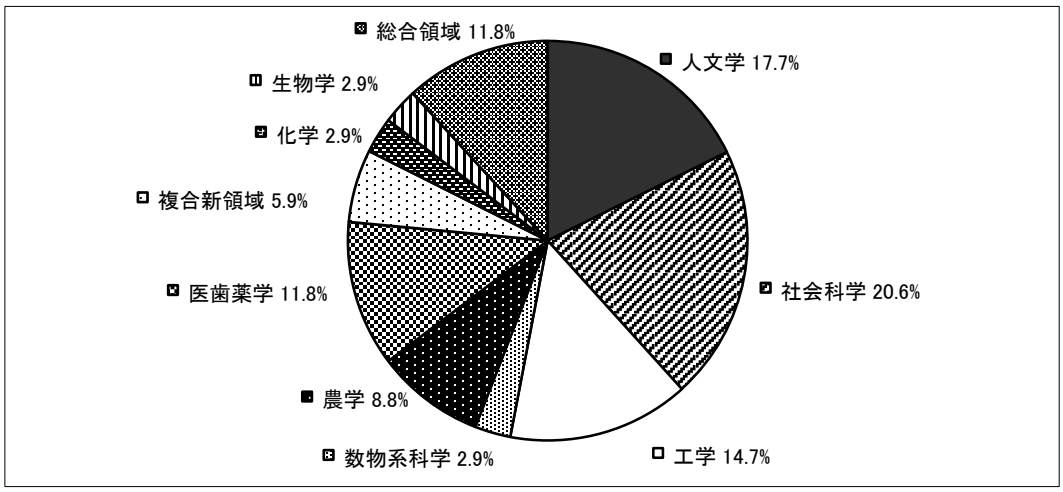
	全　体	男性	女性
名	34	23	11
%	*100.0*	*67.6*	*32.4*

b.　滞在研究機関



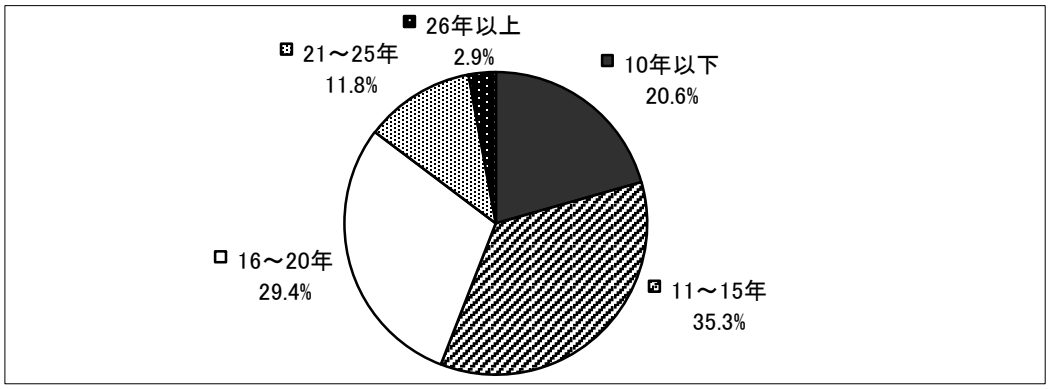
		全　体	国立大学	大学共同利用機関法人	私立大学
全　体	名	34	29	1	4
	%	*100.0*	*85.3*	*2.9*	*11.8*

c.　中国政府派遣研究員の研究分野



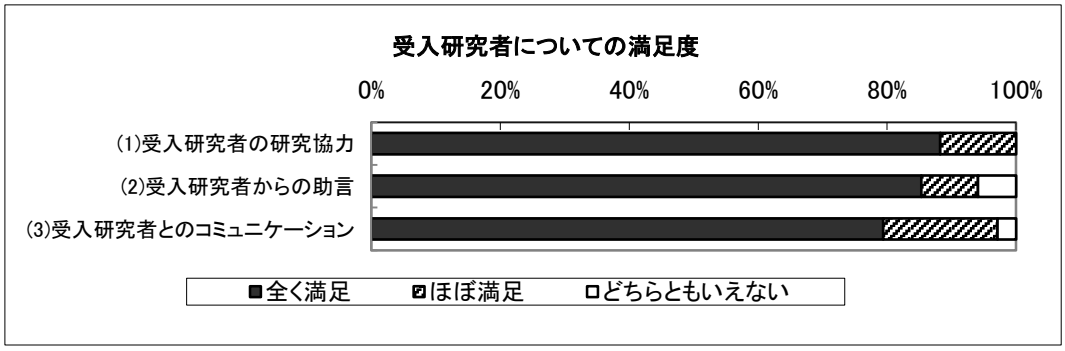
		全　体	人文学	社会科学	工学	数物系科学	農学	医歯薬学	複合新領域	化学	生物学	総合領域	無回答
全　体	名	34	6	7	5	1	3	4	2	1	1	4	0
	%	100.0	17.7	20.6	14.7	2.9	8.8	11.8	5.9	2.9	2.9	11.8	0.0

Q1.　研究または教育に携わった年数



		全　体	10年以下	11～15年	16～20年	21～25年	26年以上	無回答	平均(年)
全　体	名	34	7	12	10	4	1	0	14.4
	%	100.0	20.6	35.3	29.4	11.8	2.9	0.0	

Q2.　受入研究者について



(1)　受入研究者の研究協力

		全　体	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足	無回答
全　体	名	34	30	4	0	0	0	0
	%	100.0	88.2	11.8	0.0	0.0	0.0	0.0

(2)　受入研究者からの助言

		全　体	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足	無回答
全　体	名	34	29	3	2	0	0	0
	%	100.0	85.3	8.8	5.9	0.0	0.0	0.0

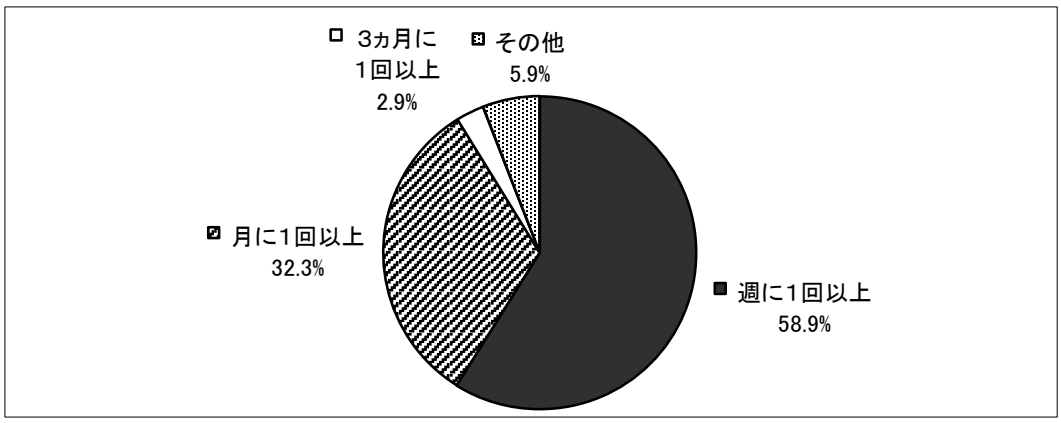
(3)　受入研究者とのコミュニケーション

		全　体	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足	無回答
全　体	名	34	27	6	1	0	0	0
	%	100.0	79.4	17.7	2.9	0.0	0.0	0.0

【その他の記述】

・指導教官はとても温和で、善良で、学術の上でとても厳格な人である。

Q2-1.　受入研究者と研究について検討・討議等を行った頻度



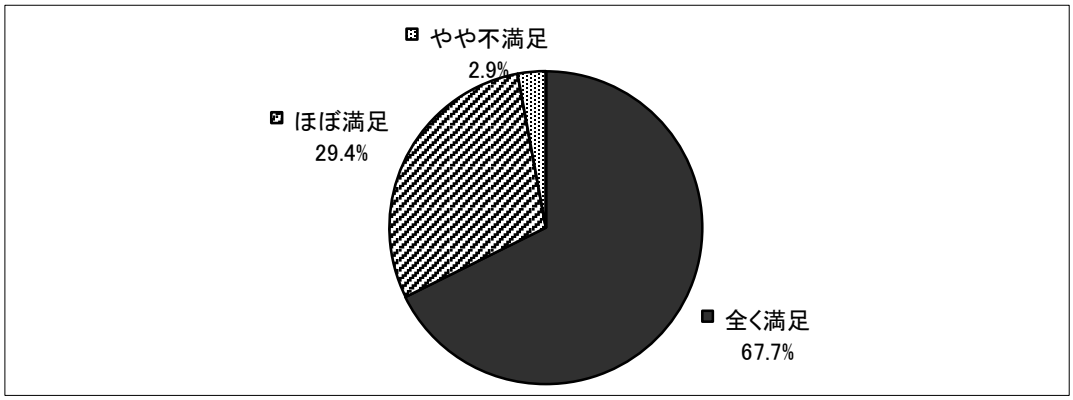
		全　体	週に 1回以上	月に 1回以上	3ヶ月に 1回以上	その他	無回答
全　体	名	34	20	11	1	2	0
	%	*100.0*	*58.9*	*32.3*	*2.9*	*5.9*	*0.0*

【その他の記述】

・毎週、研究室の皆の発表会に参加した。

・上半期は毎週一回、後半期は１ヶ月一回

Q3.　中国政府派遣研究員制度で滞在した日本の大学等研究機関における研究環境についての満足度



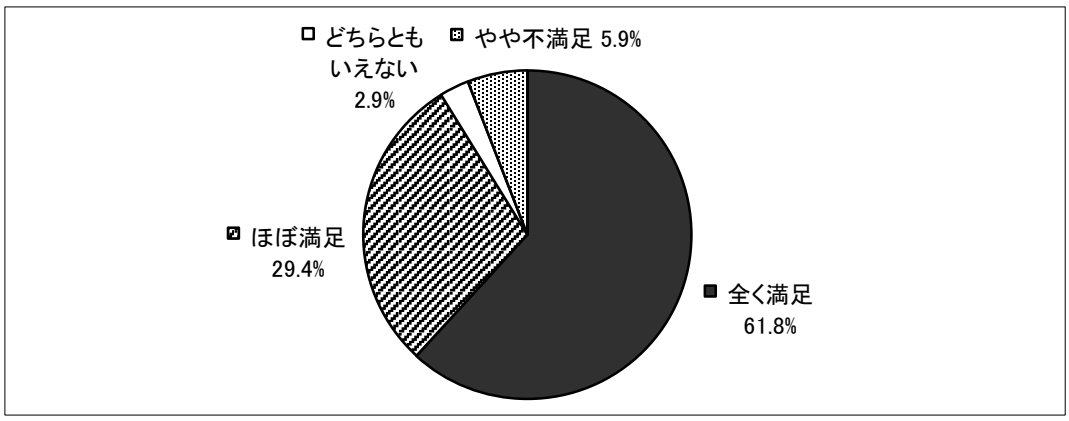
		全　体	全く 満足	ほぼ 満足	どちらとも いえない	やや 不満足	全く 不満足	無回答
全　体	名	34	23	10	0	1	0	0
	%	*100.0*	*67.7*	*29.4*	*0.0*	*2.9*	*0.0*	*0.0*

【Ｑ３で「やや不満足」とした方の不満足の項目について】

・研究設備や消耗品の用意がなかった

・競争的雰囲気が無くディスカッションが少ない

Q4.　受入研究機関等を含めて日本での生活の全体的な満足感について



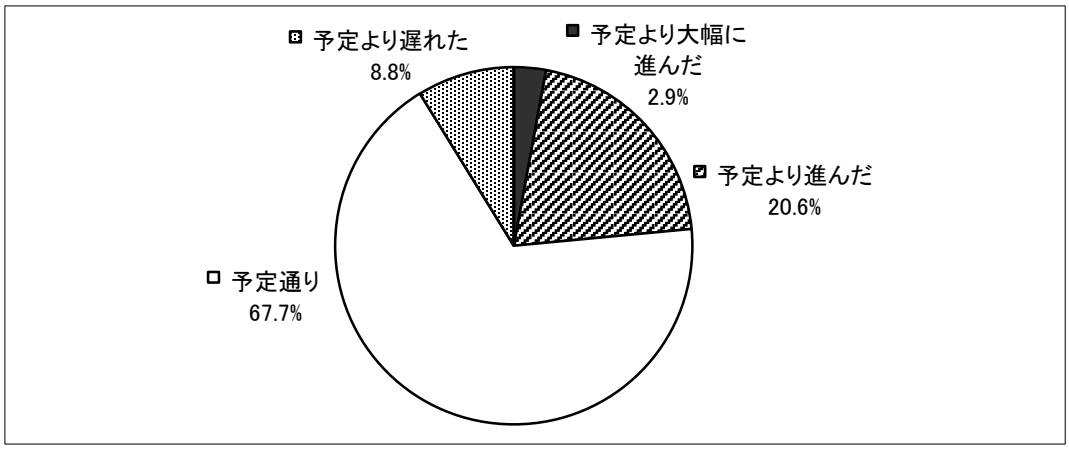
		全　体	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満	全く不満	無回答
全　体	名	34	21	10	1	2	0	0
	%	*100.0*	*61.8*	*29.4*	*2.9*	*5.9*	*0.0*	*0.0*

【Ｑ４で「やや不満」「全く不満」と回答した方の不満足な項目について（いくつでも】

・言葉が障害となった

・精神的に孤独だった

Q5.　研究計画はどの程度遂行されたか



		全　体	予定より大幅に進んだ	予定より進んだ	予定通り	予定より遅れた	予定より大幅に遅れた	無回答
全　体	名	34	1	7	23	3	0	0
	%	*100.0*	*2.9*	*20.6*	*67.7*	*8.8*	*0.0*	*0.0*

【Ｑ５で「予定より遅れた」要因について（３つまで)】

・不測の事態により、自分の研究時間が不足した＜3 件＞

・資金不足により、設備や消耗品が不十分だった＜1 件＞

・研究課題の選択、来日前の打合せ及び準備が不十分だった＜1 件＞

・受入研究者が忙しすぎて、十分な研究・検討・討議ができなかった＜1 件＞

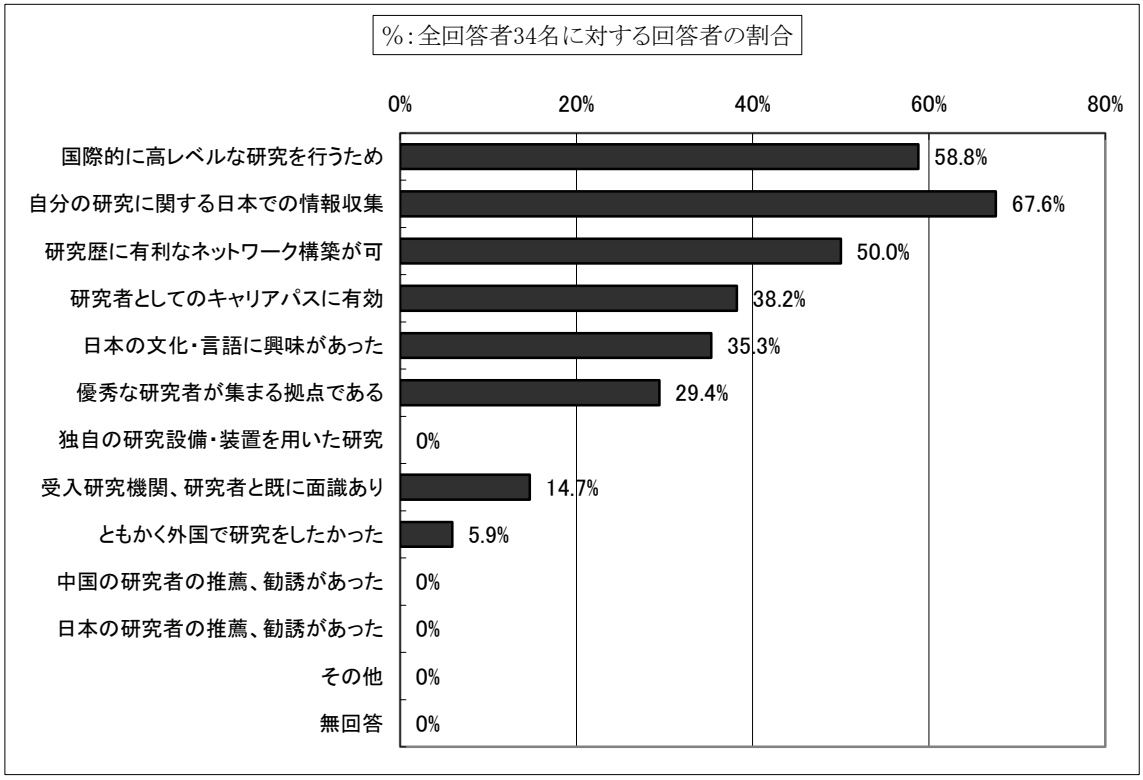
・受入研究者との関係がうまくいかなかった＜1 件＞

・その他＜2 件＞

・言葉の難関を突破していなかった。

・複雑なプロジェクトを完了させるには１年は短い

Q6.　中国政府派遣研究員として来日した動機（３つまで）



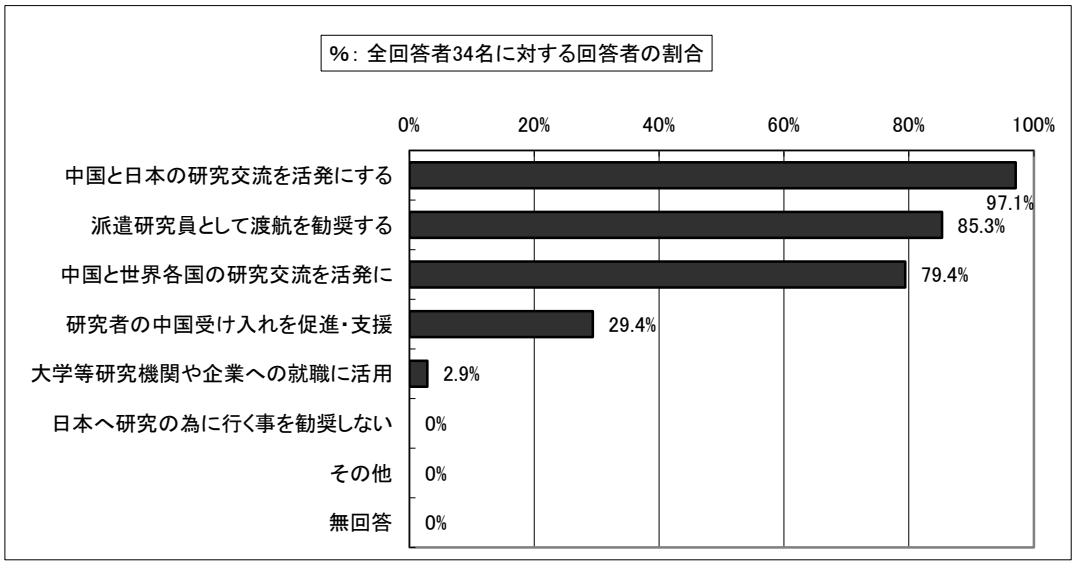
		全　体	国際的に高レベルな研究を行うため	自分の研究に関する日本での情報収集	研究歴に有利なネットワーク構築が可	研究者としてのキャリアパスに有効	日本の文化・言語に興味があった	優秀な研究者が集まる拠点である	独自の研究設備・装置を用いた研究
全　体	名	34	20	23	17	13	12	10	0
	%	*100.0*	*58.8*	*67.6*	*50.0*	*38.2*	*35.3*	*29.4*	*0.0*

		全　体	受入研究機関、研究者と面識あり	ともかく外国で研究をしたかった	中国の研究者の推薦、勧誘があった	日本の研究者の推薦、勧誘があった	その他	無回答
全　体	名	34	5	2	0	0	0	0
	%	*100.0*	*14.7*	*5.9*	*0.0*	*0.0*	*0.0*	*0.0*

Q7.　中国政府派遣研究員制度による日本での研究を同僚や後輩に勧めるか

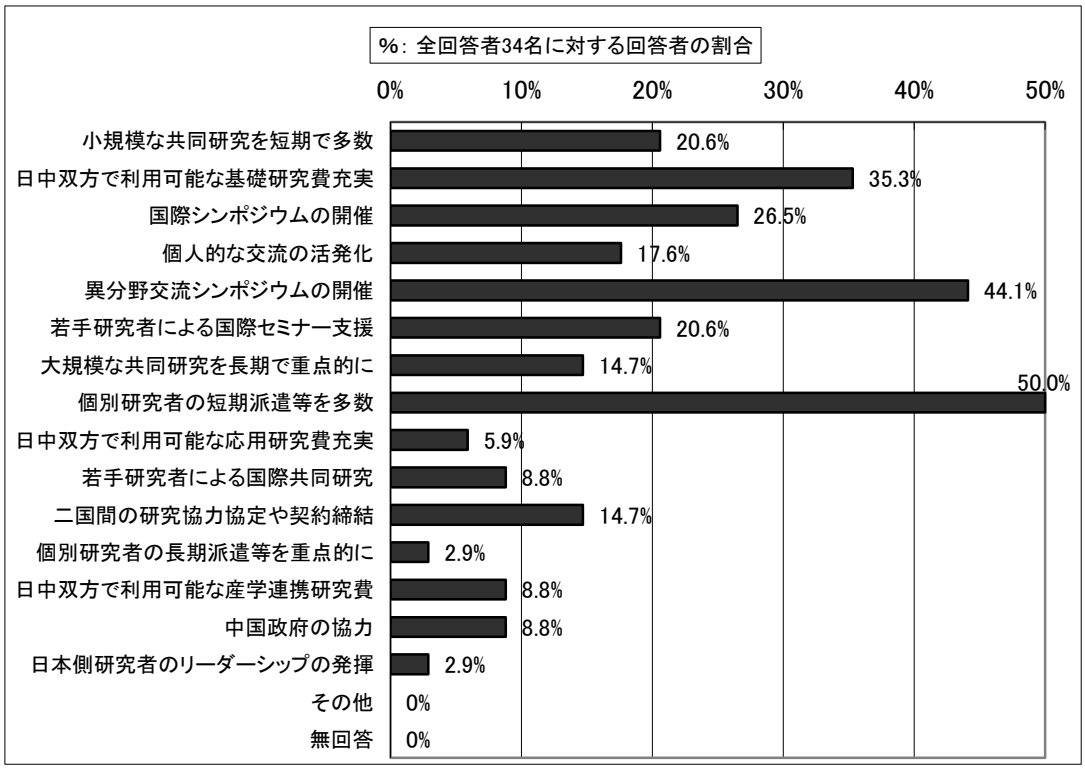
		全　体	勧める	勧めない	無回答
全　体	名	34	34	0	0
	%	*100.0*	*100.0*	*0.0*	*0.0*

Q8.　日本における研究経験を日中交流促進等に今後どのように有効活用するか（３つまで）



		全　体	中国と日本の研究交流を活発にする	派遣研究員として渡航を勧奨する	中国と世界各国の研究交流を活発に	研究者の中国受け入れを促進・支援	大学等研究機関や企業への就職に活用	日本へ研究の為に行く事を勧奨しない	その他	無回答
全　体	名	34	33	29	27	10	1	0	0	0
	%	*100.0*	*97.1*	*85.3*	*79.4*	*29.4*	*2.9*	*0.0*	*0.0*	*0.0*

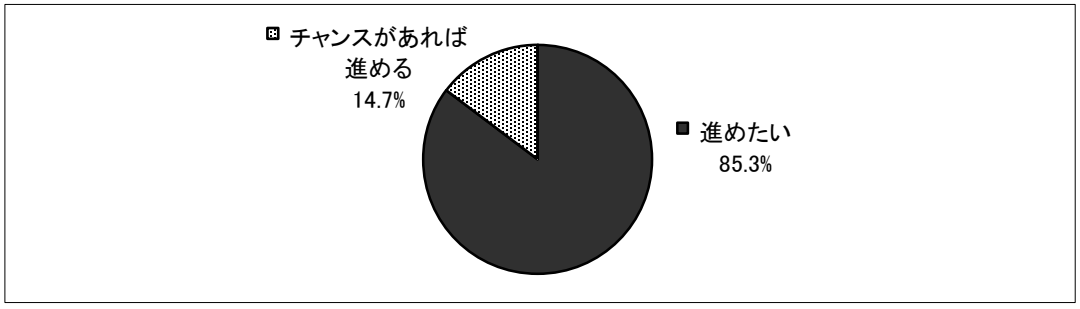
Q9.　日中の今後の研究協力に重要な事項（３つまで）



		全　体	小規模な共同研究を短期で多数	日中双方で利用可能な基礎研究費充実	国際シンポジウムの開催	個人的な交流の活発化	異分野交流シンポジウムの開催	若手研究者による国際セミナー支援	大規模な共同研究を長期で重点的に	個別研究者の短期派遣等を多数	日中双方で利用可能な応用研究費充実
全　体	名	34	7	12	9	6	15	7	5	17	2
	%	100.0	20.6	35.3	26.5	17.6	44.1	20.6	14.7	50.0	5.9

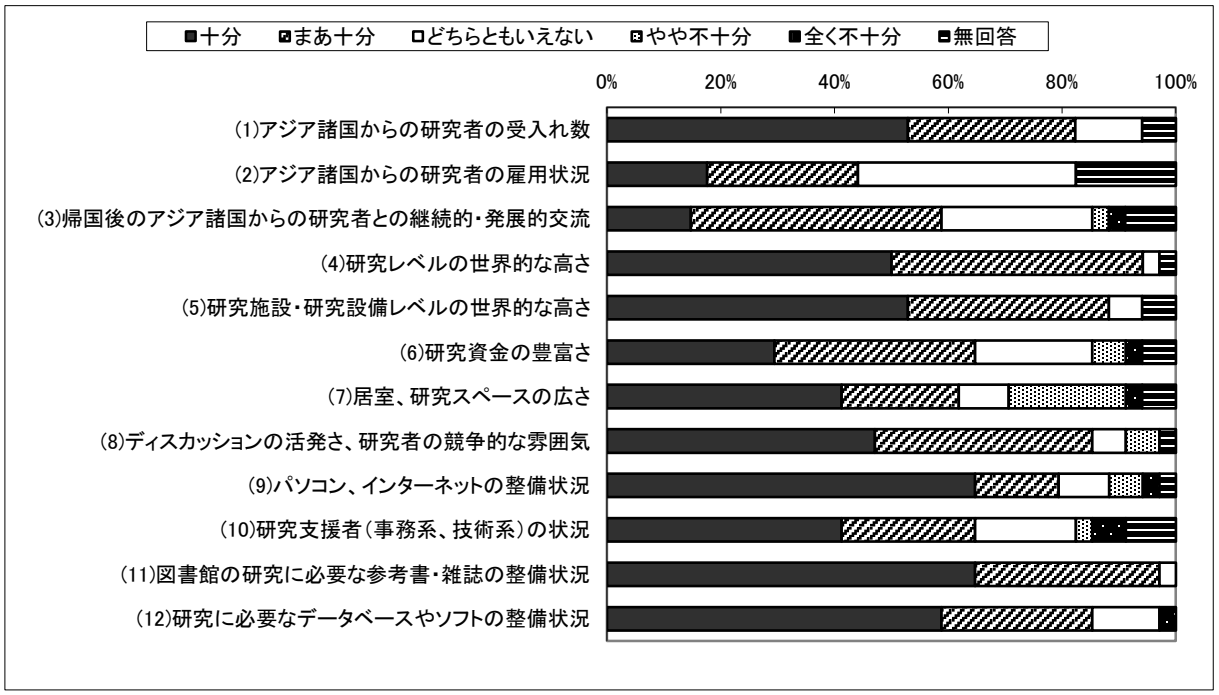
		全　体	若手研究者による国際共同研究	二国間の研究協力協定や契約締結	個別研究者の長期派遣等を重点的に	日中双方で利用可能な産学連携研究費	中国政府の協力	日本側研究者のリーダーシップの発揮	その他	無回答
全　体	名	34	3	5	1	3	3	1	0	0
	%	100.0	8.8	14.7	2.9	8.8	8.8	2.9	0.0	0.0

Q10.　日本との研究協力を今後進める意向はあるか



		全　体	進めたい	チャンスがあれば進める	進めるつもりはない	無回答
全　体	名	34	29	5	0	0
	%	100.0	85.3	14.7	0.0	0.0

Q11.　アジア諸国からの研究者に対する日本の大学等研究機関の研究環境について



(1)　アジア諸国からの研究者の受入数

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	18	10	4	0	0	2
	%	*100.0*	*52.9*	*29.4*	*11.8*	*0.0*	*0.0*	*5.9*

(2)　アジア諸国からの研究者の雇用状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	6	9	13	0	0	6
	%	*100.0*	*17.6*	*26.5*	*38.3*	*0.0*	*0.0*	*17.6*

(3)　帰国後のアジア諸国からの研究者との継続的・発展的交流

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	5	15	9	1	1	3
	%	*100.0*	*14.7*	*44.1*	*26.5*	*2.9*	*2.9*	*8.9*

(4)　研究レベルの世界的な高さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	17	15	1	0	0	1
	%	*100.0*	*50.0*	*44.2*	*2.9*	*0.0*	*0.0*	*2.9*

(5)　研究施設・研究設備レベルの世界的な高さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	18	12	2	0	0	2
	%	*100.0*	*52.9*	*35.3*	*5.9*	*0.0*	*0.0*	*5.9*

(6)　研究資金の豊富さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	10	12	7	2	1	2
	%	*100.0*	*29.4*	*35.3*	*20.6*	*5.9*	*2.9*	*5.9*

(7)　居室、研究スペースの広さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	14	7	3	7	1	2
	%	*100.0*	*41.2*	*20.6*	*8.8*	*20.6*	*2.9*	*5.9*

(8)　ディスカッションの活発さ、研究者の競争的な雰囲気

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	16	13	2	2	0	1
	%	*100.0*	*47.1*	*38.2*	*5.9*	*5.9*	*0.0*	*2.9*

(9)　パソコン、インターネットの整備状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	22	5	3	2	1	1
	%	*100.0*	*64.7*	*14.7*	*8.9*	*5.9*	*2.9*	*2.9*

(10)　研究支援者（事務系、技術系）の状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	14	8	6	1	2	3
	%	*100.0*	*41.2*	*23.5*	*17.7*	*2.9*	*5.9*	*8.8*

（11） 図書館の研究に必要な参考書・雑誌の整備状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	22	11	1	0	0	0
	%	*100.0*	*64.7*	*32.4*	*2.9*	*0.0*	*0.0*	*0.0*

（12） 研究に必要なデータベースやソフトの整備状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	20	9	4	0	1	0
	%	*100.0*	*58.8*	*26.5*	*11.8*	*0.0*	*2.9*	*0.0*

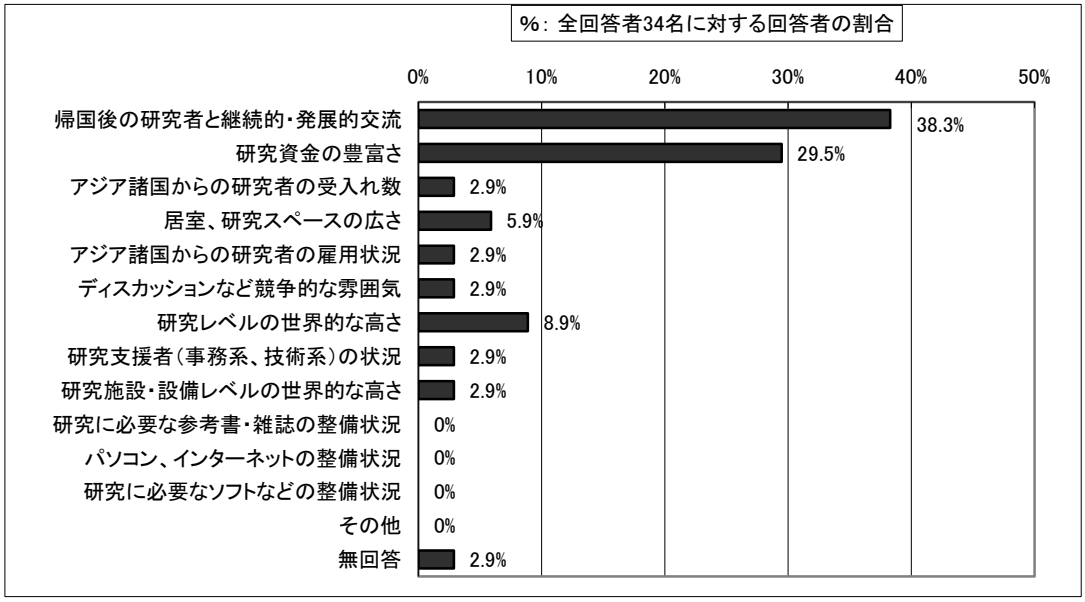
（13） その他

・十分＜3 件＞

・まあ十分＜1 件＞

・外国語の学習を強化する機関がある

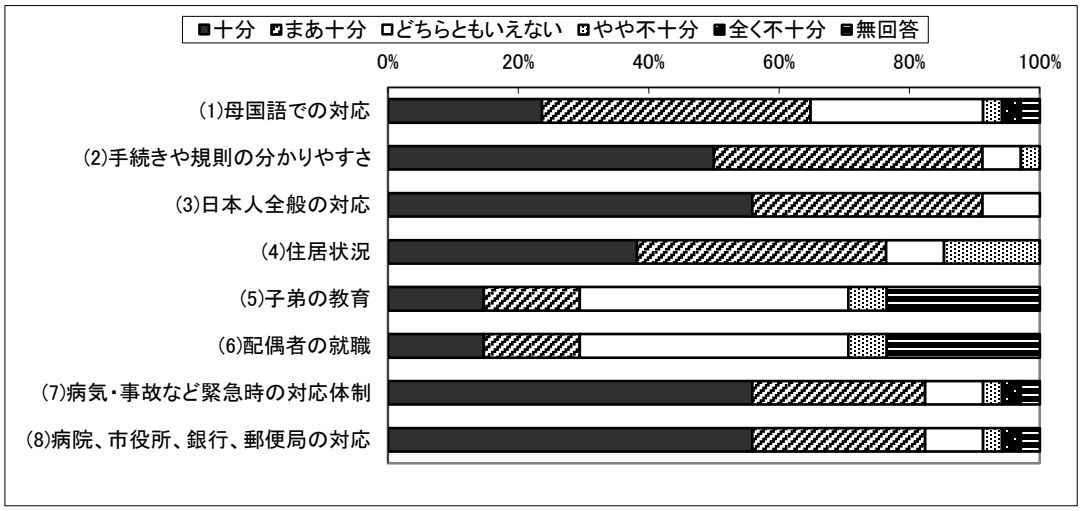
Q11-1. アジア諸国からの研究者に対する日本の大学等研究機関の研究環境について改善すべき最も重要な項目



		全　体	帰国後の研究者と継続的・発展的交流	研究資金の豊富さ	アジア諸国からの研究者の受入れ数	居室、研究スペースの広さ	アジア諸国からの研究者の雇用状況	ディスカッションなど競争的な雰囲気	研究レベルの世界的な高さ
全　体	名	34	13	10	1	2	1	1	3
	%	*100.0*	*38.3*	*29.5*	*2.9*	*5.9*	*2.9*	*2.9*	*8.9*

		全　体	研究支援者（事務系、技術系）の状況	研究施設・設備レベルの世界的な高さ	研究に必要な参考書・雑誌の整備状況	パソコン、インターネットの整備状況	研究に必要なソフトなどの整備状況	その他	無回答
全　体	名	34	1	1	0	0	0	0	1
	%	*100.0*	*2.9*	*2.9*	*0.0*	*0.0*	*0.0*	*0.0*	*2.9*

Q12.　アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境について



(1)　母国語での対応

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	8	14	9	1	1	1
	%	*100.0*	*23.6*	*41.2*	*26.5*	*2.9*	*2.9*	*2.9*

(2)　手続きや規則の分かりやすさ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	17	14	2	1	0	0
	%	*100.0*	*50.0*	*41.2*	*5.9*	*2.9*	*0.0*	*0.0*

(3)　日本人全般の対応

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	19	12	3	0	0	0
	%	*100.0*	*55.9*	*35.3*	*8.8*	*0.0*	*0.0*	*0.0*

(4)　住居状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	13	13	3	5	0	0
	%	*100.0*	*38.2*	*38.2*	*8.9*	*14.7*	*0.0*	*0.0*

(5)　子弟の教育

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	8	8	10	2	0	6
	%	*100.0*	*23.5*	*23.5*	*29.4*	*5.9*	*0.0*	*17.7*

(6)　配偶者の就職

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	5	5	14	2	0	8
	%	*100.0*	*14.7*	*14.7*	*41.2*	*5.9*	*0.0*	*23.5*

(7)　病気・事故など緊急時の対応体制

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	14	7	6	2	1	4
	%	*100.0*	*41.2*	*20.6*	*17.6*	*5.9*	*2.9*	*11.8*

(8)　病院、市役所、銀行、郵便局の対応

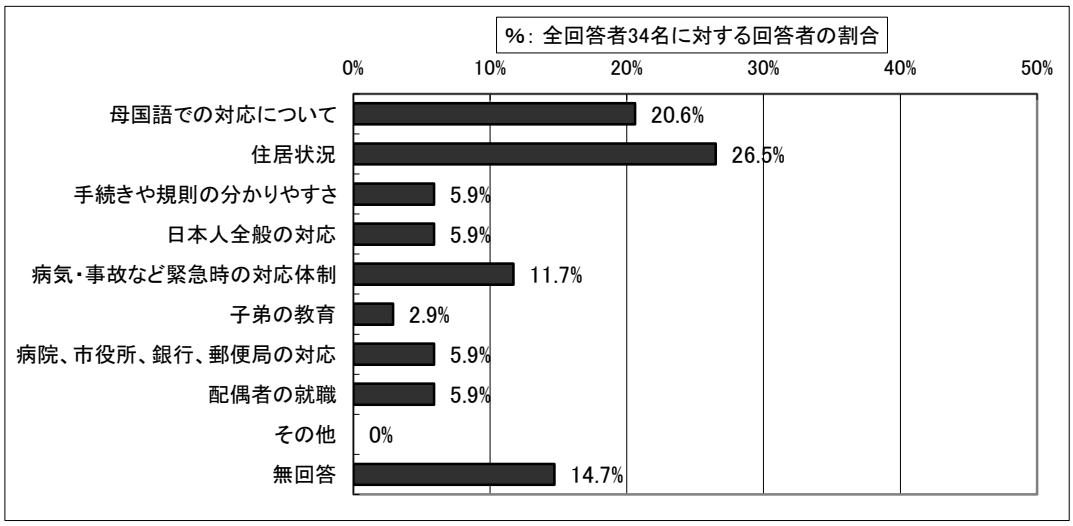
		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	19	9	3	1	1	1
	%	*100.0*	*55.9*	*26.5*	*8.9*	*2.9*	*2.9*	*2.9*

(9)　その他（詳細記述なし）

・全く十分＜2 件＞

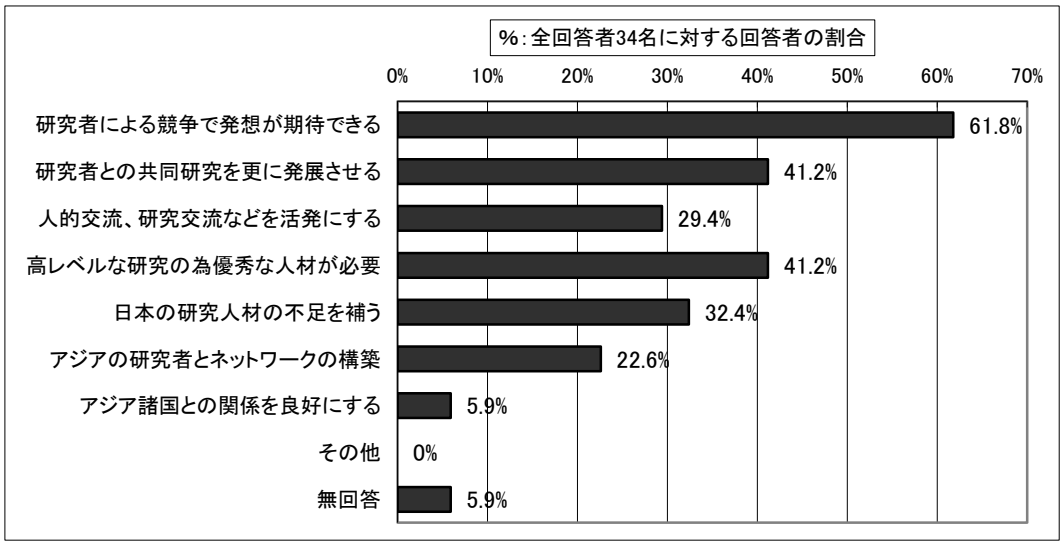
・まあ十分＜1 件＞

Q12-1.　アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境について改善すべき最も重要な項目



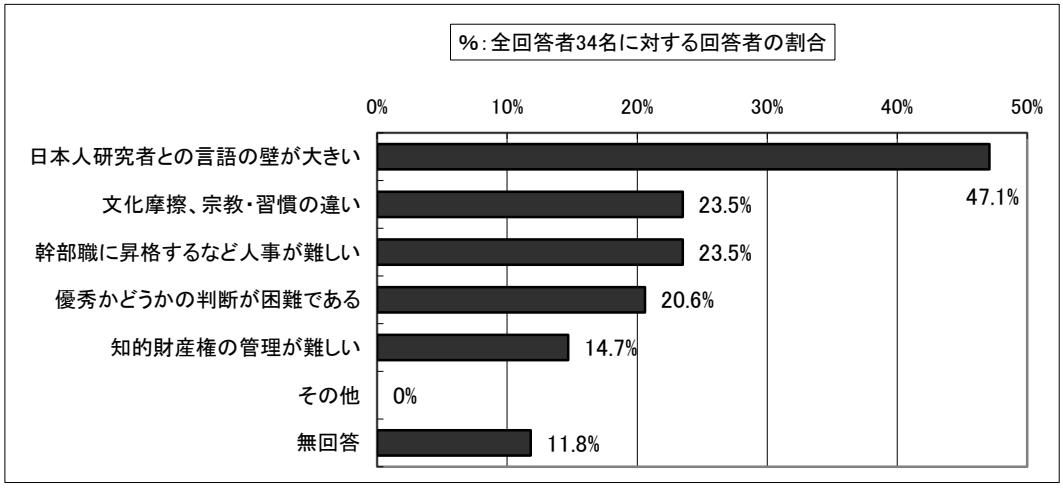
		全　体	母国語での対応について	住居状況	手続きや規則の分かりやすさ	日本人全般の対応	病気・事故など緊急時の対応体制	子弟の教育	病院、市役所、銀行、郵便局の対応	配偶者の就職	その他	無回答
全　体	名	34	7	9	2	2	4	1	2	2	0	5
	%	*100.0*	*20.6*	*26.5*	*5.9*	*5.9*	*11.7*	*2.9*	*5.9*	*5.9*	*0.0*	*14.7*

Q13.　日本の研究機関と企業がアジア諸国からの研究者を雇用する理由（３つまで）



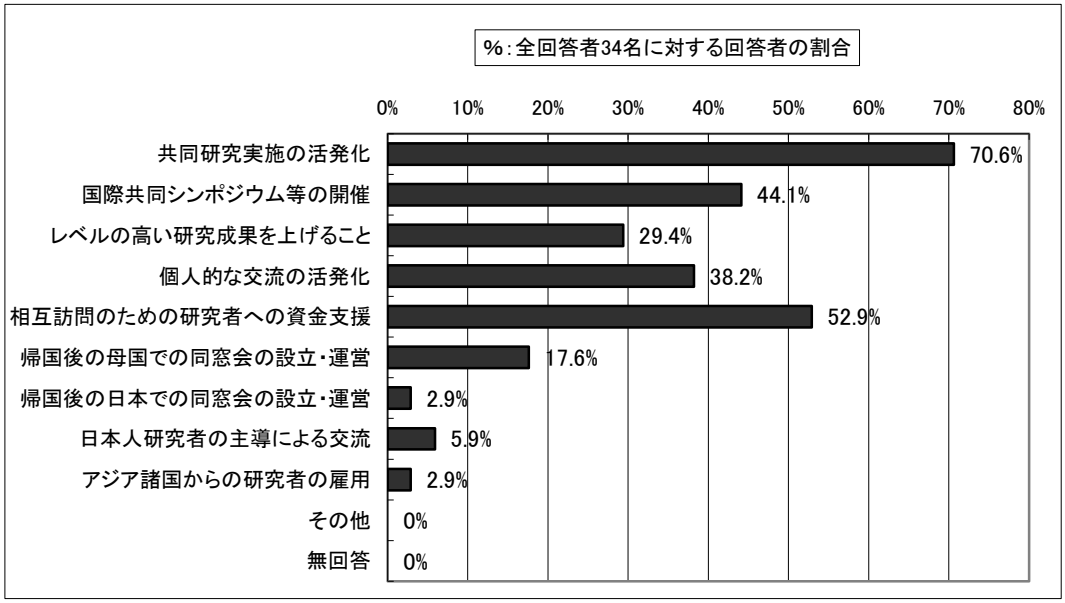
		全　体	研究者による競争で発想が期待できる	研究者との共同研究を更に発展させる	人的交流、研究交流などを活発にする	高レベルな研究の為優秀な人材が必要	日本の研究人材の不足を補う	アジアの研究者とネットワークの構築	アジア諸国との関係を良好にする	その他	無回答
全　体	名	34	21	14	10	14	11	15	2	0	2
	%	100.0	61.8	41.2	29.4	41.2	32.4	22.6	5.9	0.0	5.9

Q13-1.　日本の研究機関と企業がアジア諸国からの研究者を雇用する場合の問題点（３つまで）



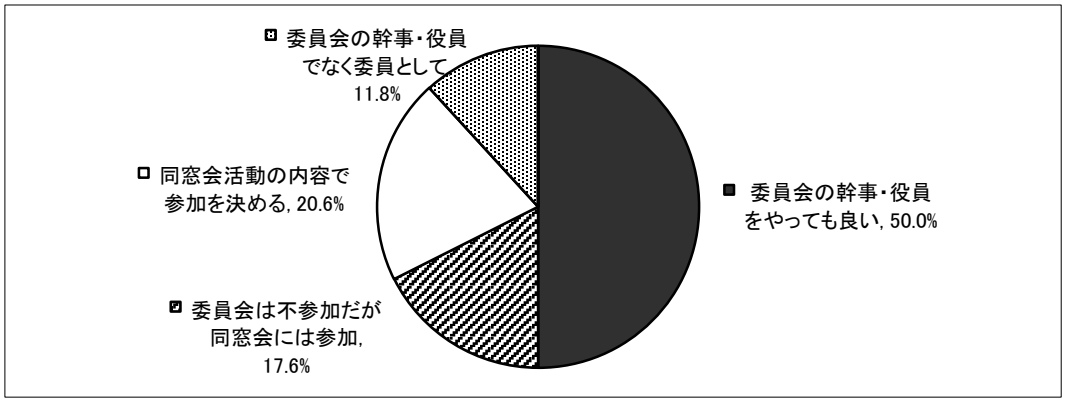
		全　体	日本人研究者との言語の壁が大きい	文化摩擦、宗教・習慣の違い	幹部職に昇格するなど人事が難しい	優秀かどうかの判断が困難である	知的財産権の管理が難しい	その他	無回答
全　体	名	34	16	8	8	7	5	0	4
	%	100.0	47.1	23.5	23.5	20.6	14.7	0.0	11.8

Q14.　アジア諸国からの研究者との研究を含めた継続的・発展的交流促進に重要な事項（３つまで）



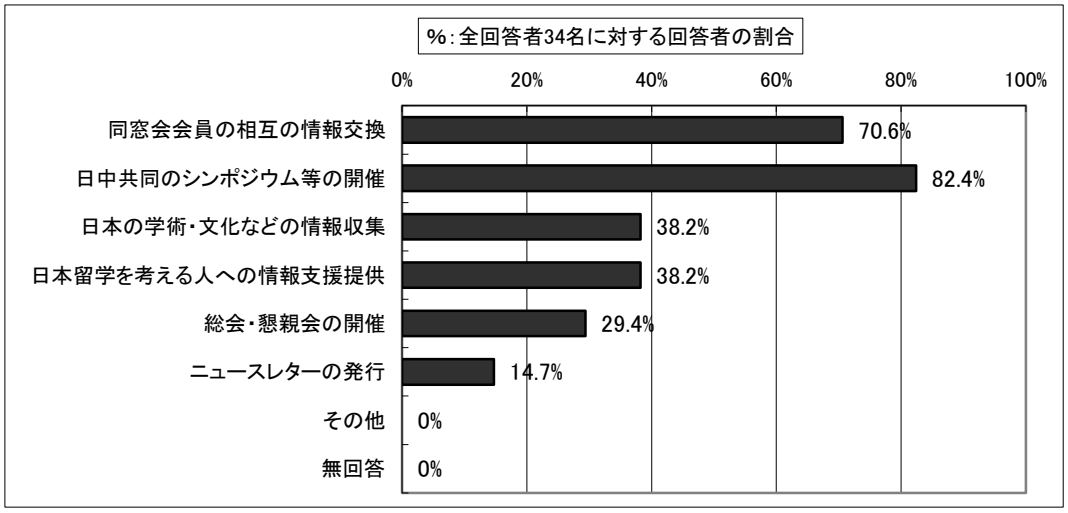
		全　体	共同研究実施の活発化	国際共同シンポジウム等の開催	レベルの高い研究成果を上げること	個人的な交流の活発化	相互訪問のための研究者への資金支援	帰国後の母国での同窓会の設立・運営	帰国後の日本での同窓会の設立・運営	日本人研究者の主導による交流	アジア諸国からの研究者の雇用	その他	無回答
全　体	名	34	24	15	10	13	18	6	1	2	1	0	0
	%	100.0	70.6	44.1	29.4	38.2	52.9	17.6	2.9	5.9	2.9	0.0	0.0

Q15.　中国における同窓会への参加と運営について



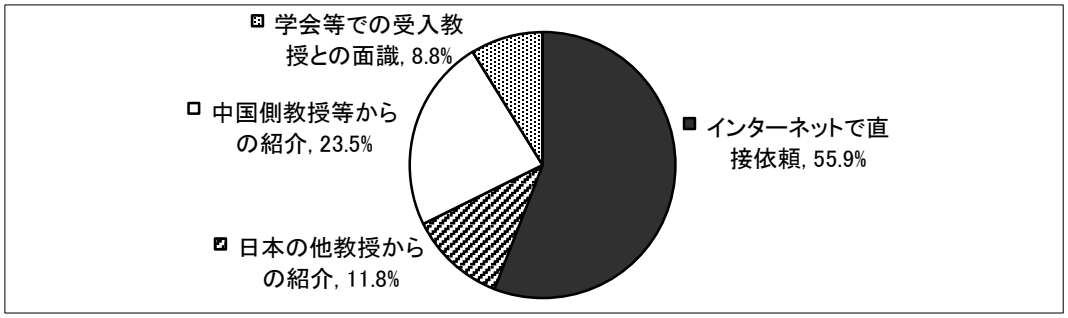
		全　体	委員会の幹事・役員をやっても良い	委員会は不参加だが同窓会には参加	同窓会活動の内容で参加を決める	委員会の幹事・役員でなく委員として	同窓会活動には関心がない	その他	無回答
全　体	名	34	17	6	7	4	0	0	0
	%	100.0	50.0	17.6	20.6	11.8	0.0	0.0	0.0

Q15-1.　中国における同窓会活動として重要な項目（いくつでm）



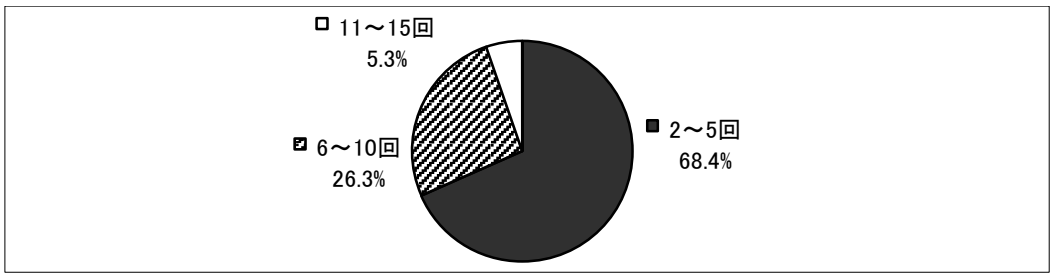
		全　体	同窓会会員の相互の情報交換	日中共同のシンポジウム等の開催	日本の学術・文化などの情報収集	日本留学を考える人への情報支援提供	総会・懇親会の開催	ニュースレターの発行	その他	無回答
全　体	名	34	24	28	13	13	10	5	0	0
	%	100.0	70.6	82.4	38.2	38.2	29.4	14.7	0.0	0.0

Q16-1.　受入教授とのコンタクト



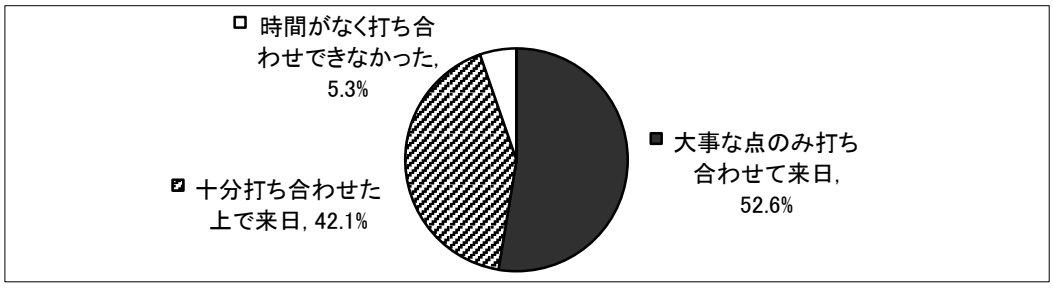
		全　体	インターネットで直接依頼	日本の他教授からの紹介	中国側教授等からの紹介	学会等での受入教授との面識	その他	無回答
全　体	名	34	19	4	8	3	0	0
	%	100.0	55.9	11.8	23.5	8.8	0.0	0.0

Q16-2-1.　メールやり取り回数



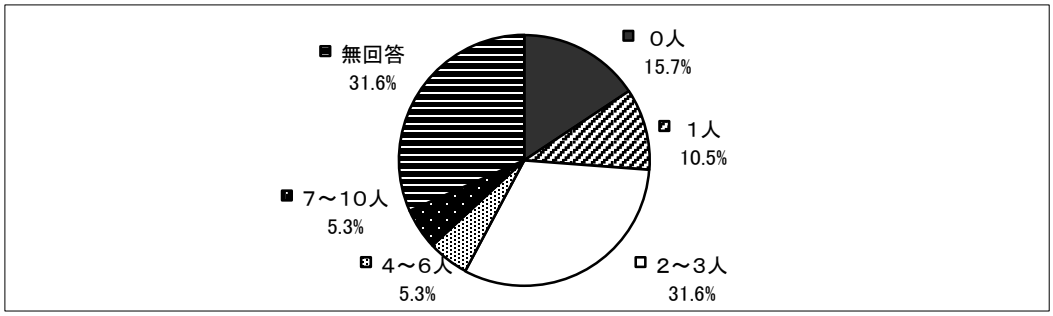
		全　体	2～5回	6～10回	11～15回	16回以上	無回答
全　体	名	19	13	5	1	0	0
	%	100.0	68.4	26.3	5.3	0.0	0.0

Q16-2-2.　来日前の準備



		全　体	大事な点のみ打ち合わせて来日	十分打ち合わせた上で来日	時間がなく打ち合わせできなかった	必要ないので打ち合わせしなかった	その他	無回答
全　体	名	19	10	8	1	0	0	0
	%	100.0	52.6	42.1	5.3	0.0	0.0	0.0

Q16-2-3.　メールで受入依頼した教授の人数



		全　体	0人	1人	2～3人	4～6人	7～10人	11人以上	無回答
全　体	名	19	3	2	6	1	1	0	6
	%	100.0	15.7	10.5	31.6	5.3	5.3	0.0	31.6

Q16-3.　事前打ち合わせに関するアドバイス＜16名（47%）から寄せられた意見＞

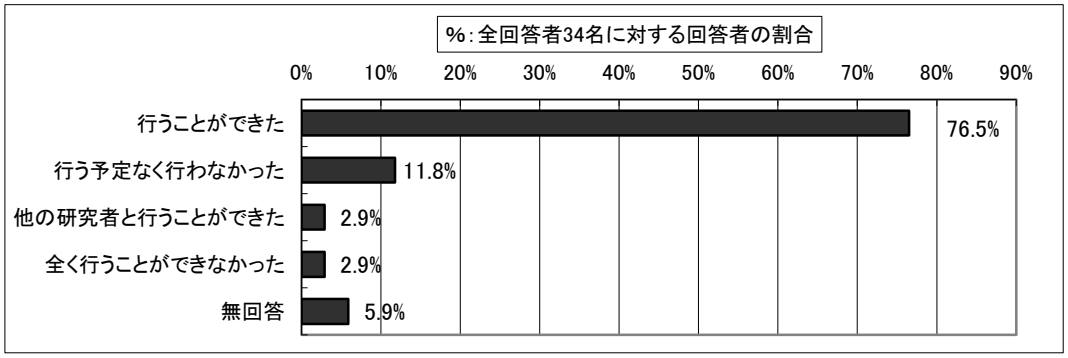
研究計画、研究テーマ、研究の方向性などに対する打合せを綿密に行うことを強く勧める声が多数であった。

[研究関係]

- 受入教授の研究方向が自分と合うかどうかを知ること。お互いに同じ興味がある研究テーマがないと共同研究は難しい。
- 受入教授の専門研究をよく理解すること。
- 来日前に受入教授の研究方向を理解すること。
- 受入教授に自分の研究テーマをはっきり説明して意見を伺うことが最も必要。
- 日本における成果を加速させるため、研究室に入る前にプロジェクトの詳細を決めておくこと。
- できるだけ受入教授と直接連絡を取り、一緒に研究計画を決めること。
- 受入教授と来日前に（更にチューターと共に）研究プランを話し合っておくこと。
- メールで指導教官と常に連絡を取り合うこと。指導教官の書いた論文や執筆した本などを集め最新の研究状況を把握すること。さらに日本における最先端の研究の動きをマークすること。
- 長い時間をかけて研究テーマ、研究環境、研究予想結果などに関して十分に相談してから指導教授と研究機関を決めて来日し、研究を行うべきだと思う。
- 来日前に受入教授の研究論文を読み詳しい研究計画を制定してから相談することが必要。
- 来日前に受入教授と連絡を取ることは大切。受入教授が何をしているかを知るべきであるし、また自分が何に興味を持っているかを知ってもらうべき。
- 来日前に受入教授と研究計画について話し合うことが重要。
- 研究課題の詳細について話し合うことを勧める。例えば実験計画、設備及び研究経費、期待される研究成果等
- 共通に関心のある研究内容について十分話し合うことが重要

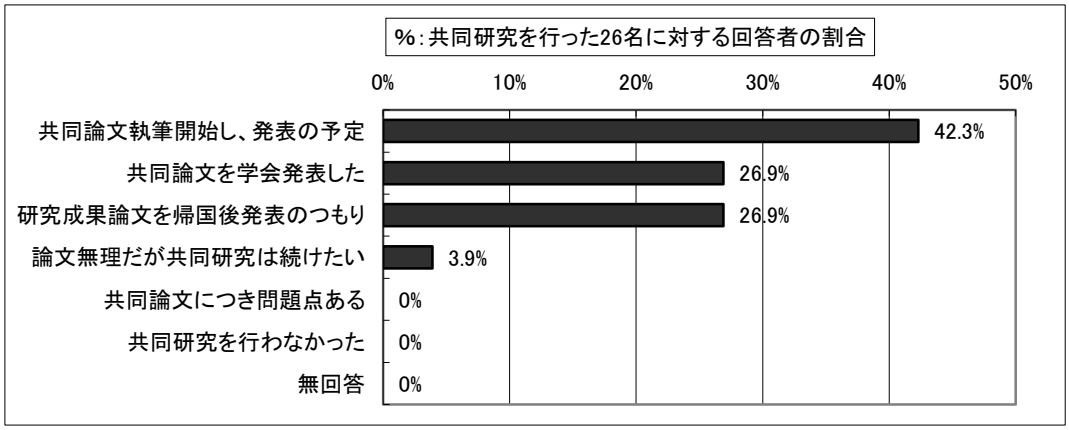
［その他］
・きちんとした履歴書を用意すること。
・事前打ち合わせは非常に重要
・完全なコミュニケーションでなければならない。

Q17-1.　滞在中の受入教授との共同研究



		全　体	行うことができた	行う予定なく行わなかった	他の研究者と行うことができた	全く行うことができなかった	無回答
全　体	名	34	26	4	1	1	2
	%	100.0	76.5	11.8	2.9	2.9	5.9

Q17-2.　共同論文の発表予定



		全　体	共同論文執筆開始し、発表の予定	共同論文を学会発表した	研究成果論文を帰国後発表のつもり	論文無理だが共同研究は続けたい	共同論文につき問題点ある	共同研究を行わなかった	無回答
全　体	名	26	11	7	7	1	0	0	0
	%	100.0	42.3	26.9	26.9	3.9	0.0	0.0	0.0

Q18.　中国政府派遣研究員制度、日本の大学等研究機関の改善すべき課題についての意見

（1）　日本がアジア諸国から世界的に優秀な研究者（中国人研究者含む）を引きつ

けるために重要なこと　＜26 名（76.5%）から寄せられた意見＞

［研究環境］

- 良好な研究環境と世界一流の研究人を有すること。
- 京都大学のように自由な学術研究の雰囲気、豊富な資料及び多彩な優秀人材を有することが研究者を惹き付ける重要なポイントと考える。
- 研究技術
- 研究条件と研究環境
- 研究レベル
- 一流の研究環境、博学な受入教授、融合的な実験室の雰囲気
- 良好な研究環境
- 豊富な研究資料、しっかりした基礎研究、先端技術を有すること及び理念が重要である。

［生活環境］

- 手厚い生活上の待遇。

［経済的支援］

- 研究費の支援と研究条件の改善（十分な研究室）

［その他］

- 工業技術の先進と安定
- 受け入れ先（大学、研究所等）及び受入研究者の知名度が高いことが重要。
- 手続きの簡便さと多様性のあるコラボレーションの方法
- 新しい思考
- よりオープンな考え方及びより高いレベルの研究成果を有すること。

(2)　日本が今後アジア諸国から世界的に優秀な研究者（中国人研究者含む）と研究協力を進めるために重要なこと　＜27 名（79.4%）から寄せられた意見＞

［研究環境］

- 共通の研究目標があること。
- 互いの学術交流
- 研究に対する持続的な協力
- お互いに尊重すること、研究成果を話し合うこと
- 研究コラボレーションの制度
- 研究条件がとても重要
- 英語の教育や研究環境

［経済的支援］

- 共通の研究目標及び相当額の研究経費のバックアップ

［その他］

- お互いに交流をすることかつ頻繁にディスカッションを行うことが一番重要。受入研究者に対し平等に接することが真の共同研究だといえる。
- 文化交流が重要
- 異文化の交流
- 疎通

- オープンな環境と信頼関係
- 相手国の文化を尊重し、習慣などの違いについても相手の立場から考えることは重要である。
- 外国人研究者の研究方向と研究目的を知ること。外国人研究者の考え方を寛容な心で理解すること。

(3)　これから来日制度に応募するアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）へのアドバイス　＜23 名（67.6%）から寄せられた意見＞

［研究環境］

- 事前準備が重要。これがあれば来日後すぐに研究に専念できる。言語能力の準備もかなり重要である。流暢にコミュニケーションが取れるとより良い学術的な収益が得られる。
- 指導の先生の研究内容と指導力を調べておく
- できるだけ学会やセミナーに参加し、日本の優秀な学者の経験及び知識を学ぶこと。
- 日本側の受入職場や受入研究者をよく知ることが重要
- このような貴重な機会を大切にし、積極的に学術交流を行う。
- 事前に準備をし、研究計画を立てること。受入教授と十分コミュニケーションを取ること。積極的に学術活動に参加すること。

［その他］

- 日本文化と日本的な考え方などをもっと教えるべき。旅行などを通じて研究者間のコミュニケーションの機会を増やすと共に経済的な援助にも力を入れること。
- この制度を介して若手研究者がもっと育てられるべきだと思う。
- この制度はとても良い交流の機会なので逸しないように。
- 知識を展開すること
- 積極的に申請すること、準備を整えてくること、お互いに習うこと、日本語学習が特に重要。
- とても良い制度なので、申請することをお勧めする。
- 日本語学習にたくさん時間を費やすのではなく、一般の日本人と交流を深めるべき。学術研究にももっとエネルギーを使うべき。

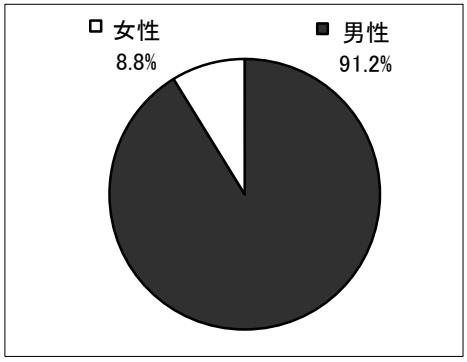
(4)　その他の意見　＜3 名（8.8%）から寄せられた意見＞

- 多く交流の機会を持つこと。

５－４－２.「中国政府派遣研究員制度」受入研究者アンケート結果

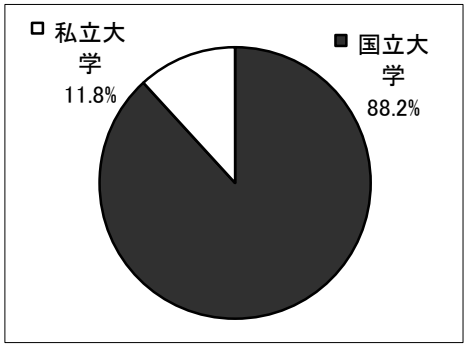
中国政府派遣研究員受入研究者の基本データ

a.　受入研究者の性別



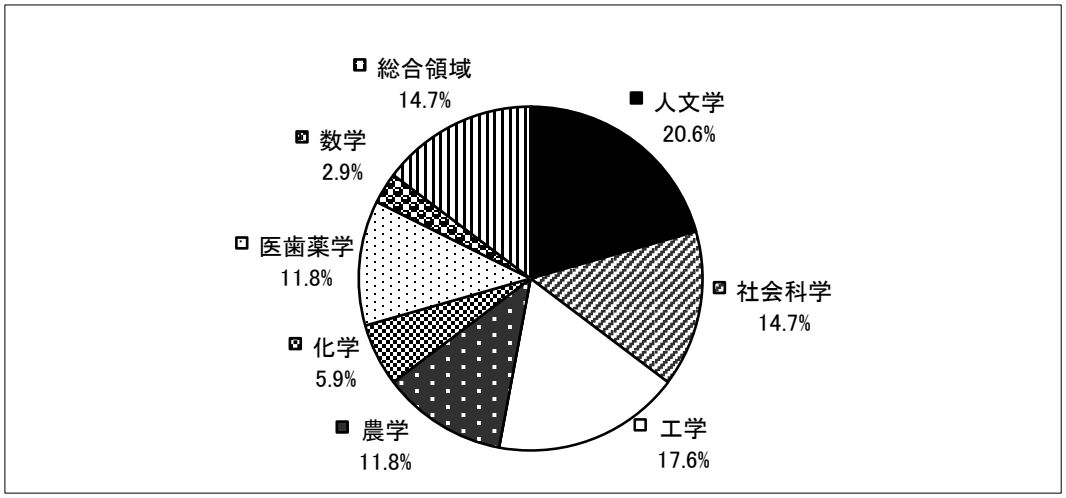
		全　体	男性	女性
全　体	名	34	31	3
	%	100.0	91.2	8.8

b.　受入研究者の所属機関



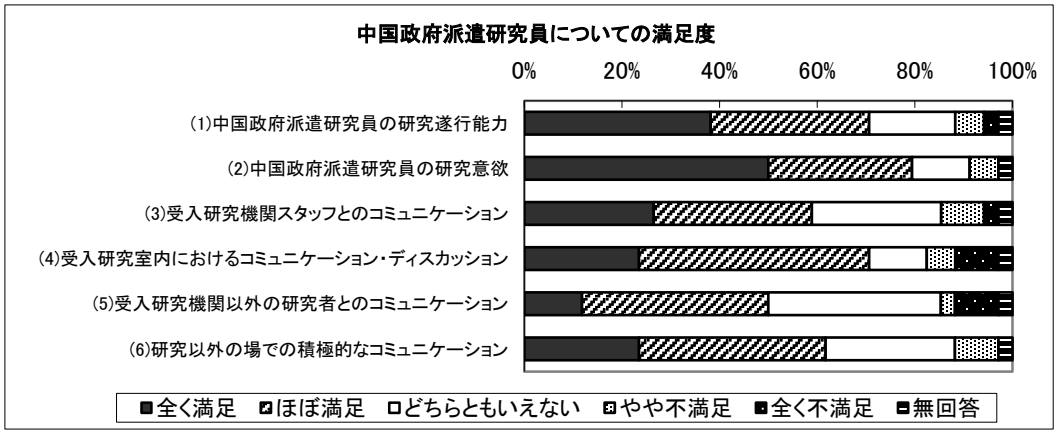
		全　体	国立大学	公立大学	私立大学
全　体	名	34	30	0	4
	%	100.0	88.2	0.0	11.8

c.　受入研究者の研究分野



		全　体	人文学	社会科学	工学	複合新領域	農学	化学	医歯薬学	数学	総合領域	生物学
全　体	名	34	7	5	6	0	4	2	4	1	5	0
	%	100.0	20.6	14.7	17.6	0.0	11.8	5.9	11.8	2.9	14.7	0.0

Q1.　受け入れた中国政府派遣研究員について



（1）　中国政府派遣研究員の研究遂行能力

		全　体	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足	無回答
全　体	名	34	13	11	6	2	1	1
	%	*100.0*	*38.2*	*32.4*	*17.7*	*5.9*	*2.9*	*2.9*

（2）　中国政府派遣研究員の研究意欲

		全　体	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足	無回答
全　体	名	34	17	10	4	2	0	1
	%	*100.0*	*50.0*	*29.4*	*11.8*	*5.9*	*0.0*	*2.9*

（3）　受入研究機関スタッフとのコミュニケーション

		全　体	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足	無回答
全　体	名	34	9	11	9	3	1	1
	%	*100.0*	*26.5*	*32.4*	*26.5*	*8.8*	*2.9*	*2.9*

（4）　受入研究室内におけるコミュニケーション・ディスカッション

		全　体	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足	無回答
全　体	名	34	8	16	4	2	3	1
	%	*100.0*	*23.5*	*47.1*	*11.8*	*5.9*	*8.8*	*2.9*

（5）　受入研究機関以外の研究者とのコミュニケーション

		全　体	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足	無回答
全　体	名	34	4	13	12	1	3	1
	%	*100.0*	*11.8*	*38.2*	*35.3*	*2.9*	*8.9*	*2.9*

（6）　研究以外の場での積極的なコミュニケーション

		全　体	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足	無回答
全　体	名	34	8	13	9	3	0	1
	%	*100.0*	*23.5*	*38.2*	*26.5*	*8.9*	*0.0*	*2.9*

（7）　その他

・「全く満足」1 人、「どちらともいえない」2 人、「全く不満足」2 人。

＜詳細記述（3 件）＞

「全く満足」

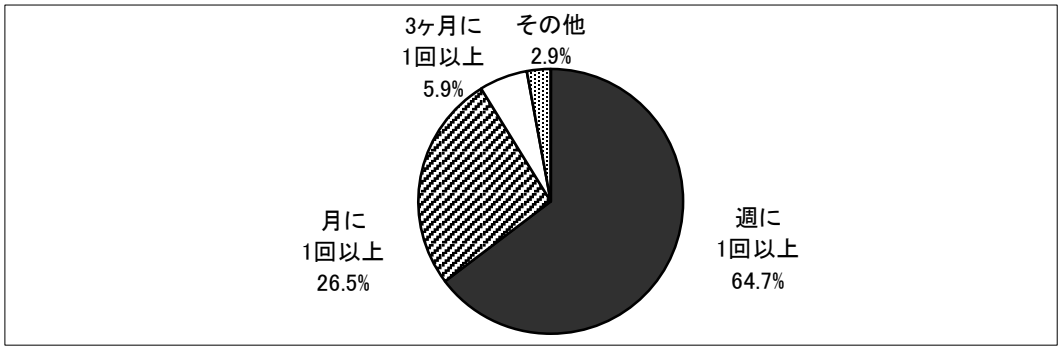
・関連学会・研究会への参加

「全く不満足」

・日本語力、英語力の不足で殆どコミュニケーションが取れず、ゼミの内容も理解しているかどうか判然としない。但しメールの文章を通して、研究内容にある程度の理解が得られていることは推定された。受入を決める前に受領した日本語による手紙で語学力を判断したが、会話能力が伴っていなかった。人柄には問題なかった。

・日本語が不十分、英語を全く使えない

Q1-1.　受入れた中国政府派遣研究員との研究についての指導・検討・討議の頻度

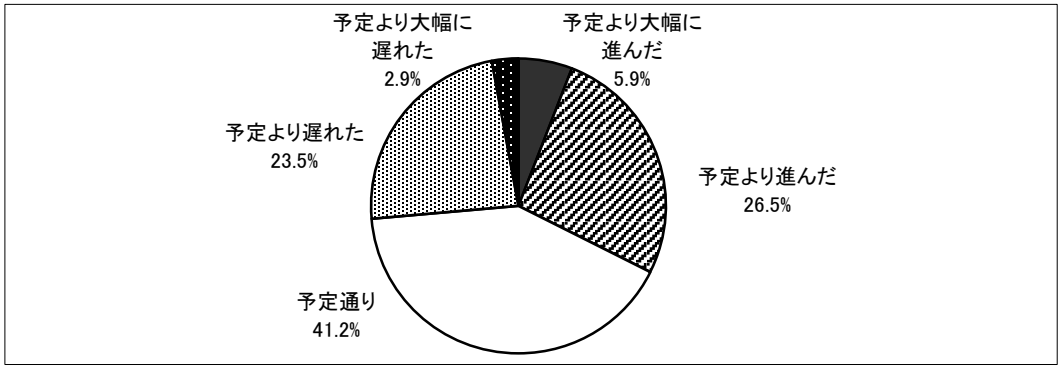


		全　体	週に 1回以上	月に 1回以上	3ヶ月に 1回以上	その他	無回答
全　体	名	59	22	9	2	1	0
	%	*100.0*	*64.7*	*26.5*	*5.9*	*2.9*	*0.0*

【その他】

・コミュニケーションが取れないので、日本語の習得に力を入れるよう勧めた。毎日、日本語で文章を書いてメールで送るよう指導し（日常の事項や研究に関連する事項について）、特別の対応として研究室秘書と毎日 30 分間日本語で会話をする時間を作ったが、実験を行うに必要な会話能力は、通常期待されるようなレベルにならなかった。

Q2.　受入れた中国政府派遣研究員の研究計画の進行度

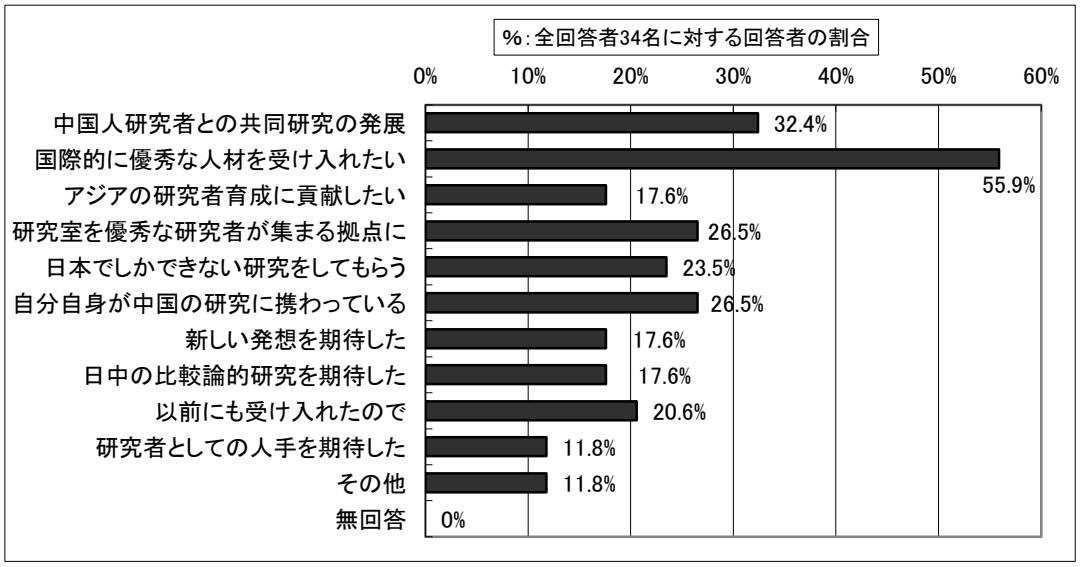


		全　体	予定より 大幅に 進んだ	予定より 進んだ	予定通り	予定より 遅れた	予定より 大幅に 遅れた	無回答
全　体	名	59	2	9	14	8	1	0
	%	*100.0*	*5.9*	*26.5*	*41.2*	*23.5*	*2.9*	*0.0*

Q2-1.　受入れた中国政府派遣研究員の研究計画が予定通り遂行できなかった要因（３つまで）

・日本語及び英語でのコミュニケーションがとれなかった＜3 件＞
・中国政府派遣研究員の研究能力が不足した＜1 件＞
・自分が忙しすぎて、十分な研究・検討・討議ができなかった＜3 件＞
・研究課題の選択、来日前の打合せ及び準備が不十分だった＜3 件＞
・中国政府派遣研究員の研究意欲が不足した＜2 件＞
・中国政府派遣研究員の不測の事態により、研究時間が不足した＜2 件＞
・その他＜4 件＞
　・派遣研究員の希望する研究課題であったが、本人の従来の専門と異なるため研究実施に困難が伴った。
　・研究のための打合せ時間を取っても生活上の悩みの相談に終始してしまうことが多かった。
　・地震による帰国（2 件）

Q3.　中国政府派遣研究員制度を利用した理由や期待したこと（３つまで）

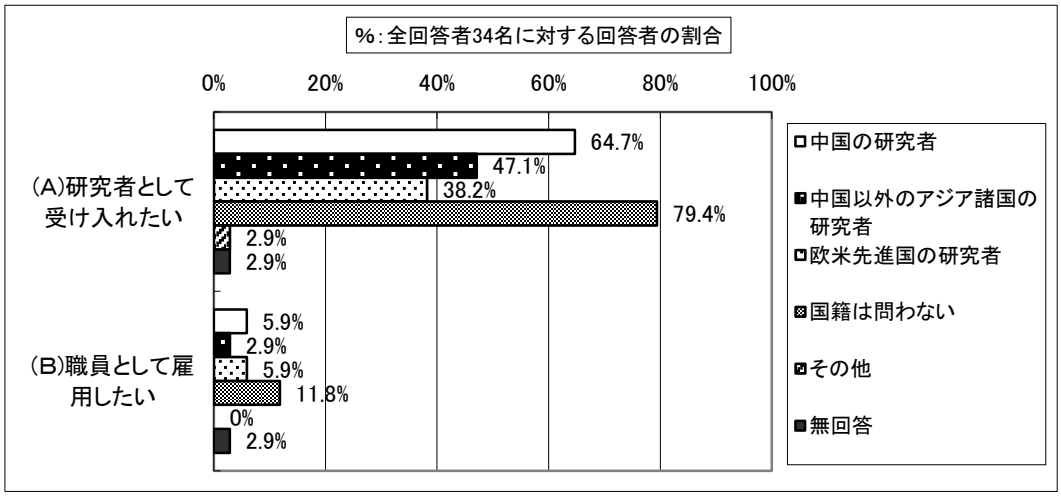


		全　体	中国人研究者との共同研究の発展	国際的に優秀な人材を受け入れたい	アジアの研究者育成に貢献したい	研究室を優秀な研究者が集まる拠点に	日本でしかできない研究をしてもらう	自分自身が中国の研究に携わっている
全　体	名	34	11	19	6	9	8	9
	%	*100.0*	*32.4*	*55.9*	*17.6*	*26.5*	*23.5*	*26.5*

		全　体	新しい発想を期待した	日中の比較論的研究を期待した	以前にも受け入れたので	研究者としての人手を期待した	その他	無回答
全　体	名	34	6	6	7	4	4	0
	%	*100.0*	*17.6*	*17.6*	*20.6*	*11.8*	*11.8*	*0.0*

【その他】・以前の留学生からの推薦

Q4.　貴機関の国際化戦略等を考慮した今後のこの制度の有効活用について（複数可）



（A）　研究者として受け入れたい

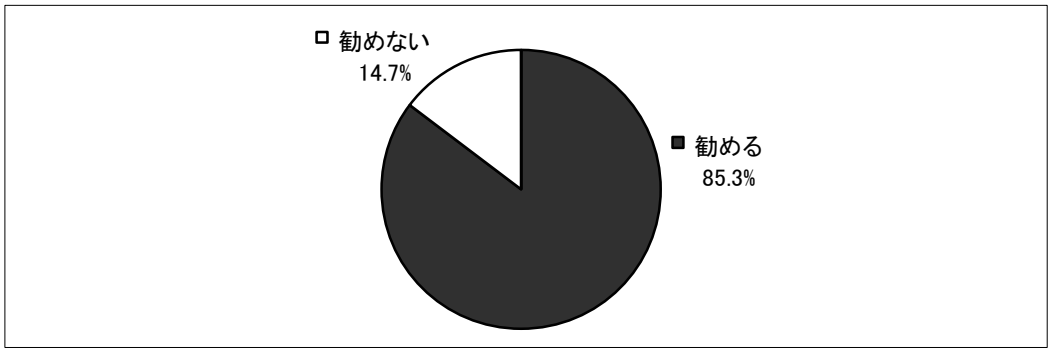
		全　体	中国からの研究者	中国を除くアジア研究者	欧米先進国からの研究者	国籍は問わない	その他	無回答
全　体	名	34	22	16	13	27	1	1
	%	*100.0*	*64.7*	*47.1*	*38.2*	*79.4*	*2.9*	*2.9*

【その他】・モンゴルからの研究者

（B）　職員として雇用したい

		全　体	中国からの研究者	中国を除くアジア研究者	欧米先進国からの研究者	国籍は問わない	その他	無回答
全　体	名	34	2	1	2	4	0	1
	%	*100.0*	*5.9*	*2.9*	*5.9*	*11.8*	*0.0*	*2.9*

Q5.　本制度による中国政府派遣研究員を受入れることを同僚の研究者に勧めるか

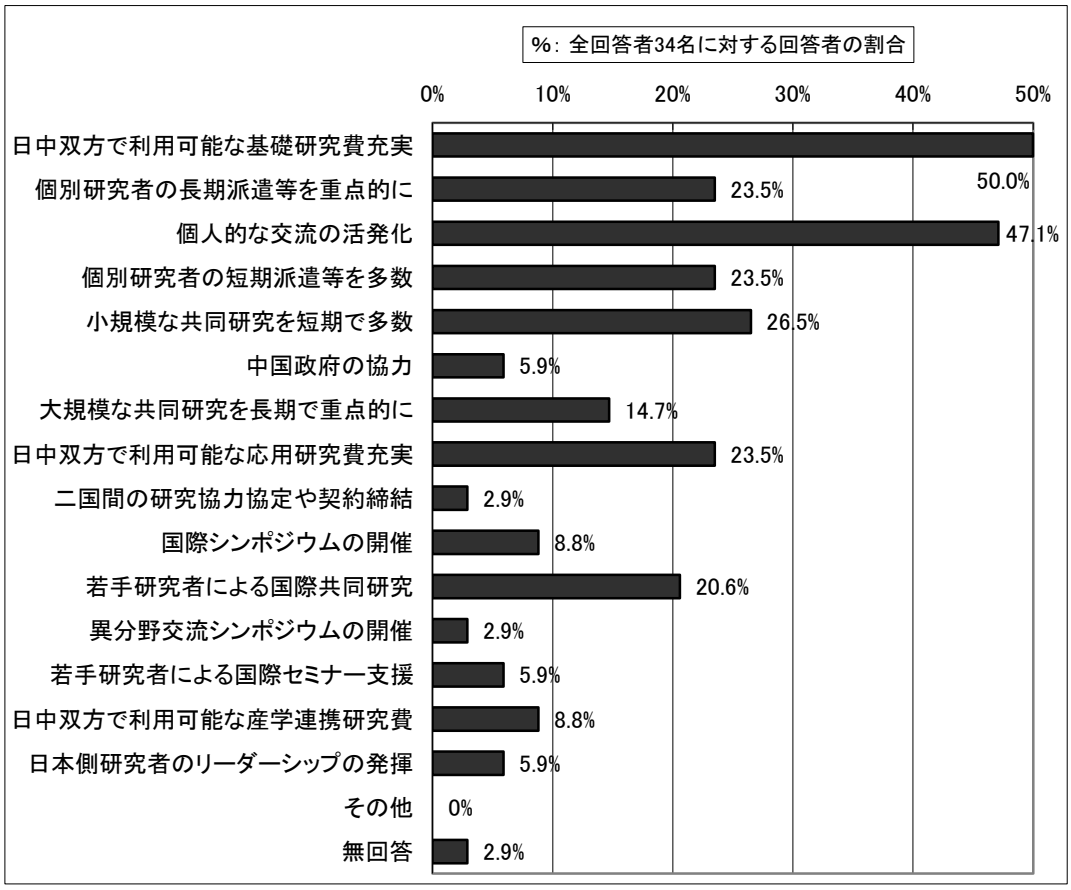


		全　体	勧める	勧めない	無回答
全　体	名	34	29	5	0
	%	*100.0*	*85.3*	*14.7*	*0.0*

Q5-1.　同僚に薦めない理由　＜コメント６件＞

- 今まで中国人研究者と多数の共同研究を行ってきており、研究意欲、集中力とも優れた方が多く有意義な関係を築いてきた。しかし本制度による派遣研究者は対等な関係での共同研究を行うことを意図しておらず期待とは異った。
- 今回受入れた研究員は人物、研究能力ともに良い人物であったが、必ずしも全員がそうではないことを仄聞している。受入れるかどうかはケースバイケースであり、十分に事前コミュニケーションを取って決めるのが良いと思う。
- 研究レベルで英語を使うことのできる研究者でなければ国際的な共同研究は成立しない。この制度の場合、日本語さえできれば良いようだが、中国人の日本語能力は人によって著しく異なり、日本語は不十分、英語は全く駄目というケースが出るリスクがある。
- 受け入れ先を選択した経緯が日本側の受入研究者に不明な場合、研究実施の可能性を推定し受入を判断しなければならず、リスクが大きい。事前に派遣研究者と受入研究者の間に十分な研究交流が必要。
- 昨今の中国政府の政策（技術の導入方法と産業化）に関して不安を覚える。個々の研究員はまじめ。
- （勧めると回答の上）上記問いへの答えは難しい。今回のケース（日本語・英語能力共に著しく不足）があるからといって、今後受入れないという結論には至っていない。しかし、事前に少なくとも語学力を正しく判定することが重要である。今回はメールや手紙の交換だけではコミュニケーション能力を判断できない稀なケースであった。

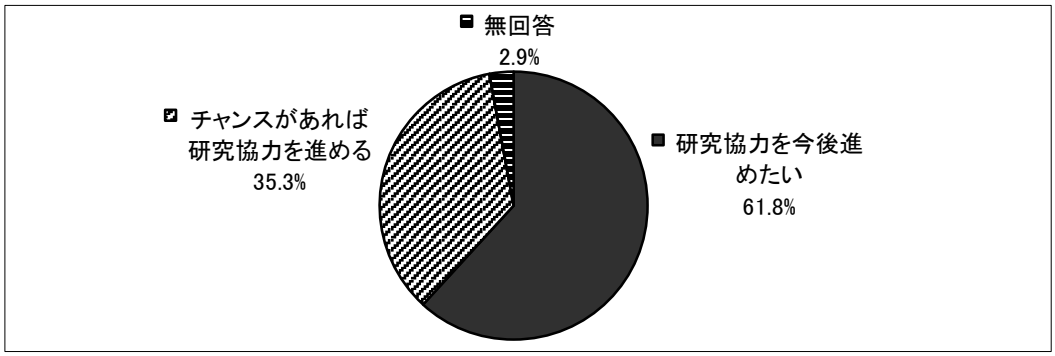
Q6.　日中の研究協力を進めるために重要な事項（３つまで）



		全　体	日中双方で利用可能な基礎研究費充実	個別研究者の長期派遣等を重点的に	個人的な交流の活発化	個別研究者の短期派遣等を多数	小規模な共同研究を短期で多数	中国政府の協力	大規模な共同研究を長期で重点的に	日中双方で利用可能な応用研究費充実
全　体	名	34	17	8	16	8	9	2	5	8
	%	100.0	50.0	23.5	47.1	23.5	26.5	5.9	14.7	23.5

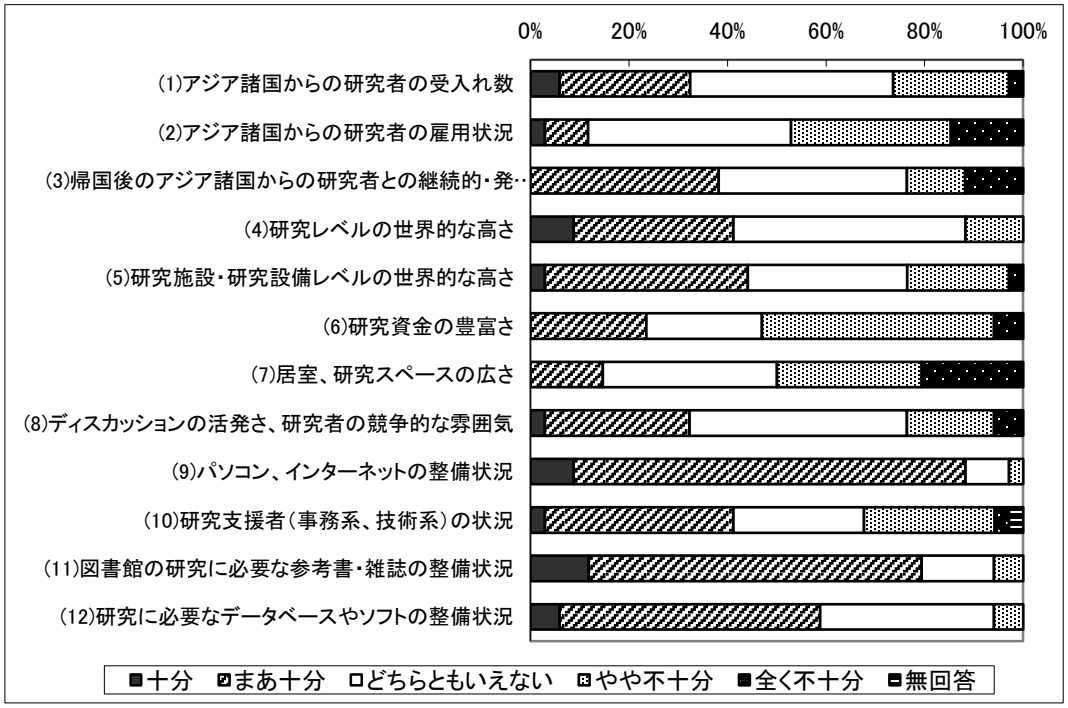
		全　体	二国間の研究協力協定や契約締結	国際シンポジウムの開催	異分野交流シンポジウムの開催	若手研究者による国際セミナー支援	日中双方で利用可能な産学連携研究費	日本側研究者のリーダーシップの発揮	その他	無回答
全　体	名	34	1	3	1	2	3	2	0	1
	%	100.0	2.9	8.8	2.9	5.9	8.8	5.9	0.0	2.9

Q7.　今後中国との研究協力を進めるか



		全　体	研究協力を今後進めたい	チャンスがあれば研究協力を進める	研究協力を今後進めるつもりはない	無回答
全　体	名	34	21	12	0	1
	%	100.0	61.8	35.3	0.0	2.9

Q8.　アジア諸国からの研究者に対する日本の大学等研究機関の研究環境について



(1)　アジア諸国からの研究者の受入数

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	2	9	14	8	1	0
	%	100.0	5.9	26.5	41.2	23.5	2.9	0.0

(2)　アジア諸国からの研究者の雇用状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	1	3	14	11	5	0
	%	100.0	2.9	8.8	41.2	32.4	14.7	0.0

(3)　帰国後のアジア諸国からの研究者との継続的・発展的交流

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	0	13	13	4	4	0
	%	100.0	0.0	38.2	38.2	11.8	11.8	0.0

(4)　研究レベルの世界的な高さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	3	11	16	4	0	0
	%	100.0	8.8	32.4	47.1	11.7	0.0	0.0

(5)　研究施設・研究設備レベルの世界的な高さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	1	14	11	7	1	0
	%	100.0	2.9	41.2	32.4	20.6	2.9	0.0

(6)　研究資金の豊富さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	0	8	8	16	2	0
	%	100.0	0.0	23.5	23.5	47.1	5.9	0.0

(7)　居室・研究スペースの広さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	0	5	12	10	7	0
	%	100.0	0.0	14.7	35.3	29.4	20.6	0.0

(8)　ディスカッションの活発さ、研究者の競争的な雰囲気

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	1	10	15	6	2	0
	%	100.0	2.9	29.4	44.1	17.7	5.9	0.0

(9)　パソコン、インターネットの整備状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	3	27	3	1	0	0
	%	100.0	8.8	79.5	8.8	2.9	0.0	0.0

(10)　研究支援者（事務系、技術系）の状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	1	13	9	9	1	1
	%	100.0	2.9	38.3	26.5	26.5	2.9	2.9

（11） 図書室の研究に必要な参考書・雑誌の整備状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	4	23	5	2	0	0
	%	*100.0*	*11.8*	*67.6*	*14.7*	*5.9*	*0.0*	*0.0*

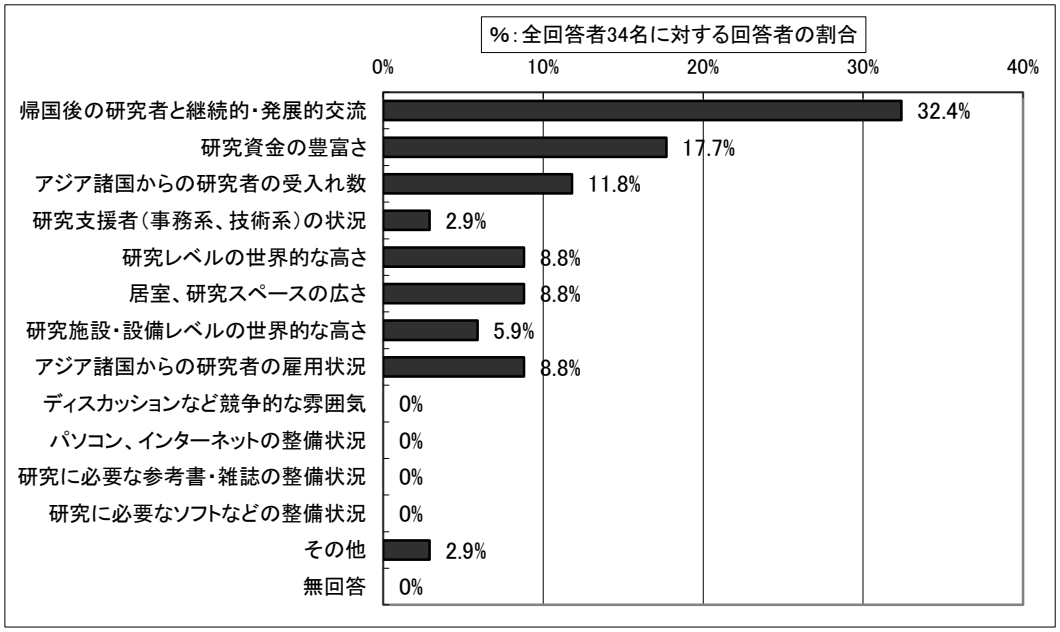
（12） 研究に必要なデータベースやソフトの整備状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	2	18	12	2	0	0
	%	*100.0*	*5.9*	*52.9*	*35.3*	*5.9*	*0.0*	*0.0*

（13） その他

「まあ十分」（1 件）、
「どちらともいえない」（1 件）、
「全く不十分」（1 件）：日本側の研究正職員数

Q8-1. アジア諸国からの研究者に対する日本の研究環境の最も重要な改善すべき事項

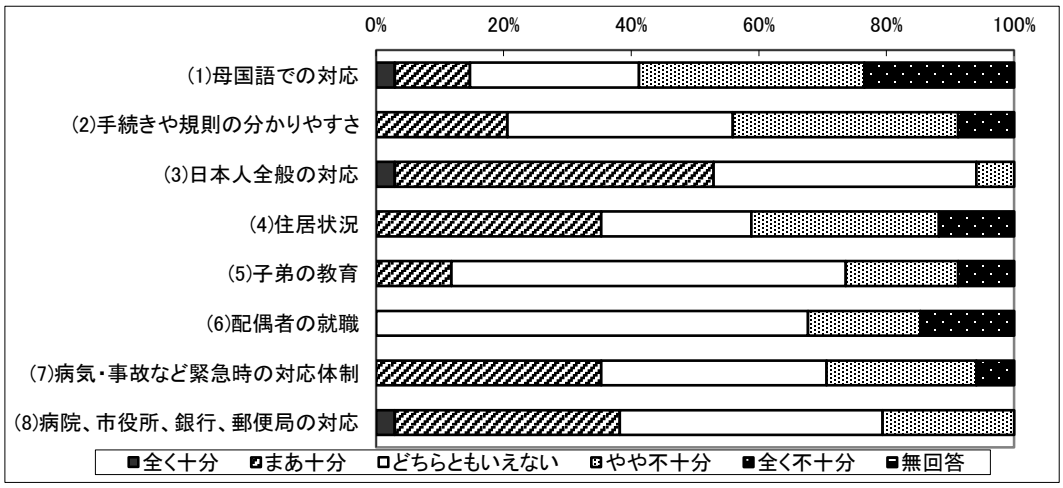


		全　体	帰国後の研究者と継続的・発展的交流	研究資金の豊富さ	アジア諸国からの研究者の受入れ数	研究支援者（事務系、技術系）の状況	研究レベルの世界的な高さ	居室、研究スペースの広さ	研究施設・設備レベルの世界的な高さ
全　体	名	34	11	6	4	1	3	3	2
	%	*100.0*	*32.4*	*17.7*	*11.8*	*2.9*	*8.8*	*8.8*	*5.9*

		全　体	アジア諸国からの研究者の雇用状況	ディスカッションなど競争的な雰囲気	パソコン、インターネットの整備状況	研究に必要な参考書・雑誌の整備状況	研究に必要なソフトなどの整備状況	その他	無回答
全　体	名	34	3	0	0	0	0	1	0
	%	*100.0*	*8.8*	*0.0*	*0.0*	*0.0*	*0.0*	*2.9*	*0.0*

【その他】・病院内の Ph.D が活躍できる場所

Q9.　アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境について



(1)　母国語での対応

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	1	4	9	12	8	0
	%	100.0	2.9	11.8	26.5	35.3	23.5	0.0

(2)　手続きや規則の分かりやすさ

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	0	7	12	12	3	0
	%	100.0	0.0	20.6	35.3	35.3	8.8	0.0

(3)　日本人全般の対応

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	1	17	14	2	0	0
	%	100.0	2.9	50.0	41.2	5.9	0.0	0.0

(4)　住居状況

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	0	12	8	10	4	0
	%	100.0	0.0	35.3	23.5	29.4	11.8	0.0

(5)　子弟の教育

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	0	4	21	6	3	0
	%	100.0	0.0	11.8	61.8	17.6	8.8	0.0

(6)　配偶者の就職

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	0	0	23	6	5	0
	%	100.0	0.0	0.0	67.7	17.6	14.7	0.0

(7)　病気・事故など緊急時の対応体制

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	0	12	12	8	2	0
	%	100.0	0.0	35.3	35.3	23.5	5.9	0.0

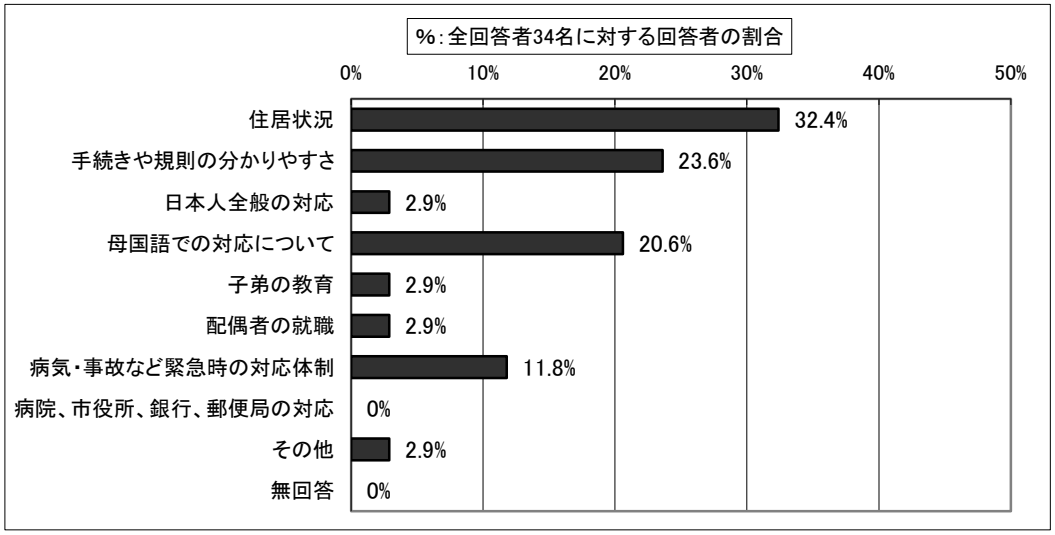
(8)　病院、市役所、銀行、郵便局の対応

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	34	1	12	14	7	0	0
	%	100.0	2.9	35.3	41.2	20.6	0.0	0.0

(9)　その他

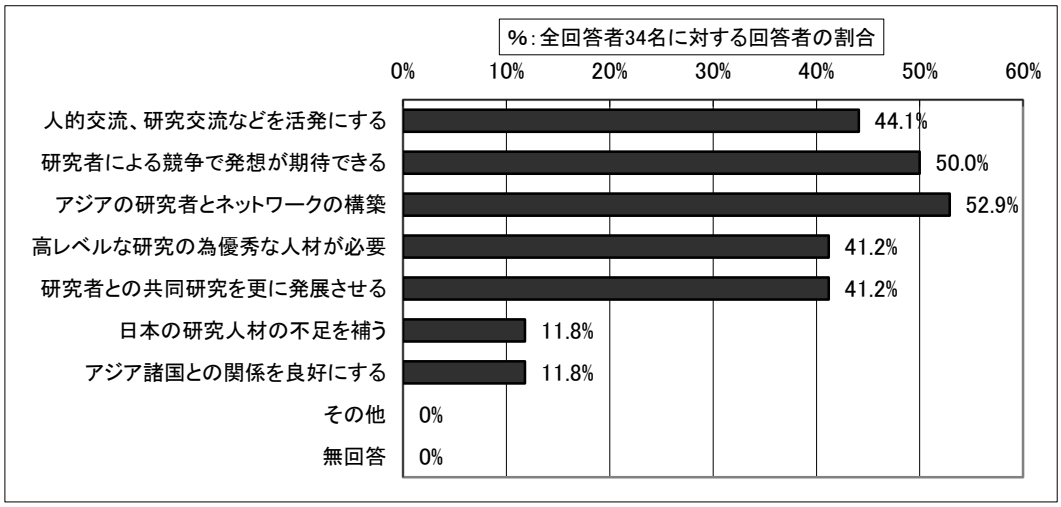
「まあ十分」(1 件)、
「どちらともいえない」(1 件)、
「やや不十分」(1 件)：日本における生活環境の実態情報

Q9-1.　アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境の最も重要な改善すべき事項



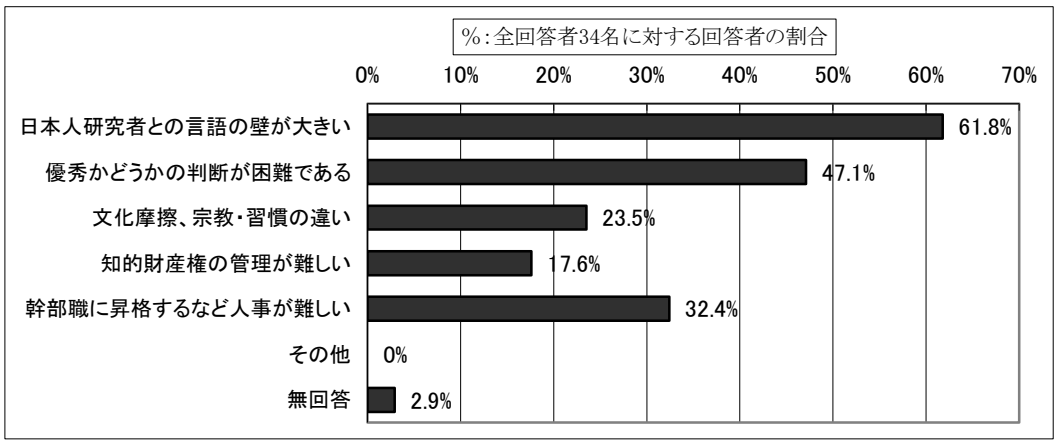
		全　体	住居状況	手続きや規則の分かりやすさ	日本人全般の対応	母国語での対応について	子弟の教育	配偶者の就職	病気・事故など緊急時の対応体制	病院、市役所、銀行、郵便局の対応	その他
全　体	名	34	11	8	1	7	1	1	4	0	1
	%	100.0	32.4	23.6	2.9	20.6	2.9	2.9	11.8	0.0	2.9

Q10.　日本の研究機関と企業がアジア諸国からの研究者を雇用する理由（３つまで）



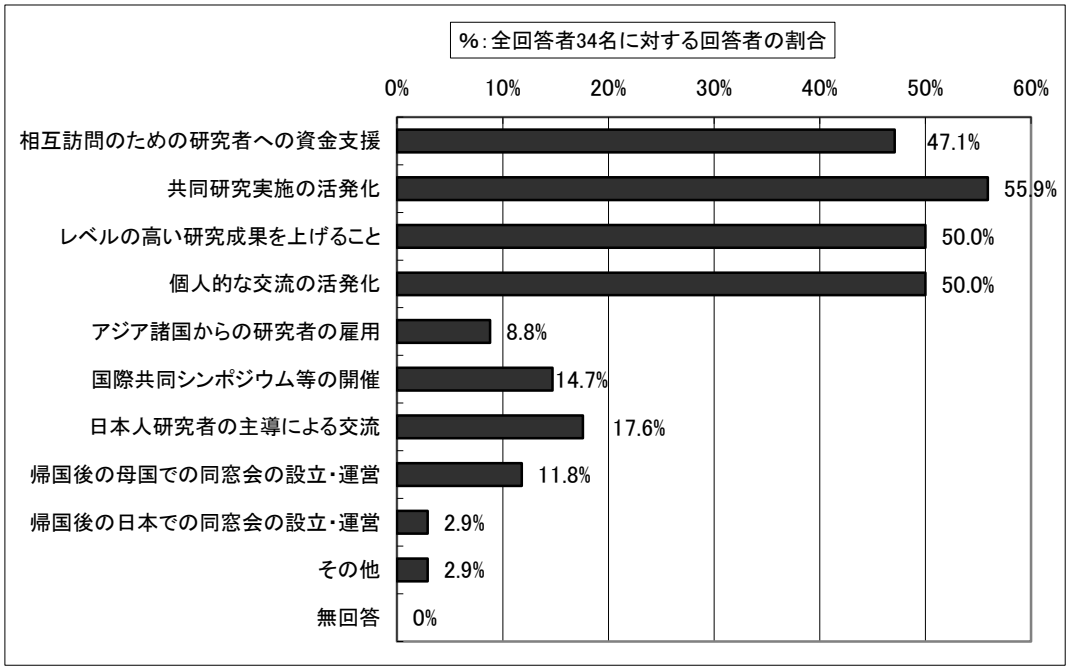
		全　体	人的交流、研究交流などを活発にする	研究者による競争で発想が期待できる	アジアの研究者とネットワークの構築	高レベルな研究の為優秀な人材が必要	研究者との共同研究を更に発展させる	日本の研究人材の不足を補う	アジア諸国との関係を良好にする
全　体	名	34	15	17	18	14	14	4	4
	%	100.0	44.1	50.0	52.9	41.2	41.2	11.8	11.8

Q10-1.　日本の研究機関と企業がアジア諸国からの研究者を雇用する場合の問題点（３つまで）



		全　体	日本人研究者との言語の壁が大きい	優秀かどうかの判断が困難である	文化摩擦、宗教・習慣の違い	知的財産権の管理が難しい	幹部職に昇格するなど人事が難しい	その他	無回答
全　体	名	34	21	16	8	6	11	0	1
	%	100.0	61.8	47.1	23.5	17.6	32.4	0.0	2.9

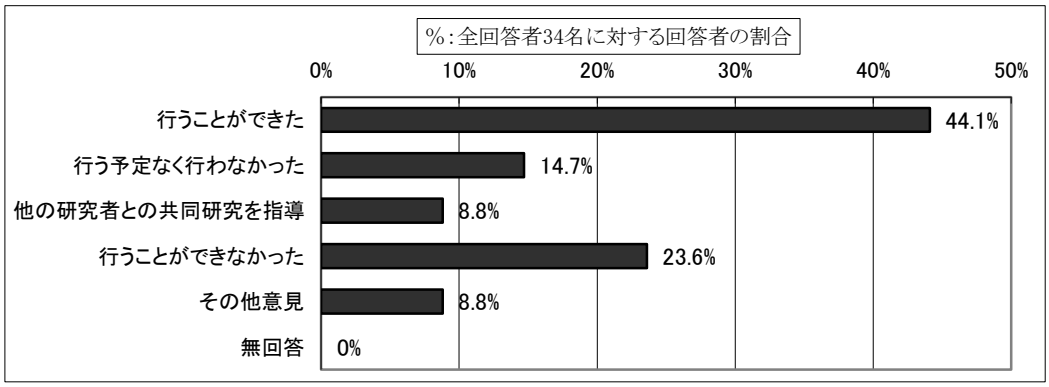
Q11.　アジア諸国からの研究者との継続的・発展的交流促進に重要な事項（３つまで）



		全　体	相互訪問のための研究者への資金支援	共同研究実施の活発化	レベルの高い研究成果を上げること	個人的な交流の活発化	アジア諸国からの研究者の雇用	国際共同シンポジウム等の開催	日本人研究者の主導による交流	帰国後の母国での同窓会の設立・運営	帰国後の日本での同窓会の設立・運営	その他
全　体	名	34	16	19	17	17	3	5	6	4	1	1
	%	100.0	47.1	55.9	50.0	50.0	8.8	14.7	17.6	11.8	2.9	2.9

【その他】・日本人の正職員スタッフ数の増加

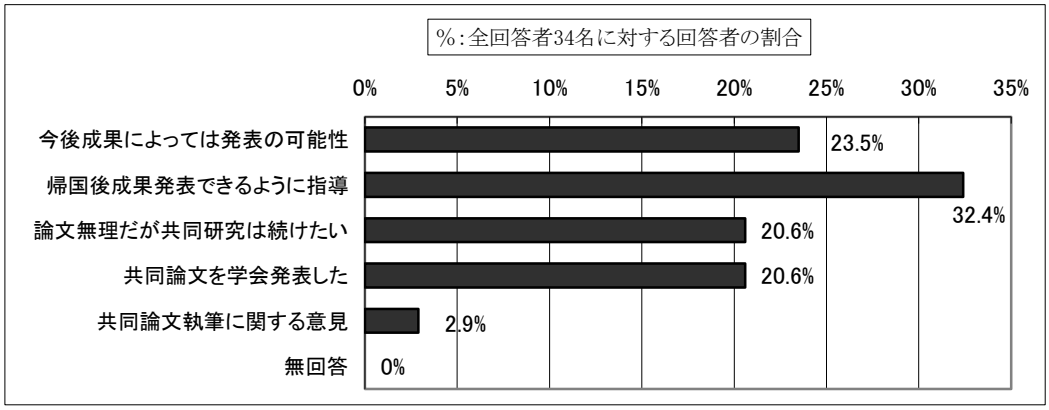
Q12-1.　滞在中の派遣研究員との共同研究



		全　体	行うことができた	行う予定なく行わなかった	他の研究者との共同研究を指導	行うことができなかった	その他意見	無回答
全　体	名	34	15	5	3	8	3	0
	%	100.0	44.1	14.7	8.8	23.6	8.8	0.0

【その他】・日本語、英語共に会話ができるレベルではなく、十分なコミュニケーションが取れなかった。

Q12-2.　共同論文の発表予定



		全　体	今後成果によっては発表の可能性	帰国後成果発表できるように指導	論文無理だが共同研究は続けたい	共同論文を学会発表した	共同論文執筆に関する意見	無回答
全　体	名	34	8	11	7	7	1	0
	%	100.0	23.5	32.4	20.6	20.6	2.9	0.0

【その他】・該当者個人の語学力の問題により、滞在中に満足な研究が出来なかったため回答不可。

Q13.　中国政府派遣研究員制度、日本の大学等研究機関の改善すべき課題等についての意見

(1)　日本が世界的に優秀なアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）を引きつけるために重要なこと　＜31 名（91.2%）から寄せられた意見＞

［研究環境］

- 高水準の研究とオープンな雰囲気
- 日本での安定した雇用条件と言語環境の整備。研究内容の高度化と共同研究。
- 日本の研究水準を上げること。
- 魅力的な研究テーマ
- 高レベルの研究内容
- 研究環境が重要。文系ならば書籍･データベース及び優秀な研究者などの資源。
- 優秀な研究者が来たら、可能な限り正式論文を共同で書くこと
- 十分な共同研究の体制が整っており、研究者にとって有用な成果を得て帰国できる可能性が大きいことを十分に発信していること。
- 日本の研究者の正確な情報を伝えること。
- 日本の優れた研究環境
- 特に外国人向けといわずとも、研究環境、特に大学の研究環境を全体に底上げすることが現在最も不足している。とりわけ問題なのは、施設・設備の更新が不十分であること、サポートスタッフが不足しているために研究効率が悪いことなどである。これらの改善により日本人にとっての研究環境が改善され、それが外国人を惹き付ける結果ともなる。さらに人事の流動性を高めること。全体の予算額を変えずとも､規制緩和により､より流動性を高める可能性もある。
- 日本の大学のグローバル化を促進させる。まず大学のカリキュラムを国際的に通用するレベルに高める必要がある。大学のカリキュラムが国際的な通用性を備えたものであること、さらにはその「学習効果」を証明する学位の水準について、国内外から信頼が得られていることが重要だと考える。また、国際共通語である英語で運用される授業の増加も必要。学位取得後、日本企業・研究機関における研修や就職の機会の増加も研究者を惹き付ける重要な要素と考える。
- 良い研究が出来る環境の提供と、日本の高い科学力や技術力
- 若手研究者の長期的な研究サポート
- より最先端の研究やより高度な技術力を日本の研究者が持つ。

［経済的支援］

- 研究資金、研究施設・研究設備のさらなる充実が重要。
- 経済的支援
- 研究資金的にも潤沢で研究スペースがよりあること
- 研究の実力をアピールでき、また十分な研究助成金のサポートが必要。
- 研究資金が必要。

［生活環境］

- 同伴家族（特に子息の就学など）のケアを含めた滞日環境の整備。
- 住環境

- 研究のソフト面では大きな問題はないと思われるが、ハード面、特に研究室や滞在中の住居の確保、日常生活のサポートなどで状況は必ずしも良いとは言えず、改善が必要である。
- 住居、緊急時の対応など、良好な生活を送るための環境整備が必要
- 配偶者に対する配慮

［その他］

- 国際誌への論文発表などを通して、研究のレベルが高いことを示すこと。
- 中国政府派遣研究員の派遣に際しては、最低１年程度の交流実績を義務付け、事前の研究交流実績がある上での派遣でないと効果が上がらない。受入研究機関の選定についても時間をかけること。派遣による研究の進展を期待できる者に機会を与える制度が必要であり、日本側からも派遣研究者の選定に助言できるようにすると良い。
- 英語でのコミュニケーション能力と論文執筆能力を、日本側と来日研究者側両方で持っていなければ、高度な国際的レベルでの研究は行うことができない。
- 研究環境、住環境などの総合的な情報の事前提供。
- アメリカ至上主義からお互いに脱出する。
- 文系の研究は着手してから成果までに時間がかかるため、早めのコンタクトと十分な準備期間の保有を制度の中で保証すること。
- 日本の研究成果を国際的に高めること
- 相互理解と研究支援が必要
- 柔軟な対応、官僚主義の打破
- 法分野では外国法の坩堝である日本で学ぶことがアジア諸国とりわけ中国にとっては非常に重要。シンガポールや香港のように、英国法が生きている国とは学ぶということの意味が全く異なる。法律「学」がないアメリカに留学してもその肩書きだけしか問題にならない。日本に来ることの意義をアピールすべき。
- 日本での研究内容、水準がアジア諸国の国家や社会において必要とされている課題を解決するために有用なレベルである事を十分に発信していること。

(2)　日本が今後、アジア諸国から世界的に優秀な研究者と研究協力を進めるために重要なこと　＜31 名（91.2%）から寄せられた意見＞

［研究環境］

- 共同研究を多く行い、国際学会発表、国際誌への論文発表、国際的な著作出版などを積極的に行うこと。日本に留学した外国人と、帰国後も良好な関係を保ち、研究・教育の両面で発展的な協力を続けること。
- 高いレベルの技術を持った研究グループ
- 研究のための資料、データ利用環境の整備が必要。
- 今までどおりの研究を継続すること。
- 優秀な学生を日本の大学に受入れる体制をできるだけ早く整えることが決定的に重要。大学教育を外向けに大きく変えることが最も効率的に優秀な研究者をアジアから惹き付けることになる。

- 国際的なワークショップなどの研究交流活動を通じて、研究者達がお互いに了解し共同研究のテーマを設定することが重要。
- 研究協力を進める上では豊富な情報、高度な研究機器、優れた人材、資金確保が必要不可欠。また共同研究に発展した場合、研究体制、利権の合意など、基本事項を相互確認しておくこと。
- 研究時間の確保

［経済的支援］

- 経済的支援
- 低次元の話だが、日本側が中国に行けば慣例として接待を受ける。彼らが日本に来れば返礼の必要が生じるが、公費での飲食は不可能のため自腹を切ることになる。これが特に若手にはかなりの負担となる。１回でもそうした会合への補助制度があるとありがたい。
- 個人が交流に費用をかけないですむように支援する制度の充実。
- 適切な資材購入や人材採用ができる自由度の高い潤沢な研究費
- 日本側の資金準備及び中国側の日本赴任へのエンカレッジ
- 双方の多くの研究者を短期あるいは長期、派遣もしくは招へいすることが重要と考える。特に将来を担う若手研究者の相互交流と研究協力を促進するために、双方当局による財政的な支援が求められる。

［生活環境］

- 日常生活においても、ある程度英語でまかなえる生活環境が必要。
- 住居、家族の教育や就職状況。生活上の問題を相談できる窓口
- 日本の受入機関が外国人研究者のサポート機能を十分に整えているとは言えない場合があり、様々な手続きを受け入れ教員や研究室の負担とせずに、機関全体でサポートする機能を備える必要がある。

［その他］

- 官僚主義の打破
- 日本で学ぶ意義をアピールする。
- 研究者の交流
- 個々の問題であり一概に言えない。
- 継続的な交流
- 文化的に相互理解し、言葉の壁を越えて相手の良いところを認め、互いに交流を深めることが重要。
- 言語的な障害を取り除く努力
- 事務手続きの煩雑さの改善
- 自分自身に魅力的な研究テーマを持っていること。
- アジア諸国の研究者を若いうちに引き込むこと。
- 信頼関係と研究交流の継続
- 日本の研究者がイニシアティブを取って協力関係を作っていくこと。
- 双方、特に日本側にとってのメリット。自分の専門（日本語教育）の場合、こちらが得るものの方が少ない場合が多い。研究者によってはゼミ生を１人抱え

るのと同じ負担（指導や助言など）を感じる場合もある。共同研究の趣旨、受入枠についてそれぞれ十全な説明が不可欠と思われる。

- 自分の分野（文系）の状況について言えば、歴史的・文化的関係が深かった国々の状況をナショナリズムを超えて相互に研究することは文化交流上極めて重要な貢献となる。これは東アジア圏が世界史的にみて特別な位置づけであることに基づくが、このことを更に意識した学術政策を作ることが重要だと考える。
- 社会科学の分野に関していえば、それぞれの国のおかれた歴史的、社会的状況に関する特色を相互に理解した上で、相互に利益が生じるよう十分に研究計画を練ったうえで研究協力を行うべき。

(3)　これから来日制度に応募するアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）を受入れる研究者へのアドバイス　＜22 名（64.7%）から寄せられた意見＞

［研究環境］

- 事前に研究計画をよく聞き、研究者が求めている情報を適確に伝え、研究支援を行うことができるよう準備することが望まれる。
- 受入前にきちんと研究計画を立てること。
- 研究スタイルの差異、受入側が研究者に期待するもの、研究内容、仕事内容等を予め明確にし、受け入れ前に十分説明した方が良い。受け入れ後に食い違いが生じると亀裂となる。研究室に在室する時間など勤務体制も明確に。

［生活環境］

- 研究環境の整備は勿論だが、来日する研究者とその家族が日常生活で遭遇する様々な困難に対しても支援体制を構築する必要がある。
- 地震や台風に慣れていない地域からの人への心理的サポートも重要。
- 来日希望者は多いが、最も将来有望な層は欧米志向である。どうしたら彼らの目を日本に向かわせられるか考える必要がある。居住条件はかなり重要な要素。

［言語環境］

- 英語あるいは日本語でのコミュニケーション能力が最低限必要
- 文系の研究者が日本のことを研究するのに英語だけでは不可能。折角来日するのに英語と片言の日本語だけでは十分な成果をもたらしにくいという自らの反省点がある。
- 日本語または英語で最低限のディスカッションができる語学能力を身に付ける。
- 日本語での日常会話が出来ること。日本に滞在している同国の研究者を知っていることが望ましい。

［その他］

- ありのままを見せて本音を引き出す。
- 真に研究をやる気があって来日されたのかを十分に見極めること。
- 積極的に受入れること
- 研究者と共に自分自身の成果を上げるという気持ちで熱心に討議すること。
- コミュニケーションを取る。
- 来日前の研究者情報は不十分なことが多く、来日後に本人の能力、知識、経験

等が明らかになるのが通例。色々なケースがあることを当然と考えた方が良い。

- 来日研究者について事前にどのような目的やレベルを持っているかを確認することが重要。
- 来日研究者には受入研究者に頼ることなく、自立的に研究や事務処理に当たってほしい。
- 受入先を決める前に、１年以上の交流実績を作って応募してもらうこと。
- 分野や研究者の個性により出てくる問題は異なる。やはり人的交流が一番大切。
- カウンターパートをしっかりと選ぶべし。
- 事前に十分なコンタクトを取ることが決定的に重要。アジア各国の優秀な学生や研究者は、留学先や滞在先について従来よりはるかに多くの選択枝を持っている。これを逆に受入側から見ると、これまで優秀な学生や研究者が来たルートであっても、今後は必ずしも良い人材だけが来るとは限らないことになる。この点に注意して事前にコンタクトを重ねておくことが必要。

(4)　その他の意見　＜12 名（35.3%）から寄せられた意見＞

［研究環境］

- 自分の専門はモンゴル文学であるが、中国の大学や研究機関に所属するモンゴル人研究者を幅広く招へいするだけでなく、モンゴル国の大学や研究機関に所属する研究者も可能なれば招へいし研究協力を進めることが重要であると考えており、そのための支援が必要。
- 今回研究室としての居室が確保できなかった。大学は最低限の研究環境の提供をすべきである。
- 研究教育も含め、世界から日本への関心が急激に失われている。独自性のある研究が不可欠。
- 来日研究者には学会などにも参加する機会を持たせることが必要。
- 中国人留学生が熱心に勉強して研究者としての能力をようやく備えても、帰国後家庭の事情等による周囲の圧力によって研究が出来ない環境となることが多いようである。また折角大学に就職できたとしても研究室が不足していたり過剰な成果主義のため学問が根付きにくいのではないか。研究環境を改善しないことには日本での勉強の成果を生かし難いということを強く主張すべきだと考える。

［生活環境］

- 日本に慣れていない外国人も災害弱者と捉えてサポートできる体制が必要。

［言語環境］

- 受入判断材料として３名から推薦状を得た。いずれも日本語は“Fluent”とあったが、実際は挨拶レベルだった。

［その他］

- 初期の適応・定着には留学生等によるサポートを要する。
- 一般論として中国や韓国からみると同じ文字を使う文化圏としてアプローチしやすいために安易に来日する者もいる。ここをどのようにフィルタリングする

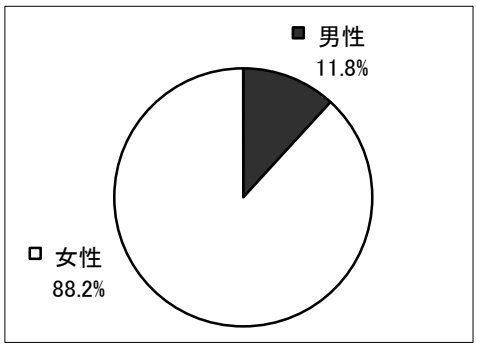
かが問われていると思う。

- 前回の受入研究者とは研究意識が異なり対応に苦慮することがあった。事前の交流は義務付けて欲しいところ。
- 受入研究員への研究費をホスト研究者が管理するのは不合理。この煩わしさを考えると実際の受入に躊躇する。
- これまでの支援に感謝する

５－４－３.「中国政府派遣研究員制度」受入事務担当者アンケート結果

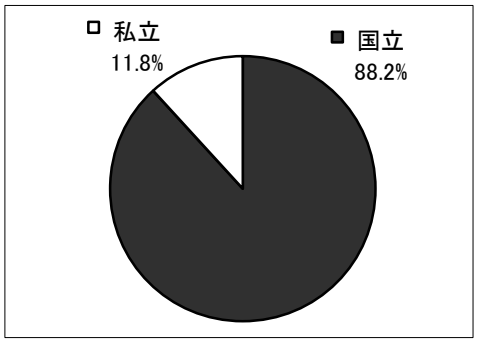
受入事務担当者に関する基本データ

a.　受入事務担当者の性別



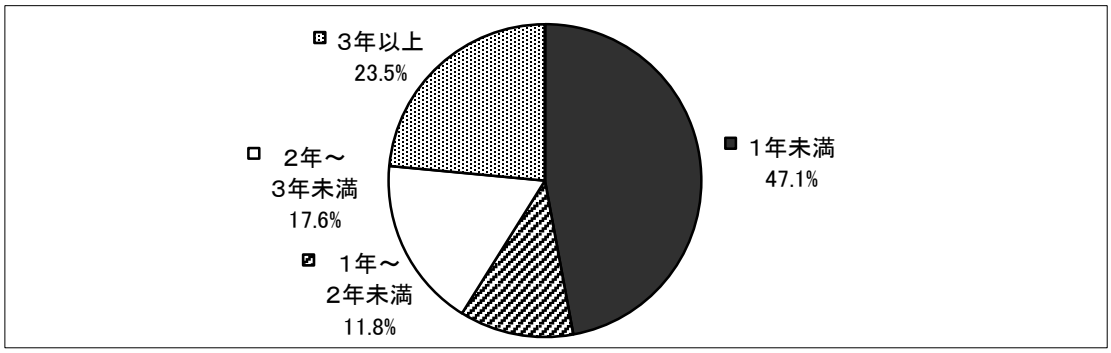
		全　体	男性	女性
全　体	名	17	2	15
	%	100.0	11.8	88.2

b.　受入研究機関



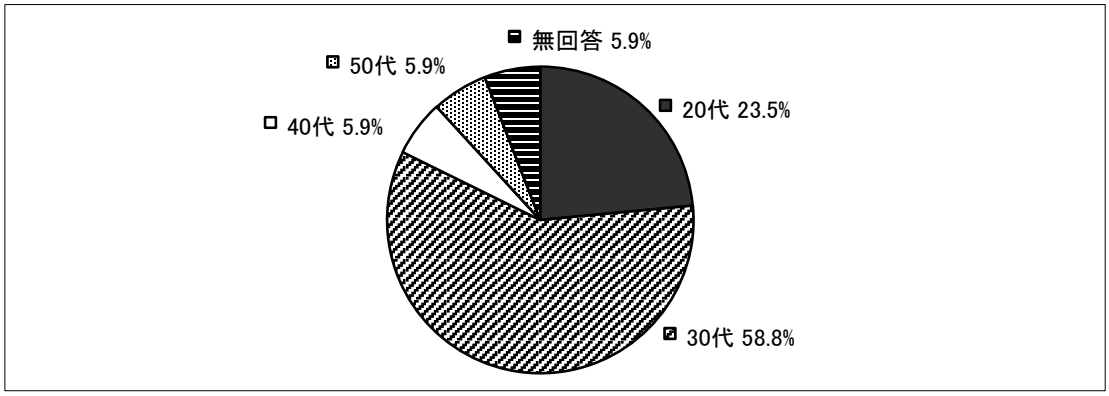
		全　体	国立	公立	私立
全　体	名	17	15	0	2
	%	100.0	88.2	0.0	11.8

Q1.　受入事務に携わった年数



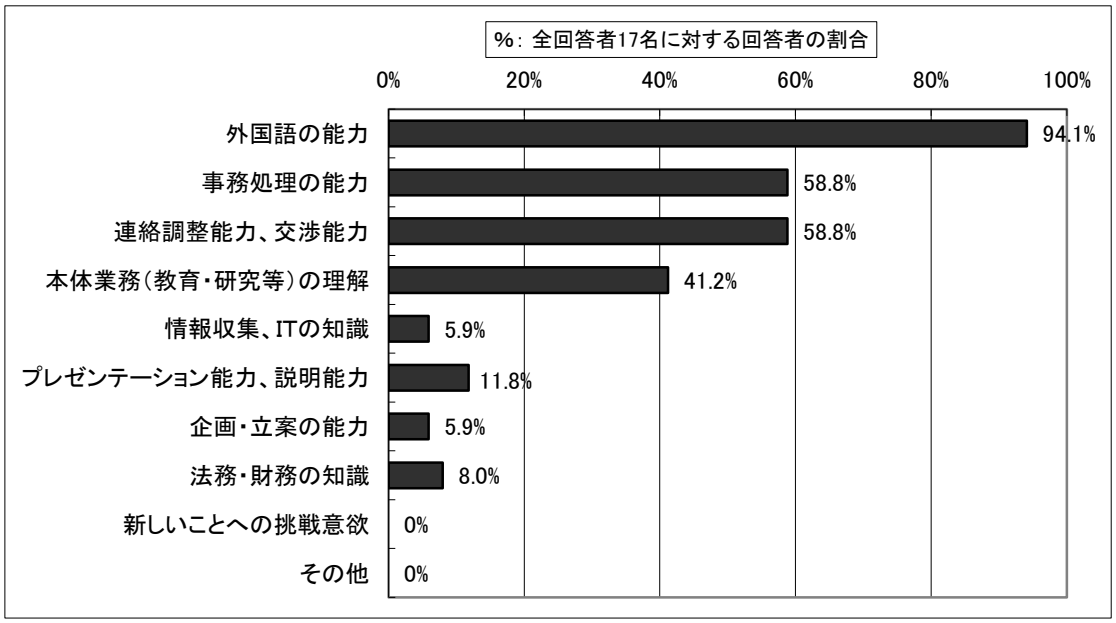
		全　体	１年未満	１年～２年未満	２年～３年未満	３年以上	無回答	平均
全　体	名	17	8	2	3	4	0	1.9年
	%	100.0	47.1	11.8	17.6	23.5	0.0	

Q2.　受入事務担当者の年齢



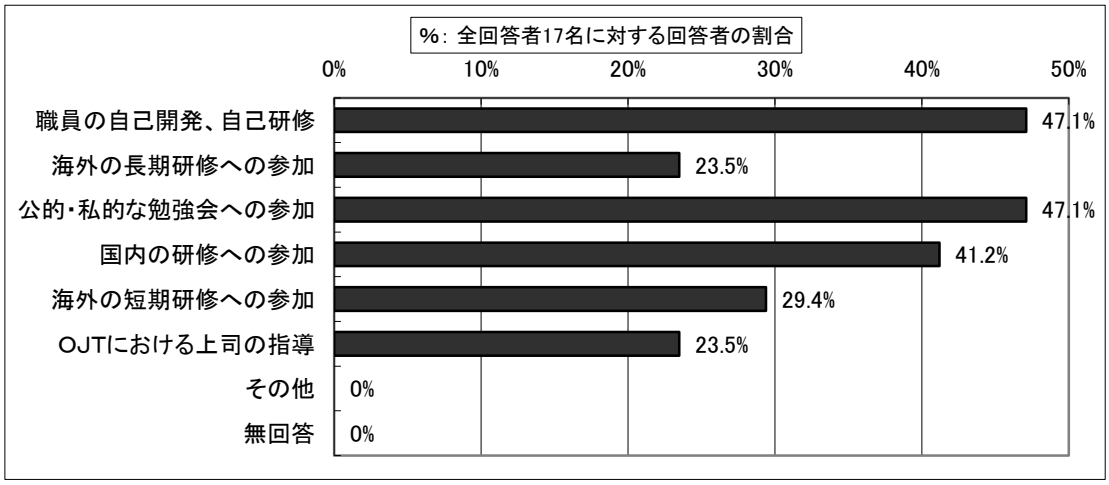
		全　体	20代	30代	40代	50代	60代以上	無回答
全　体	名	17	4	10	1	1	0	1
	%	100.0	23.5	58.8	5.9	5.9	0.0	5.9

Q3.　今後どのような能力を磨きたいか（３つまで）



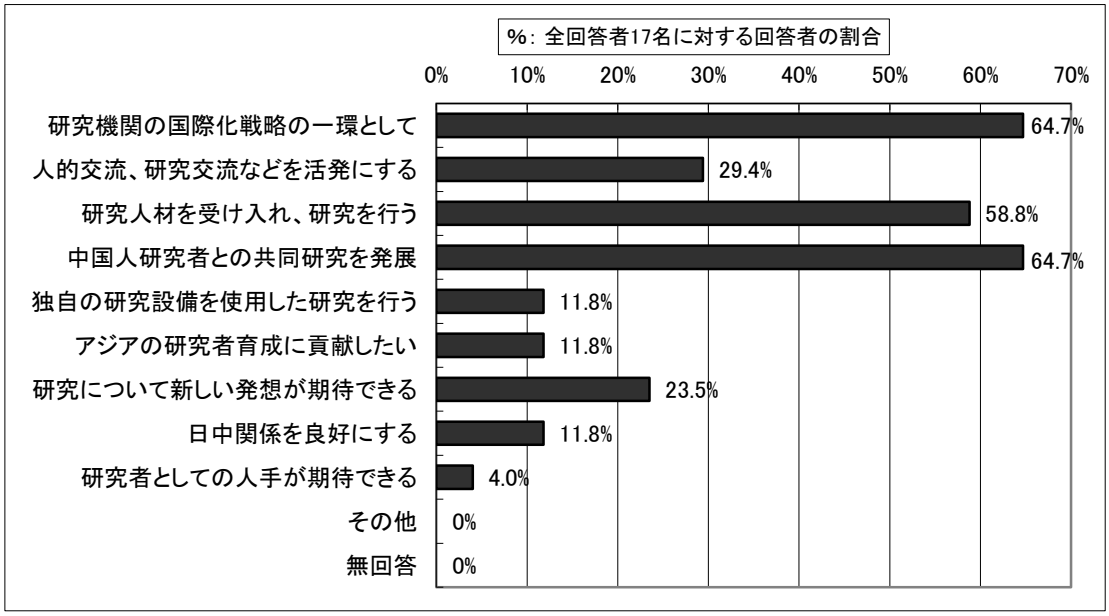
		全　体	外国語の能力	事務処理の能力	連絡調整能力、交渉能力	本体業務（教育・研究等）の理解	情報収集、ＩＴの知識	プレゼンテーション能力、説明能力	企画・立案の能力	法務・財務の知識	新しいことへの挑戦意欲	その他
全　体	名	17	16	10	10	7	1	2	1	2	0	0
	%	100.0	94.1	58.8	58.8	41.2	5.9	11.8	5.9	8.0	0.0	0.0

Q4.　能力向上策として何が重要か（３つまで）



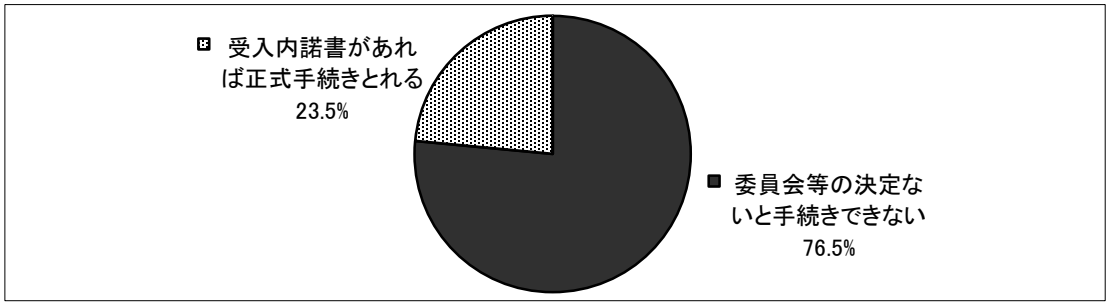
		全　体	職員の自己開発、自己研修	海外の長期研修への参加	公的・私的な勉強会への参加	国内の研修への参加	海外の短期研修への参加	ＯＪＴにおける上司の指導	その他	無回答
全　体	名	17	8	4	8	7	5	4	0	0
	%	*100.0*	*47.1*	*23.5*	*47.1*	*41.2*	*29.4*	*23.5*	*0.0*	*0.0*

Q5.　中国政府派遣研究員の受入れで期待していること（３つまで）



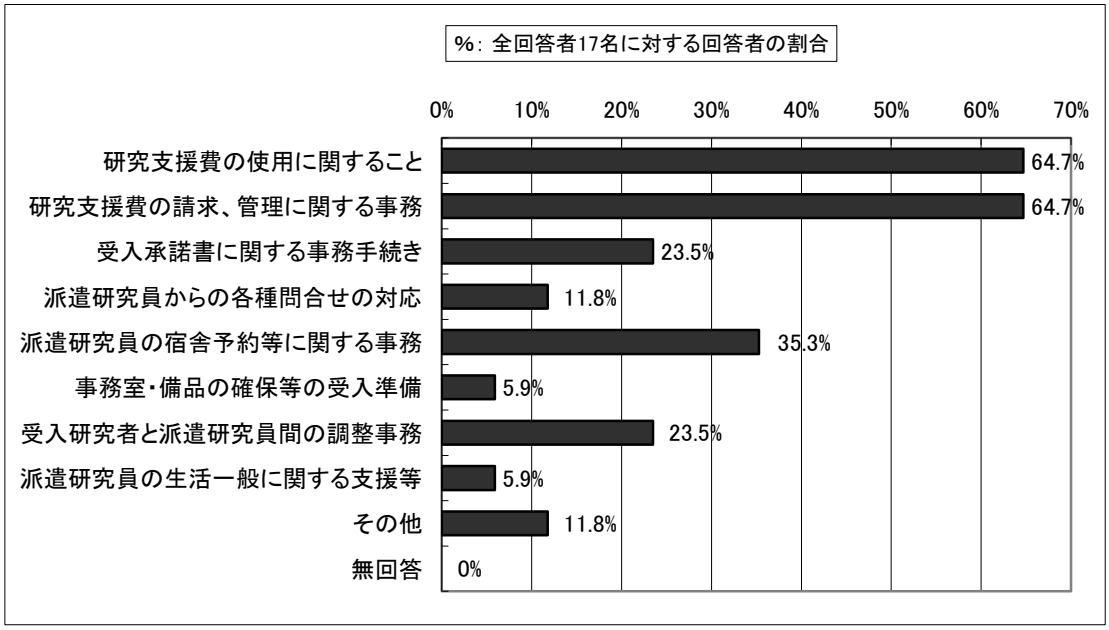
		全　体	研究機関の国際化戦略の一環として	人的交流、研究交流などを活発にする	研究人材を受け入れ、研究を行う	中国人研究者との共同研究を発展	独自の研究設備を使用した研究を行う	アジアの研究者育成に貢献したい	研究について新しい発想が期待できる	日中関係を良好にする	研究者としての人手が期待できる
全　体	名	17	11	5	10	11	2	2	4	2	0
	%	*100.0*	*64.7*	*29.4*	*58.8*	*64.7*	*11.8*	*11.8*	*23.5*	*11.8*	*4.0*

Q6.　中国政府派遣研究員の受入事務で、中国政府からの申請書に受入内諾書が添付されている場合の正式受入承諾手続きについて



		全　体	委員会等の決定ないと手続きできない	受入内諾書があれば正式手続きとれる	その他	無回答
全　体	名	17	13	4	0	0
	%	*100.0*	*76.5*	*23.5*	*0.0*	*0.0*

Q7.　中国政府派遣研究員の受入事務に関して苦労されること（３つまで）



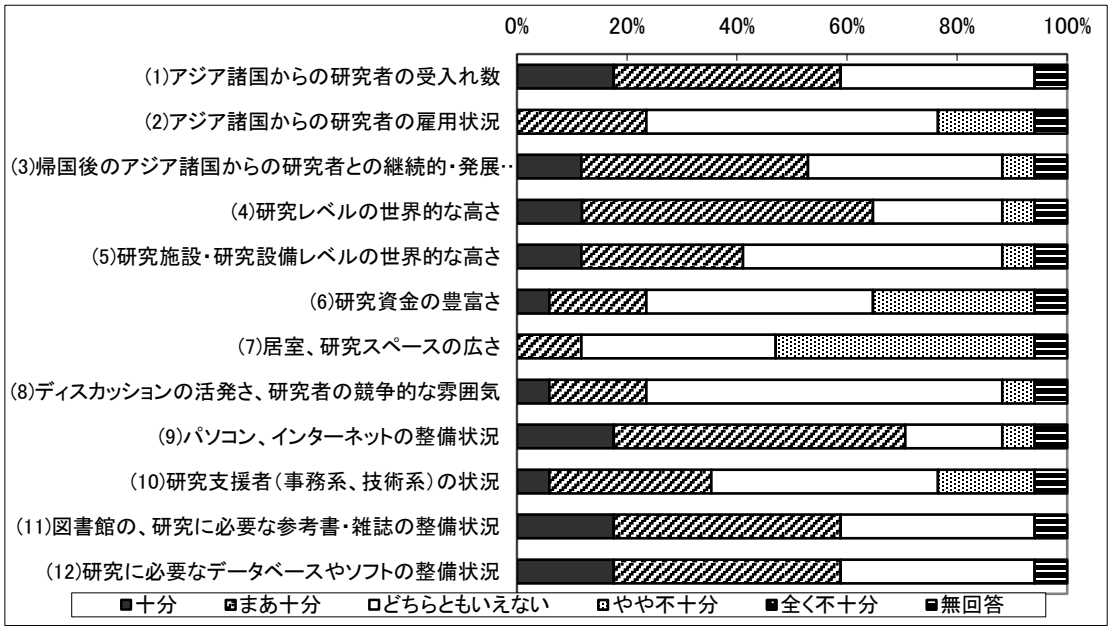
		全　体	研究支援費の使用に関すること	研究支援費の請求、管理に関する事務	受入承諾書に関する事務手続き	派遣研究員からの各種問合せの対応	派遣研究員の宿舎予約等に関する事務	事務室・備品の確保等の受入準備	受入研究者と派遣研究員間の調整事務	派遣研究員の生活一般に関する支援等	その他
全　体	名	17	11	11	4	2	6	1	4	1	2
	%	*100.0*	*64.7*	*64.7*	*23.5*	*11.8*	*35.3*	*5.9*	*23.5*	*5.9*	*11.8*

【その他】

・受入部局を介して派遣研究員に必要書類を提出依頼する対応

・受入研究者との連絡調整

Q8.　アジア諸国からの研究者に対する日本の大学等研究機関の研究環境について



(1)　アジア諸国からの研究者の受入数

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	3	7	6	0	0	1
	%	*100.0*	*17.6*	*41.2*	*35.3*	*0.0*	*0.0*	*5.9*

(2)　アジア諸国からの研究者の雇用状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	0	4	9	3	0	1
	%	*100.0*	*0.0*	*23.5*	*53.0*	*17.6*	*0.0*	*5.9*

(3)　帰国後のアジア諸国からの研究者との継続的・発展的交流

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	2	7	6	1	0	1
	%	*100.0*	*11.7*	*41.2*	*35.3*	*5.9*	*0.0*	*5.9*

(4)　研究レベルの世界的な高さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	2	9	4	1	0	1
	%	*100.0*	*11.8*	*52.9*	*23.5*	*5.9*	*0.0*	*5.9*

(5)　研究施設・研究設備レベルの世界的な高さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	2	5	8	1	0	1
	%	*100.0*	*11.7*	*29.4*	*47.1*	*5.9*	*0.0*	*5.9*

(6)　研究資金の豊富さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	1	3	7	5	0	1
	%	*100.0*	*5.9*	*17.6*	*41.2*	*29.4*	*0.0*	*5.9*

(7)　居室、研究スペースの広さ

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	0	2	6	8	0	1
	%	*100.0*	*0.0*	*11.7*	*35.3*	*47.1*	*0.0*	*5.9*

(8)　ディスカッションの活発さ、研究者の競争的な雰囲気

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	1	3	11	1	0	1
	%	*100.0*	*5.9*	*17.6*	*64.7*	*5.9*	*0.0*	*5.9*

(9)　パソコン、インターネットの整備状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	3	9	3	1	0	1
	%	*100.0*	*17.6*	*53.0*	*17.6*	*5.9*	*0.0*	*5.9*

(10)　研究支援者（事務系、技術系）の状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	1	5	7	3	0	1
	%	*100.0*	*5.9*	*29.4*	*41.2*	*17.6*	*0.0*	*5.9*

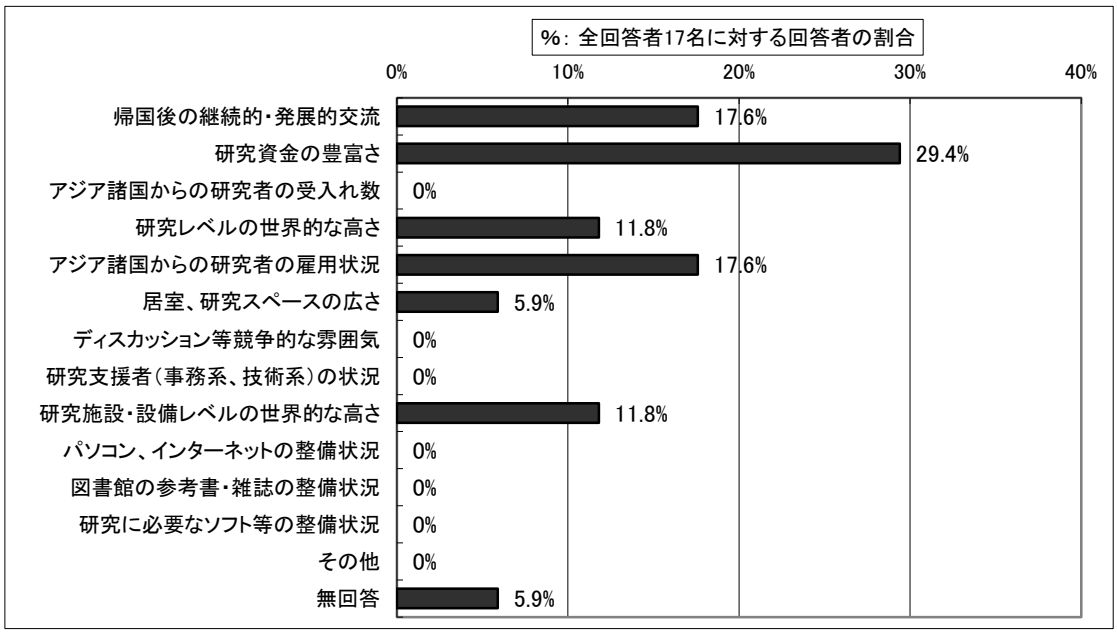
(11)　図書館の、研究に必要な参考書・雑誌の整備状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	3	7	6	0	0	1
	%	*100.0*	*17.6*	*41.2*	*35.3*	*0.0*	*0.0*	*5.9*

(12)　研究に必要なデータベースやソフトの整備状況

		全　体	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	3	7	6	0	0	1
	%	*100.0*	*17.6*	*41.2*	*35.3*	*0.0*	*0.0*	*5.9*

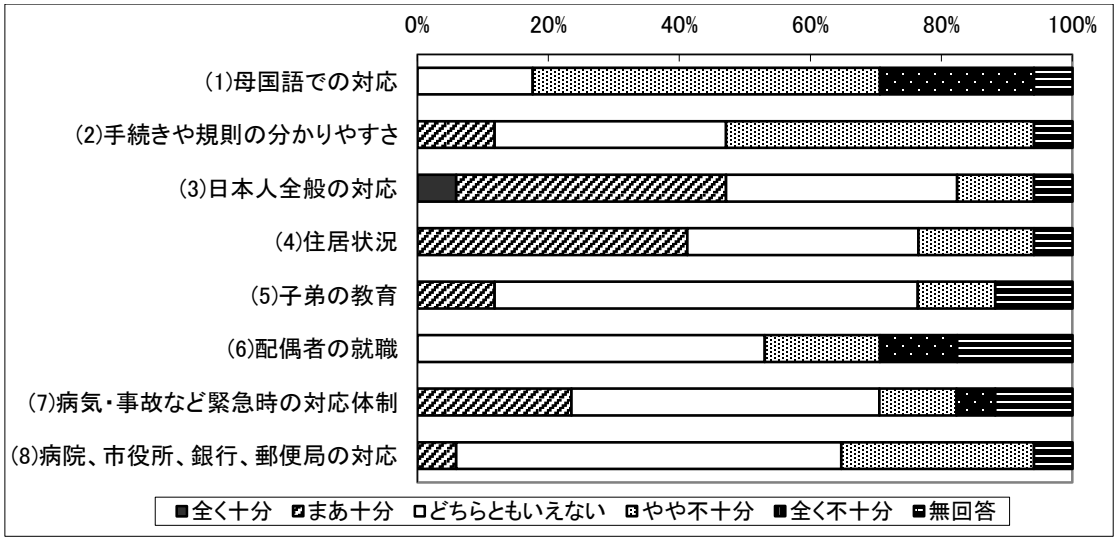
Q8-1.　アジア諸国からの研究者に対する日本の研究環境の最も重要な改善すべき事項



		全　体	帰国後の継続的・発展的交流	研究資金の豊富さ	アジア諸国からの研究者の受入れ数	研究レベルの世界的な高さ	アジア諸国からの研究者の雇用状況	居室、研究スペースの広さ	ディスカッション等競争的な雰囲気
全　体	名	17	3	5	0	2	3	1	0
	%	100.0	17.6	29.4	0.0	11.8	17.6	5.9	0.0

		全　体	研究支援者（事務系、技術系）の状況	研究施設・設備レベルの世界的な高さ	パソコン、インターネットの整備状況	図書館の参考書・雑誌の整備状況	研究に必要なソフト等の整備状況	その他	無回答
全　体	名	17	0	2	0	0	0	0	1
	%	100.0	0.0	11.8	0.0	0.0	0.0	0.0	5.9

Q9.　アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境について



（1）　母国語での対応

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	0	0	3	9	4	1
	%	100.0	0.0	0.0	17.6	53.0	23.5	5.9

（2）　手続きや規則の分かりやすさ

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	0	2	6	8	0	1
	%	100.0	0.0	11.8	35.3	47.0	0.0	5.9

（3）　日本人全般の対応

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	1	7	6	2	0	1
	%	100.0	5.9	41.2	35.3	11.7	0.0	5.9

（4）　住居状況

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	0	7	6	3	0	1
	%	100.0	0.0	41.2	35.3	17.6	0.0	5.9

(5)　子弟の教育

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	0	2	11	2	0	2
	%	100.0	0.0	11.8	64.6	11.8	0.0	11.8

(6)　配偶者の就職

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	0	0	9	3	2	3
	%	100.0	0.0	0.0	53.0	17.6	11.8	17.6

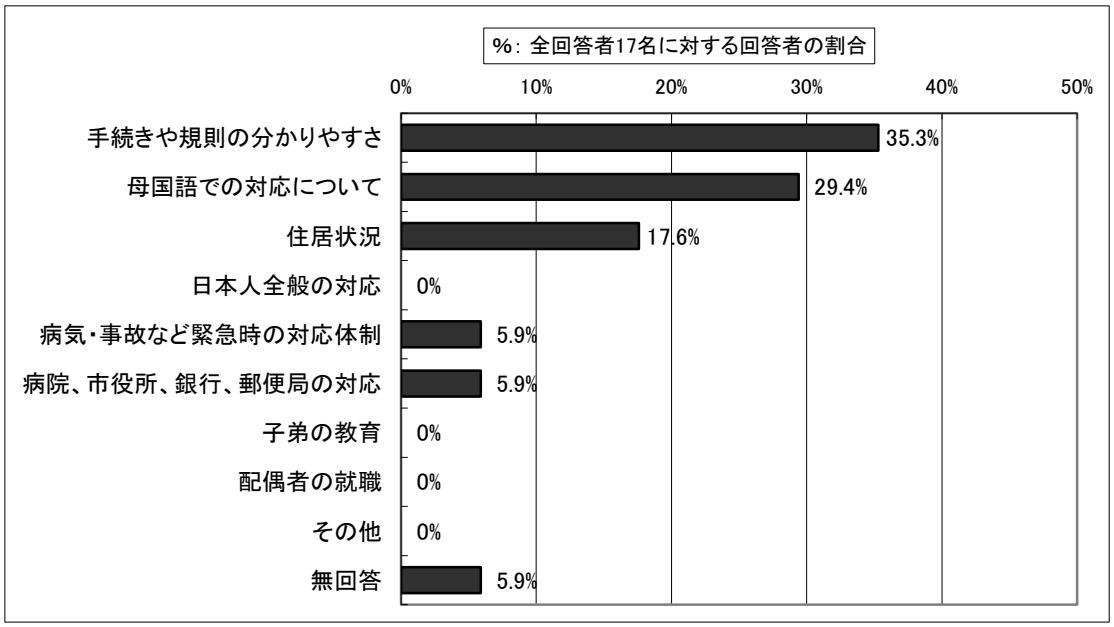
(7)　病気・事故など緊急時の対応体制

		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	0	4	8	2	1	2
	%	100.0	0.0	23.5	47.0	11.8	5.9	11.8

(8)　病院、市役所、銀行、郵便局の対応

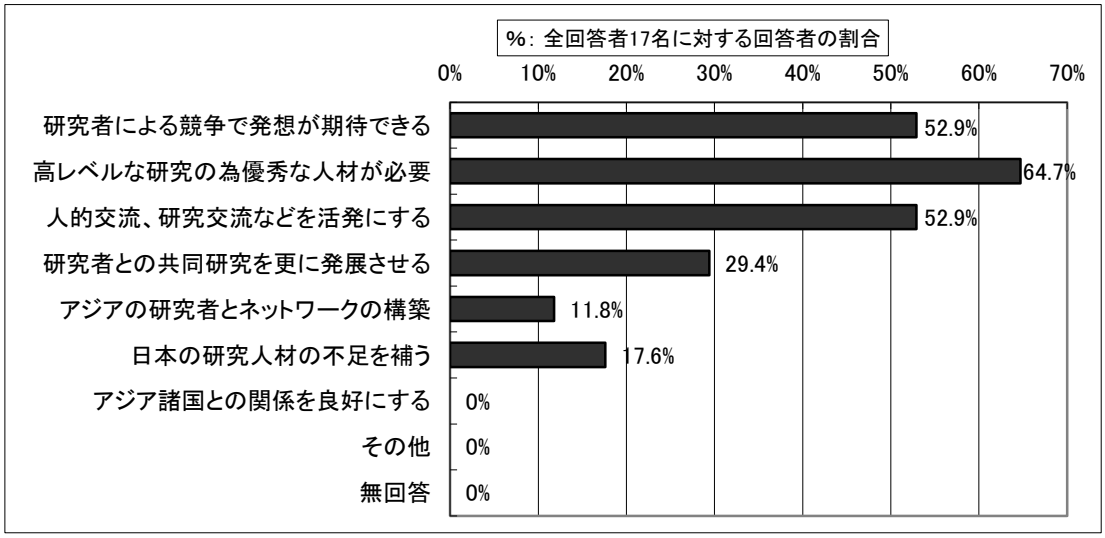
		全　体	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分	無回答
全　体	名	17	0	1	10	5	0	1
	%	100.0	0.0	5.9	58.8	29.4	0.0	5.9

Q9-1.　アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境の最も重要な改善すべき事項



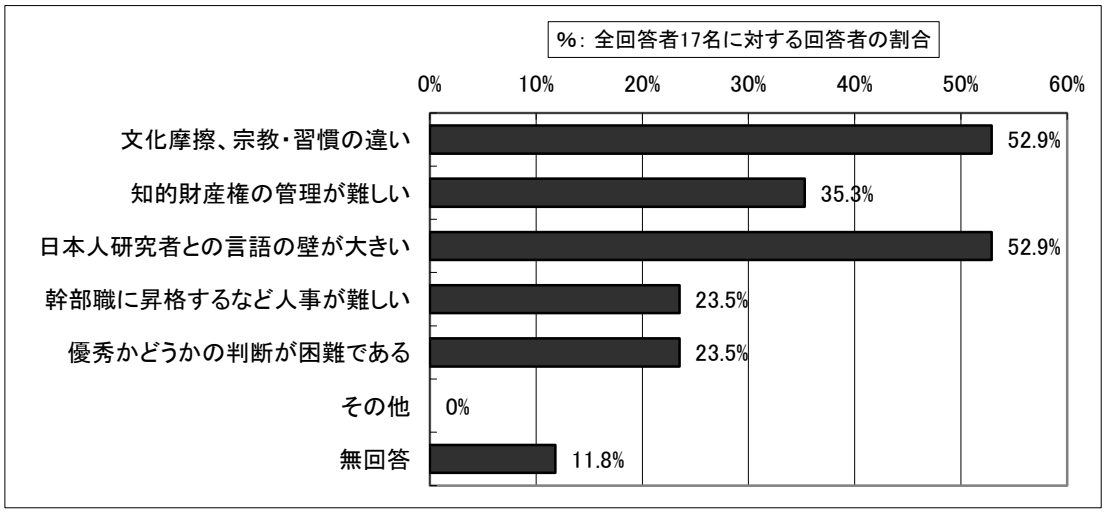
		全　体	手続きや規則の分かりやすさ	母国語での対応について	住居状況	日本人全般の対応	病気・事故など緊急時の対応体制	病院、市役所、銀行、郵便局の対応	子弟の教育	配偶者の就職	その他	無回答
全　体	名	17	6	5	3	0	1	1	0	0	0	1
	%	100.0	35.3	29.4	17.6	0.0	5.9	5.9	0.0	0.0	0.0	5.9

Q10.　日本の研究機関と企業がアジア諸国からの研究者を雇用する理由（３つまで）



		全　体	研究者による競争で発想が期待できる	高レベルな研究の為優秀な人材が必要	人的交流、研究交流などを活発にする	研究者との共同研究を更に発展させる	アジアの研究者とネットワークの構築	日本の研究人材の不足を補う	アジア諸国との関係を良好にする	その他	無回答
全　体	名	17	9	11	9	5	2	3	0	0	0
	%	100.0	52.9	64.7	52.9	29.4	11.8	17.6	0.0	0.0	0

Q10-1.　日本の研究機関と企業がアジア諸国からの研究者を雇用する場合の問題点（３つまで）



		全　体	文化摩擦、宗教・習慣の違い	知的財産権の管理が難しい	日本人研究者との言語の壁が大きい	幹部職に昇格するなど人事が難しい	優秀かどうかの判断が困難である	その他	無回答
全　体	名	17	9	6	9	4	4	0	2
	%	100.0	52.9	35.3	52.9	23.5	23.5	0.0	11.8

Q11.　外国人研究者の受入についての意見

(1)　日本が世界的に優秀なアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）を引きつけるために重要なこと　＜9 名（52.9%）から寄せられた意見＞

［研究環境］

- 雇用ポストの整備。
- 優秀なアジア諸国からの研究者の創造的で高度な発想や研究に対し、同等な立場と発展的な見解で共に世界的な研究レベルを目指すことができる日本人の研究者が数多く揃っていること。
- 彼らの自国よりも優れた魅力的な研究環境を提供すること。
- 潤沢な研究資金は勿論、研究スペースの提供が求められる。
- 世界的に注目される研究内容であること。
- 世界的研究レベルの高さ、研究・教育の成果の発信。
- 世界トップレベルの研究、日本の独自性ある研究、研究環境・研究資料の充実、そこにしかない優れた研究プログラムや実験設備、および研究活動や付随する諸手続きを円滑に進めるための優れた支援スタッフや事務方の存在。

［経済的支援］

- 資金面でのサポート（滞在費、研究費の支給等)。

［生活環境］

- 住居を含めた研究環境。
- 安価な寄宿舎や外国人研究員の家族にも日本語レッスンや交流の場の提供など、生活に適応できるようなサポート体制が求められる。
- 研究環境だけではなく、家族同伴での来日であっても安心できる受入環境とフォロー体制が整っていること。

［その他］

- ノーベル賞受賞者を輩出する、QS World Ranking で上位になる、といった明瞭な実績を作ること。

(2)　日本が今後、アジア諸国から世界的に優秀な研究者（中国人研究者含む）と研究協力を進めるために重要なこと　＜8 名（47.1%）から寄せられた意見＞

［研究環境］

- 世界的レベルの研究施設や研究設備と十分な研究費用

［経済的支援］

- 研究員用の奨学金プログラムが全体的に少ないため、若手研究員を中心に研究費を支援する制度が求められる。
- 研究目的に合った助成金の提供

［生活環境］

- 滞在中のサポート体制の充実、外国語によるコミュニケーション能力の向上、住居の用意（宿舎の整備等）

［その他］

- 研究者同士のネットワーク、信頼関係の構築

- 受入側、研究員側が長期受入に際して、ある程度交流した上で研究を開始すること。お互いの英語又は日本語能力に関して納得し、研究分野が合致していることの確認が十分取れた上での来日が望まれる。
- アジアの他国の教育事情や研究環境、研究者のカルチャーを理解した支援体制（事務担当者の資質向上も含めて）の整備。
- コミュニケーション能力
- 交流を促進できる環境整備
- アジアからの優秀な留学生や研究員の受入を拡大し、日本の若者のアジアへの留学を広げて人的ネットワークを構築していくなど、研究協力を進める上での基盤作りが重要。

(3)　これからアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）を受入れる研究機関へのアドバイス　＜6 名（35.3%）から寄せられた意見＞

［研究環境］

- 国内外に同じ研究分野の研究者を招いて活発に議論・研究を行えるような研究者専用施設が機関内に整っていると良い。
- 研究環境・生活環境を整える。日本人研究者と共同研究を行う時間を十分確保するために、英語で対応できる事務職員を配置する。

［その他］

- 受入研究員とのミスマッチを防ぐため、なるべく交流実績を積んだうえ長期の受入につなげるよう受入教員側にアドバイスする。受入後は研究員と疎遠になってしまうことを避けるため、懇親会など研究員と交流する場を定期的に設けるなど気軽に話せる関係を構築する。
- 外国人研究者が必要とする全てのことにおいて母国語もしくは英語の通知文を用意することが望まれる。
- 研究開始前に受入研究者側と十分コンタクトが取れるようにする。
- 派遣・受入研究員の双方が満足いく成果が得られるように、受入前に派遣研究員には目標を明確にしていただき、受入研究員には派遣研究員に適切な情報を提供する、といった基本的な準備を怠らない。

(4)　その他の意見

記述なし

５－４－４．大学訪問調査結果

(1)九州大学大学院医学研究科

本年度の課題である国際共同研究及びネットワークの構築について調査するため、平成 23 年 5 月 27 日(金)、九州大学大学院医学研究科の高柳教授・井口教授と劉徳山中国政府派遣研究員を訪問した。これまでも国際共同研究及びネットワークの構築について、医学系の大学院を訪問してきたが、例えば愛媛大学医学部では中国の医師夫妻(両者とも医師)を積極的に受け入れ、日本人の研究者の不足を補い、特に基礎研究の分野で創意工夫をしている。

今回訪問した劉研究員は中国において糖尿病学会で活躍され、札幌で開催された日本糖尿病学会において九州大学医学部との共同研究の成果を発表されたばかりであった。

【面談者】

高柳涼一	医学博士	九州大学副学長・大学院医学研究科教授・医学部長
井口登輿志	医学博士	九州大学大学院医学研究科・先端融合医療研究拠点教授
劉徳山	医学博士	山東大学斉魯病院教授・中国政府派遣研究員

【面談結果】

① 高柳教授・井口教授との面談

・高柳教授が劉研究員の受け入れ教授で井口教授が指導教授
・両者共、九大医学部出身、ポスドク後、米国の大学で Ph.D を取得
・最近はポスドク後あまり留学しなくなったが、昔は米国の大学に行くことが当たり前だった
・両者共、米国に長期留学経験があり、これまでも外国人研究者を受け入れてきた
・現在、外国人の訪問学者は劉研究員のみ。大学院生では中国、モンゴル、インドネシア
・井口教授の研究室(第3内科)には教授以下、準教授、助授、外国人研究者、大学院の合計24人の陣容
・劉研究員は研究熱心で井口教授の研究室での評判がすこぶる良い
・劉研究員本人が中国から直接高柳教授にインターネットで受入の依頼をした
・通常ネット依頼は引き受けないが、劉研究員の経歴、論文等から優秀と判断し、井口教授の研究室での引き受けを許可した
・劉研究員への細かい支援を行うため、来日前から研究室の大学院生に特別に世話係を勤めさせている
・中国の糖尿病の医学研究水準は今や日本の研究水準とあまり遜色がない
・共同研究の成功例として、札幌で開催された日本糖尿病学会で九州大学でのにおける劉・高柳・井口(筆頭は劉研究員)研究成果を発表
・研究論文:「脳血管障害を認めない2型糖尿病患者における事象関連電位の検討」(糖尿病患者を脳波で測定しその障害を検出する研究)
・国際共同研究を行うには信頼関係の構築など時間がかかるが、劉研究員は既に一流の研究者で学会活動の経験・実績もあり、共同研究の成果がすぐに得られた

② 劉徳山中国政府派遣研究員との面談

・劉研究員は山東省で多くの要職を兼任する糖尿病学会のリーダー、中国山東大学斉魯医院教授、全国老中医薬専門家学術経験継承人、専攻は糖尿病の診断と治療

・山東大学の教授に41歳で就任、配偶者も同じ勤務先の医師で副院長
・糖尿病は食生活、生活習慣、遺伝他西洋人とは因子が異なるため、同じ東アジア人の日本を選んだ
・これまで岡山大学医学部、富山大学薬学部、九州大学医学部の学会にも出席
・上記 5 月 20 日札幌での日本糖尿病学界に、共同研究のスピーカーを勤めた
・劉研究員の宿舎は九大病院の敷地内にある外国人寮。研究で夜中3時ごろまで研究室にいることもあり、住まいが近く、部屋にキッチンもあるので生活の不便は特にない。研究に没頭出来るので九大の研究環境に不満はない。
・6月に南京で開催される糖尿病学会にも出席予定

劉研究員は受け入れの高柳教授、井口教授の評判がよく、来日後日本糖尿病学会で研究発表を行ったことに大学研究室内で皆が驚いたとのこと。
また、劉研究員においては、帰国後高柳教授を山東大学に招へいするなど、帰国後も交流を継続させたいとのこと。

（劉研究員（左側）、井口教授）

【劉徳山研究員略歴】
山東大学斉魯医院中医科主任・教授、
中国第 3 陣全国老中医薬専門家学術経験継承人、
専攻は糖尿病及びその併発症の診断と治療。
1966 年 10 月中国山東省生まれ
1989 年中国山東医大卒
1992 年山東医大医学修士号取得
2000 年中国山東中医薬大学医学博士号取得
2001 年山東大学斉魯医院準教授、修士指導教官
2007 年山東大学斉魯医院教授
2010 年中医科主任、現在に至る
2010 年 10 月、九州大学大学院病態制御内科学糖尿病研究室中国政府派遣研究員
【兼職】
世界中医薬学会聯合会老年病専門委員会理事
中国中西医結合学会養生康復専門委員会常務理事
中華中医薬学会糖尿病分会委員
山東省中医薬学会理事
山東省疼痛研究会副理事長
山東省疼痛研究会中西医結合専門委員会主任委員
山東省中西医結合学会心血管病専門委員会副主任委員

（２）神戸大学大学院農学研究科

平成 23 年 4 月 15 日（金)、神戸大学の田中丸教授と新疆大学大学院出身の阿布都沙塔尓 買買堤明研究員（以下サタル研究員、現在神戸大学博士課程に在籍）を訪問した。平成 21 年にサタル研究員が中国政府派遣研究員として神戸大学の田中丸教授のもと一年間滞在した際にも訪問しており、今回は２度目の面談であった。中国政府は原則として国費留学生は４年間再出国・再留学は認めておらず、同研究員が同じ受入教授下へ留学した珍しいケースとして面談した。

【面談者】

田中丸治哉　工学博士　神戸大学大学院農学研究科食料共生システム学

阿布都沙塔尓 買買堤明　元中国政府派遣研究員、同大学大学院農学研究科博士課程

【面談結果】

① サタル研究員との面談

・中国政府派遣研究員として、2008 年 10 月から 2009 年 9 月まで神戸大学の田中丸教授の指導下で研究し新疆大学に一旦戻り帰国した。

・2007 年に新疆大学修士課程（水環境学)、その 1 年後に中国政府派遣研究員として来日。サタル氏の配偶者が新疆大学修士課程（国際貿易専攻）終了後、氏より１年先に神戸大学大学院に留学していたことから、同じ神戸大学を選んだ。

・田中丸教授に確認したところ、本来は紹介者が無ければ引き受けは断っているが、氏の場合は、配偶者が神戸大学に留学しているということもあり特別に引き受けた。勿論、優秀であるとの判断も下した。

・中国政府は、国費で留学させた研究者をすぐに海外留学させることはない。サタル研究員の場合は、配偶者が神戸大学にいること、また新疆大学が彼の将来性等を期待して特別に許可したことが大きな理由である。2009 年 11 月に再来日、博士課程の修了は 2012 年 11 月の予定。

・神戸大学から外国人特別待遇で学費他いろいろ支援されている。一方、サタル研究員の配偶者は大学院卒業後、日本国際防災復興センター（国連の機関）に勤務し生計を支え支援している。

・経緯説明後、サタル研究員から目下研究中の水環境研究について中国西部タクラマカン砂漠地域の水資源の調査研究について説明。

・中国政府派遣研究員の１年間では十分な共同研究が出来なかった。１年では時間が短く、これからの博士課程終了までに共同研究を進めたい意向。

・現在９歳の女児がおり、家族間ではウイグル語を使用。ネット等の情報収集は中国語。大学での研究は英語による。

・子供の教育は大変で、子供が今一番得意なのは日本語（６歳から９歳まで神戸滞在)。中国人なのに親が漢民族でなく、周りに中国人がいないため中国語に接することが無い。母国語はウイグル語であるが子供は読み書きが苦手など教育問題は大きな悩みである。

・日本は生活費、特に賃貸住宅費がかかるため、外国人研究者向けの宿舎の提供を

お願いしたい。

② 田中丸教授との面談

・田中丸教授は京都大学で博士課程修了後、神戸大学の助教授を経て現職。

・米国に短期の海外留学した経験もあり、これまで多くの外国人（英語圏がほとんど）研究者を受け入れてきた。中国人はサタル研究員が最初である。

・これまでの共同研究の成功例としてスーダン側との水資源の共同研究が挙げられる。これは、同教授の前任者の時代からずっと続いていて、スーダン側に神戸大学大学院博士課程を終了した人材が 3 人おり、毎年同教授も現地に出張するなど共同研究を続け、研究成果を出している。

・共同研究を行うには、組織としての信頼関係構築など時間がかかる。

・サタル研究員が中国に帰国後、核となって研究を担ってくれることを期待し、彼の後継者が育つことが重要である。

・大学上層部からは今後さらに国際交流、外国人研究者受入を促進するようと言われているが、同教授はインターネットで受入れを依頼してくる研究者の受入は行っていない。スーダンとの共同研究例から、信頼出来る研究者からの推薦等、相手国との人的、組織的な支援・協力関係が無いと共同研究や共同論文の執筆までは運びにくいと考えている。

・博士課程を修了した外国人の帰国後の交流として、一例では、ネパールからきた研究者が現在パリの環境関連の研究所に勤務しているので、国としての共同研究はないが環境関連の情報交換などネットワークは確保している。大学院から博士課程に至る期間での一貫教育や信頼関係を大切にしたい。

・サタル研究員については、中国政府派遣研究員の初期の段階から神戸大学の博士課程に進み、学位をとる希望をもっていた。出身の新疆大学の特別の支援と配偶者の支えもあって実現した。

今回の訪日は中国政府、新疆大学、神戸大学、更にサタル氏の配偶者の内助の功もあり実現できたものであり、受入教授だけでなく多くの大学関係者の支援体制があった。サタル氏には今後の両国の科学技術交流の発端に大いに貢献されることが期待される。

５－５．外国人研究者受入についての調査

本報告については別冊「『外国人研究者受入についての調査』報告書」に示す。

中国政府派遣研究員用

「中国政府派遣研究員制度」に係る中国政府派遣研究員へのアンケート調査票

我が国の研究環境の国際化及びアジア諸国からの研究者の受入れ促進手法開発を目的とし、以下の事項を総合的かつ長期的な計画の下に調査分析する一環として、我が国で研究に従事された外国人研究者、その受入研究者及び大学等研究機関の事務担当者にアンケート調査を実施させていただくことになりました。つきましては、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。なお、ご回答いただきました内容は、すべて統計的に処理し、個別のデータを公表することはございませんので、忌憚のないご意見・コメントをお願い致します。

同封の返信用封筒、FAX、(電子ファイルはcgsr@jistec.or.jpへ) にて9月19日までに直接ご返送いただければ幸甚に存じます。電子ファイルはJISTECホームページに掲載しています。

①アジア諸国からの研究者が日本で研究活動を行う上でのより良い環境作りのために改善が望まれる諸課題。

②受入れ期間終了後も引き続き日本の研究機関や企業で研究活動を行うことを希望するアジア諸国からの研究者が抱える問題とニーズ、及び受入れを希望する研究機関や企業が抱える問題とニーズ。

③日本で研究活動を行うアジア諸国からの研究者が帰国後に日本の受入れ研究機関との継続的・発展的な交流促進に携わる上での成功事例と諸課題。

～ ご回答いただく中国政府派遣研究員の方について ～

※JISTEC 記入

氏　名	
性　別	
日本滞在期間	
日本滞在機関	

【あなたの研究分野】最終ページの添付コード表から該当する番号をご記入下さい。

研究分野	

Q1. 研究または教育に携わった在職年数を教えて下さい。

年

～ 中国政府派遣研究員制度での日本での研究について ～

Q２．実際に接した受入研究者についてあなたはどのようにお感じになりましたか？　各項目について、1～5 の中から、最もお気持ちに近い番号に○印をつけて下さい。(各々○はひとつだけ)	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足
1　受入研究者の研究協力	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**
2　受入研究者からの助言	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**
3　受入研究者とのコミュニケーション	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**

1)　その他に受入研究者について何かありましたら、具体的にお書き下さい

Q2－1. あなたは受入研究者とどのくらいの頻度で研究について検討・討議等を行いましたか？
(○はひとつだけ)

1　週に１回以上	**3**　３ヶ月に１回以上
2　月に１回以上	**4**　その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Q３．「中国政府派遣研究員制度」で滞在した日本の大学等研究機関における研究環境について、あなたはどのように感じましたか？　各項目について、1～5 の中から、最もお気持ちに近い番号に○印をつけて下さい。(○はひとつだけ)	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満足	全く不満足
受入研究機関の受入体制や研究環境について	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**

Q３－１．（<u>Q３で不満足、やや不満足（評価が **4** 及び **5**）と答えた方に</u>）あなたはどのような点について不満足だったかを具体的に教えて下さい。(○はいくつでも)

1　自由に使える研究資金が不足している
2　研究に必要な研究設備や消耗品が用意されていなかった
3　技術系及び事務系の研究補助者が居らず、雑用が多くて研究に専念できない
4　居室、研究スペースが十分でなかった
5　パソコン、インターネット等が整備されていなかった
6　研究に必要な参考書及び雑誌が不足していた
7　研究に必要なデータベースやソフトが高価であった
8　競争的雰囲気が無く、ディスカッションが少ない
9　シンポジウム、ワークショップ、セミナーなどの開催が少ない
10　言葉が障害となった
11　煩雑な手続きや規則が多すぎる
12　施設・設備の利用など、研究に当たってのルールに不当なものが多い
13　その他がありましたら、具体的項目を挙げて下さい
(＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿)

Ｑ４．「中国政府派遣研究員制度」で滞在した日本の大学等研究機関を含めて日本における生活環境についてお伺いします。（○はひとつだけ）

	全く満足	ほぼ満足	どちらともいえない	やや不満	全く不満
日本での生活の全体的な満足感はどうでしたか	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**

Ｑ４－１．（Ｑ４で不満足、やや不満足（評価が**4**及び**5**）と答えた方に）あなたはどのような点が不満足だったかを具体的に教えて下さい。（○はいくつでも）

1 言葉が障害となった
2 物価が高い
3 治安が悪い
4 社会に煩雑な手続きや規則が多すぎる
5 精神的に孤独だった
6 施設・設備の利用などの研究に当たってのルールに不当なものが多い
7 人間関係がうまくいかなかった
8 研究以外に使える自由な時間が少なかった
9 緊急時（病気、犯罪、事故等）の対応制度が不十分
10 所属機関以外との関係が不十分
11 その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Ｑ５．あなたの研究計画はどの程度予定通り遂行されたと思いますか。（○はひとつだけ）

	予定より大幅に進んだ	予定より進んだ	予定通り	予定より遅れた	予定より大幅に遅れた
研究の進行状況	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**

Ｑ５－１．（Ｑ５の評価が**4**及び**5**と答えた方）あなたにとって達成できなかったと思われる要因を３つまで選んで下さい。（○は３つまで）

1 研究課題の選択、来日前の打合せ及び準備が不十分だった
2 資金不足により、研究に必要な研究設備や消耗品が不十分だった
3 あなたの不測の事態により、自分の研究時間が不足した
4 受入研究者が忙しすぎて、十分な研究・検討・討議ができなかった
5 受入研究者との関係がうまくいかなかった
6 その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

～「中国政府派遣研究員制度」について ～

Ｑ６.「中国政府派遣研究員」として来日したあなたの動機は何ですか？主な理由を３つまで挙げて下さい。（○は３つまで）

1	日本で国際的に高レベルな研究を行うため
2	日本でしかできない研究、独自の研究設備・装置を用いた研究を行うため
3	受入研究室・研究機関が優秀な研究者が集まる拠点であると評判だった
4	日本の文化・言語に興味があった
5	自分の研究に関する日本での情報収集
6	研究者としてのキャリアパスに有効であると思った
7	研究歴に有利なネットワークの構築が可能であると思った
8	日本の受入研究機関、受入研究者と既に面識、または交流があった
9	中国の研究者の推薦や勧誘があった
10	日本の研究者の推薦や勧誘があった
11	ともかく外国で研究をしたかった
12	その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Ｑ７．あなたは本制度による日本での研究を同僚や後輩に勧めますか？（○はひとつだけ）

1	勧める	**2**	勧めない　→Ｑ７－１へ

Ｑ７－１．本制度を同僚や後輩に勧めない主な理由は何ですか？（具体的に）

理由：

～ 今後の日本との研究協力について ～

Q8. 中国政府派遣研究員としての日本における研究経験を、日中交流の促進等に今後どのように有効活用するつもりですか？（○は3つまで）

1 中国の研究者に日本に中国政府派遣研究員として渡航することを勧奨する
2 中国と日本の大学等研究機関間の人的交流、共同研究等の研究交流を活発にする
3 中国の研究者が日本の大学等研究機関や企業へ就職することに活用する
4 中国と世界各国の大学等研究機関間の人的交流、共同研究等の研究交流を活発にする
5 世界各国からの研究者を中国へ受け入れることを促進・支援する
6 中国人研究者を含めて外国人研究者が日本へ研究するために行くことを勧奨しない
7 その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Q９．日中の研究協力を今後進めるために、何が重要であるとあなたは考えますか？（○は３つまで）

1 個人的な交流の活発化
2 知的財産権等を含めた二国間の研究協力協定や共同研究契約などの締結
3 大規模な共同研究を長期（5～6 年）で重点的に行う
4 小規模な共同研究を短期（2～3 年）で多数行う
5 個別研究者の長期派遣または招へいを重点的に行う
6 個別研究者の短期派遣または招へいを多数行う
7 日中双方で利用可能な基礎研究費の充実
8 日中双方で利用可能な応用研究費の充実
9 日中双方で利用可能な産学連携研究費の充実
10 異分野交流シンポジウムの開催
11 若手研究者の「知の出会い」を盛んにする国際シンポジウムの開催
12 若手研究者による国際共同研究
13 若手研究者による国際セミナー開催支援
14 中国政府の協力
15 日本側研究者によるリーダーシップの発揮
16 その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Q10. 今後、あなたは日本との研究協力を進める意向はありますか？（○はひとつだけ）

1 研究協力を今後進めたい
2 研究協力を今後進めるつもりはない
3 チャンスがあれば研究協力を今後進める

～ アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）の日本での研究環境について ～

Ｑ１１．アジア諸国からの研究者に対する日本の大学等研究機関の研究環境について、あなたはどのように感じていますか？各項目について、1～5 の中から、最もお気持ちに近い番号に○印をつけて下さい。（各々○はひとつだけ）	十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分
1) アジア諸国からの研究者の受入れ数	1	2	3	4	5
2) アジア諸国からの研究者の雇用状況	1	2	3	4	5
3) 帰国後のアジア諸国からの研究者との継続的・発展的交流	1	2	3	4	5
4) 研究レベルの世界的な高さ	1	2	3	4	5
5) 研究施設・研究設備レベルの世界的な高さ	1	2	3	4	5
6) 研究資金の豊富さ	1	2	3	4	5
7) 居室、研究スペースの広さ	1	2	3	4	5
8) ディスカッションの活発さ、研究者の競争的な雰囲気	1	2	3	4	5
9) パソコン、インターネットの整備状況	1	2	3	4	5
10) 研究支援者（事務系、技術系）の状況	1	2	3	4	5
11) 図書館の、研究に必要な参考書・雑誌の整備状況	1	2	3	4	5
12) 研究に必要なデータベースやソフトの整備状況	1	2	3	4	5
13) その他（具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）	1	2	3	4	5

Ｑ１１－１．アジア諸国からの研究者に対する日本の研究環境について、最も重要な改善すべき項目はどのようなことだとお感じになりますか。次の中からお教え下さい。
（○はひとつだけ）

1 アジア諸国からの研究者の受入れ数
2 アジア諸国からの研究者の雇用状況
3 帰国後のアジア諸国からの研究者との継続的・発展的交流
4 研究レベルの世界的な高さ
5 研究施設・研究設備レベルの世界的な高さ
6 研究資金の豊富さ
7 居室、研究スペースの広さ
8 ディスカッションの活発さ、研究者の競争的な雰囲気
9 パソコン、インターネットの整備状況
10 研究支援者（事務系、技術系）の状況
11 図書館の、研究に必要な参考書・雑誌の整備状況
12 研究に必要なデータベースやソフトの整備状況
13 その他

～ アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）の日本での生活環境について ～

Ｑ１２．アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境について、あなたはどのように感じていますか？　各項目について、1～5 の中から、最もお気持ちに近い番号に○印をつけて下さい。（各々○はひとつだけ）	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分
1）母国語での対応について	1	2	3	4	5
2）手続きや規則の分かりやすさ	1	2	3	4	5
3）日本人全般の対応	1	2	3	4	5
4）住居状況	1	2	3	4	5
5）子弟の教育	1	2	3	4	5
6）配偶者の就職	1	2	3	4	5
7）病気・事故など、緊急時の対応体制	1	2	3	4	5
8）病院、市役所、銀行、郵便局の対応	1	2	3	4	5
9）その他（具体的に　　）	1	2	3	4	5

Ｑ１２－１．アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境について、最も重要な改善すべき項目はどのようなことだとお感じになりますか。次の中からお教え下さい。
（○はひとつだけ）

1	母国語での対応について
2	手続きや規則の分かりやすさ
3	日本人全般の対応
4	住居状況
5	子弟の教育
6	配偶者の就職
7	病気・事故など、緊急時の対応体制
8	病院、市役所、銀行、郵便局の対応
9	その他

～ アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）の雇用について ～

Q13. 日本の研究機関と企業が、アジア諸国からの研究者を雇用する場合の理由は何だと思いますか？ 次の中から重要なもの3つまでお選び下さい。（○は３つまで）

1	日本の研究人材の不足を補う
2	多様な研究者による競争、協調、協力により創造的な発想が期待できる
3	国際的に高レベルな研究を行うため、国際的に優秀な研究人材が必要
4	アジア諸国の研究者との共同研究をもっと発展させる
5	アジア諸国との関係を良好にする
6	アジア諸国との人的交流、研究交流などを活発にする
7	アジア諸国の研究者とのネットワークの構築
8	その他（具体的に　　）

Q13－1. 日本の研究機関と企業が、アジア諸国からの研究者を雇用する場合の問題点は何だと思いますか？ 次の中から重要なものを3つまでお選び下さい。（○は３つまで）

1	優秀かどうかの判定が困難である
2	日本人研究者との言語の壁が大きい
3	文化摩擦、宗教・習慣の違いによるトラブルなど多い
4	知的財産（ノウハウを含めて）の管理が難しい
5	部下を指揮する幹部職に昇格するなどの人事が難しい
6	その他（具体的に　　）

～ 日本とアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）との交流促進について ～

Q14. アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）との研究も含めた継続的・発展的交流促進に重要なことは何だと思いますか？次の中から重要なものを3つまでお選び下さい。（○は３つまで）

1	個人的な交流の活発化
2	世界的にレベルの高い研究成果を上げること
3	相互訪問のため日本人研究者及びアジア諸国からの研究者への資金支援
4	共同研究実施の活発化
5	国際共同シンポジウム等の開催
6	アジア諸国からの研究者の雇用
7	帰国後の母国における同窓会の設立と運営
8	帰国後の日本での同窓会の設立と運営
9	日本人研究者のリーダーシップによる交流
10	その他（具体的に　　）

～　同窓会について　～

※同窓会とは･･･
中国政府派遣研究員制度のフォローアップ及び外国人研究者とのネットワーク構築のため、これまで日本に滞在した中国政府派遣研究員同窓会の中国における設立を予定しています。

Ｑ１５．この同窓会への参加と運営について、次の中から最もお気持ちに当てはまるものをお選び下さい。（○はひとつだけ）

1	同窓会設立/運営委員会の幹事・役員をやっても良い
2	同窓会設立/運営委員会の幹事・役員ではなく、委員として参加しても良い
3	同窓会設立/運営委員会には参加しないが、同窓会には参加する
4	同窓会活動に関心があり、その内容によって参加の可否を決める
5	同窓会活動には関心が無い
6	その他（具体的に　　）

Ｑ１５－１．中国における同窓会活動として重要と考える項目を上げて下さい。（○はいくつでも）

1	同窓会会員の相互の情報交換
2	日本の学術・社会・文化に係わる情報の収集
3	日本留学を検討する学生・研究者への情報・支援提供
4	日中共同の国際科学技術・学術フォーラム・ワークショップ・シンポジウム等の開催
5	ニュースレターの発行
6	総会・懇親会の開催
7	その他（具体的に　　）

～　受入承諾と共同研究について　～

Ｑ１６．あなたの日本側受入の承諾についてお伺いします。

Ｑ１６－１．受入教授とは如何様にしてコンタクトしたかお伺いします。

1	□	中国側の教授（研究者等）から受入教授を紹介して貰って受入をお願いした。
2	□	学会やシンポジューム等で受入教授と面識がありそれで受入をお願いした。
3	□	日本の他の教授（研究者）から受入の教授（研究者）を紹介して貰った。
4	□	インターネットで受入の教授（研究者）に直接受入を依頼した。　→Ｑ１６－２　へ
5	□	其他（具体為：　　）

Ｑ１６－２．　インターネットで直接受入を受入教授に依頼された方にお聞きします。

１．　受入の教授（研究者）に最初にメールをしてから、正式な受入の承諾を得るまでに何回くらいメールでの遣り取りをしましたか。

1	□	２回―５回くらい。
2	□	６回―１０回まで。
3	□	１１回―１５回まで。
4	□	１６回以上　（　具体的に約　　回くらい　）

２．　あなたは論文を受入教授に送付したり、希望研究テーマ、その研究の行動スケジュール等について来日する前に準備を行いましたか？

1	□	来日前に受入教授と十分打ち合わせを行い来日した。
2	□	あまり打ち合わせる時間がなかったが大事な点だけは来日前に打ち合わせた。
3	□	時間がなかったので打ち合わせることが出来なかった。
4	□	来日まえに特に事前の打ち合わせは必要ないので行わなかった。
5	□	其他（例：日本訪問前に受入教授と直接お会いし打ち合わせたなど：　　）

３．　受入教授以外に何人の教授（研究者）にメールで受入を依頼されましたか？

（　　）人

Ｑ１６－３．受入教授との訪問前の打ち合わせは大変大事ですが、この点について、これから訪問する中国政府派遣研究員に対しアドバイス等があれば自由形式でお答え下さい。（日本語で回答ができれば、日本語でご記入ください。）

（　　）

Ｑ１７．受入教授との共同研究や論文の執筆についてお伺いします。
日本での滞在期間に論文の執筆までに至らなかった方もあろうかと思います。その方は中国に帰国後の受入教授との共同研究の継続や論文執筆への進展についてお答え下さい。

Ｑ１７―１．　日本に滞在中に受入教授（含む研究室の他の研究者）と共同研究を行ったかどうかについてお伺いします。

1　□ 共同研究を行うことが出来た。　<u>→Ｑ１７－２　へ</u>
2　□ 受入教授が忙しくて共同研究を行う時間が日本滞在中はなかったが、他の研究者と共同研究を行った。
3　□ 共同研究を行いたかったが何らかの理由で全く共同研究を行う事が出来なかった。
共同研究が出来なかった理由を出来るだけ具体的に教えてください。
（　　）
4　□ 今回の訪問の前から共同研究を行う積もりはなかったので共同研究はしなかった。

Ｑ１７－２．共同研究を行った方にお伺いします。
今後共同研究の成果を共同論文として発表する予定がありますか。

1　□研究成果を共同論文として学会に発表した。
2　□既に共同論文の執筆に取りかかっており、発表する予定である。
3　□受入教授や他の研究者との共同論文の執筆は無理かも知れないが、中国に帰国後日本での研究成果として是非論文を発表する積もり。
4　□ まだ論文を出すまでの研究水準・成果に至って居らず今後の事はわからないが、中国に戻っても共同研究は行いたい。
5　□共同論文の執筆についての問題点についてご意見があれば具体的に教えてください。
（　　）

～ 総合的なご意見をお伺いします ～

Ｑ１８. 中国政府派遣研究員制度、日本の大学等研究機関の改善すべき課題等について、忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。日本語での記入が困難な場合には、中国語で記入していただいても結構です。

1 日本が世界的に優秀なアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）を引きつけるためには、何が重要だとお考えですか。（具体的に）
2 日本が今後、世界的に優秀なアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）と研究協力を進めるためには、何が重要だとお考えですか。（具体的に）
3 これから来日制度に応募するアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）へのアドバイスはありますか。（具体的に）
4 その他、ご意見があればお書き下さい。（具体的に）

別添

コード表（研究分野分類表）

系	分科	コード番号
総合領域	情報学	1
	神経化学	2
	実験動物学	3
	人間医工学	4
	健康・スポーツ科学	5
	生活科学	6
	科学教育・教育工学	7
	科学社会学・科学技術史	8
	文化財科学	9
	地理学	１０
複合新領域	環境学	１１
	ナノ・マクロ科学	１２
	社会・安全システム科学	１３
	ゲノム科学	１４
	生物分子科学	１５
	資源保全学	１６
	地域研究	１７
	ジェンダー	１８
人文学	哲学	１９
	文学	２０
	言語学	２１
	史学	２２
	人文地理学	２３
	文化人類学	２４
社会科学	法学	２５
	政治学	２６
	経済学	２７
	経営学	２８
	社会学	２９
	心理学	３０
	教育学	３１

系	分科	コード番号
数物系科学	数学	３２
	天文学	３３
	物理学	３４
	地球惑星科学	３５
	プラズマ科学	３６
化学	基礎化学	３７
	複合化学	３８
	材料化学	３９
工学	応用物理学・工学基礎	４０
	機械工学	４１
	電気電子工学	４２
	土木工学	４３
	建築学	４４
	材料工学	４５
	プロセス工学	４６
	総合工学	４７
生物学	基礎生物学	４８
	生物科学	４９
	人類学	５０
農学	農学	５１
	農芸化学	５２
	林学	５３
	水産学	５４
	農業経済学	５５
	農業工学	５６
	畜産学・獣医学	５７
	境界農学	５８
医歯薬学	薬学	５９
	基礎医学	６０
	境界医学	６１
	社会医学	６２
	内科系臨床医学	６３
	外科系臨床医学	６４
	歯学	６５
	看護学	６６

様式５：受入研究者用

「中国政府派遣研究員制度」に係る受入研究者へのアンケート調査票

我が国の研究環境の国際化及びアジア諸国からの研究者の受入れ促進手法開発を目的とし、以下の事項を総合的かつ長期的な計画の下に調査分析する一環として、我が国で研究に従事された外国人研究者、その受入研究者及び大学等研究機関の事務担当者にアンケート調査を実施させていただくことになりました。つきましては、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。なお、ご回答いただきました内容は、すべて統計的に処理し、個別のデータを公表することはございませんので、忌憚のない回答、ご意見・コメントをお願い致します。

①アジア諸国からの研究者が日本で研究活動を行う上でのより良い環境作りのために改善が望まれる諸課題。

②受入れ期間終了後も引き続き日本の研究機関や企業で研究活動を行うことを希望するアジア諸国からの研究者が抱える問題とニーズ、及び受入れを希望する研究機関や企業が抱える問題とニーズ。

③日本で研究活動を行うアジア諸国からの研究者が帰国後に日本の受入れ研究機関との継続的・発展的な交流促進に携わる上での成功事例と諸課題。

提出期限：１０月１４日

※可能な限りメールでご提出くださいますようお願い申し上げます。

cgsr@jistec.or.jp　松本・畠山宛　（FAX の場合は　03-3818-0750）

～ ご回答いただく受入研究者の方について～

ご氏名			性　別	□男性　□女性
受入れ月	H.　　年　　月	受入れ期間	例:10/1～7/31	
機関名		研 究 分 野	※	

※下記のコード表から該当する番号をご記入下さい。

コード表（研究分類表）

系	分科	コード	系	分科	コード	系	分科	コード
総合領域	情報学	1	社会科学	法学	25	生物学	基礎生物学	48
	神経化学	2		政治学	26		生物科学	49
	実験動物学	3		経済学	27		人類学	50
	人間医工学	4		経営学	28	農学	農学	51
	健康・スポーツ科学	5		社会学	29		農芸化学	52
	生活科学	6		心理学	30		林学	53
	科学教育・教育工学	7		教育学	31		水産学	54
	科学社会学・科学技術史	8	数物系科学	数学	32		農業経済学	55
	文化財科学	9		天文学	33		農業工学	56
	地理学	10		物理学	34		畜産学・獣医学	57
複合新領域	環境学	11		地球惑星科学	35		境界農学	58
	ナノ・マクロ科学	12		プラズマ科学	36	医歯薬学	薬学	59
	社会・安全システム科学	13	化学	基礎科学	37		基礎医学	60
	ゲノム科学	14		複合科学	38		境界医学	61
	生物分子科学	15		材料化学	39		社会医学	62
	資源保全学	16	工学	応用物理学・工学基礎	40		内科系臨床医学	63
	地域研究	17		機械工学	41		外科系臨床医学	64
	ジェンダー	18		電気電子工学	42		歯学	65
人文学	哲学	19		土木工学	43		看護学	66
	文学	20		建築学	44			
	言語学	21		材料工学	45			
	史学	22		プロセス工学	46			
	人文地理学	23		総合工学	47			
	文化人類学	24						

～ あなたが受け入れた中国政府派遣研究員について ～

Q1. あなたが受け入れた中国政府派遣研究員について、どのように感じましたか？ 各項目について、1～5 の中から、最もお気持ちに近い番号を1つお選び下さい。

	1 全く満足	2 ほぼ満足	3 どちらともいえない	4 やや不満足	5 全く不満足
1) 中国政府派遣研究員の研究遂行能力	□	□	□	□	□
2) 中国政府派遣研究員の研究意欲	□	□	□	□	□
3) 受入研究機関スタッフとのコミュニケーション	□	□	□	□	□
4) 受入研究室内におけるコミュニケーション・ディスカッション	□	□	□	□	□
5) 受入研究機関以外の研究者とのコミュニケーション	□	□	□	□	□
6) 研究以外の場での積極的なコミュニケーション	□	□	□	□	□
7) その他（具体的に　　）	□	□	□	□	□

Q1－1. あなたは中国政府派遣研究員とどのくらいの頻度で研究について指導・検討・討議等を行いましたか？1つお選び下さい。

1	□ 週に１回以上	**3**	□ ３ヶ月に１回以上
2	□ 月に１回以上	**4**	□ その他（具体的に　　）

Q2. あなたが受け入れた中国政府派遣研究員の研究計画はどの程度予定通り遂行されたと思いますか。1つお選びください。

	1 予定より大幅に進んだ	2 予定より進んだ	3 予定通り	4 予定より遅れた	5 予定より大幅に遅れた
研究計画に対する進捗状況	□	□	□	□	□

Q2－1. (Q2で評価が４及び５と答えた方) 中国政府派遣研究員の研究計画が予定通り遂行できなかった要因と思うものを3つまでお選び下さい。

1	□ 研究課題の選択、来日前の打合せ及び準備が不十分だった
2	□ 資金不足により、研究に必要な研究設備や消耗品が不十分だった
3	□ 中国政府派遣研究員の研究能力が不足した
4	□ 中国政府派遣研究員の研究意欲が不足した
5	□ 中国政府派遣研究員の不測の事態により、研究時間が不足した
6	□ 自分が忙しすぎて、十分な研究・検討・討議ができなかった
7	□ 中国政府派遣研究員との関係がうまくいかなくなった
8	□ 日本語及び英語でのコミュニケーションがとれなかった
9	□ その他（具体的に　　）

～「中国政府派遣研究員制度」について ～

Q3. 中国政府派遣研究員制度を利用した理由や、期待したことは何ですか？次の中から、主なものを3つまでお選び下さい。

1	□	日本が昔、西欧の学者に助けられたように今後は、アジアの研究者育成に貢献したい
2	□	国際的に高レベルな研究を行うため、国際的に優秀な研究人材を受け入れたい
3	□	研究室を優秀な研究者が集まる拠点にしたい
4	□	日本でしかできない研究、独自の研究設備・装置を使用した研究をしてもらうため
5	□	新しい発想を期待した
6	□	研究者としての人手を期待した
7	□	自分自身が中国の研究に携わっている
8	□	以前にも受け入れたので
9	□	中国人研究者との共同研究をもっと発展させたい
10	□	日中の比較論的研究を期待した
11	□	その他（具体的に　　）

Q４．中国政府派遣研究員を受け入れた経験を基にして、貴機関の国際化戦略なども考慮し、今後のこの制度の有効な活用について、どのようにお感じになりますか。（チェックはそれぞれいくつでも）		(A)研究者として受け入れたい（チェックはいくつでも）↓	(B)職員として雇用したい（チェックはいくつでも）↓
1	中国からの研究者	□	□
2	中国を除く、アジア諸国からの研究者	□	□
3	欧米先進国からの研究者	□	□
4	国籍は問わない	□	□
5	その他（具体的に　　）	□	□

Q5.「中国政府派遣研究員制度」で中国人研究者を受け入れることを同僚の研究者に勧めますか？（チェックはひとつだけ）

1	□	勧める	2	□	勧めない　→Q5－1へ

Q5－1. 中国政府派遣研究員の受入を同僚研究者に勧めない主な理由は何ですか？(具体的に)

理由:

～ 今後の中国との研究協力について ～

Q6. 日中の研究協力を今後進めるために何が重要と考えますか？次の中から重要と考えるものを、3つまでお選び下さい。

1	□	個人的な交流の活発化
2	□	知的財産権等を含めた二国間の研究協力協定や共同研究契約などの締結
3	□	大規模な共同研究を長期（5～6年）で重点的に行う
4	□	小規模な共同研究を短期（2～3年）で多数行う
5	□	個別研究者の長期派遣または招へいを重点的に行う
6	□	個別研究者の短期派遣または招へいを多数行う
7	□	日中双方で利用可能な基礎研究費の充実
8	□	日中双方で利用可能な応用研究費の充実
9	□	日中双方で利用可能な産学連携研究費の充実
10	□	異分野交流シンポジウムの開催
11	□	若手研究者の「知の出会い」を盛んにする国際シンポジウムの開催
12	□	若手研究者による国際共同研究
13	□	若手研究者による国際セミナー開催支援
14	□	中国政府の協力
15	□	日本側研究者によるリーダーシップの発揮
16	□	その他（具体的に　　）

Q7. 今後、あなたは中国との研究協力を進める意向はありますか？1つだけお選び下さい。

1	□	研究協力を今後進めたい
2	□	研究協力を今後進めるつもりはない
3	□	チャンスがあれば研究協力を今後進める

～ アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）の日本での研究環境について ～

Ｑ８．アジア諸国からの研究者に対する日本の大学等研究機関の研究環境について、あなたはどのように感じていますか？　各項目について、1～5 の中から、最もお気持ちに近い番号を1つだけお選び下さい。

	1 十分	2 まあ十分	3 どちらともいえない	4 やや不十分	5 全く不十分
1 アジア諸国からの研究者の受け入れ数	□	□	□	□	□
2 アジア諸国からの研究者の雇用状況	□	□	□	□	□
3 帰国後のアジア諸国からの研究者との継続的・発展的交流	□	□	□	□	□
4 研究レベルの世界的な高さ	□	□	□	□	□
5 研究施設・研究設備レベルの世界的な高さ	□	□	□	□	□
6 研究資金の豊富さ	□	□	□	□	□
7 居室、研究スペースの広さ	□	□	□	□	□
8 ディスカッションの活発さ、研究者の競争的な雰囲気	□	□	□	□	□
9 パソコン、インターネットの整備状況	□	□	□	□	□
10 研究支援者（事務系、技術系）の状況	□	□	□	□	□
11 図書館の、研究に必要な参考書・雑誌の整備状況	□	□	□	□	□
12 研究に必要なデータベースやソフトの整備状況	□	□	□	□	□
13 その他（具体的に　　）	□	□	□	□	□

Ｑ８－１．アジア諸国からの研究者に対する日本の研究環境について、最も重要な改善すべき項目はどのようなことだとお感じになりますか。次の中から１つお選び下さい。

1 □ アジア諸国からの研究者の受入れ数
2 □ アジア諸国からの研究者の雇用状況
3 □ 帰国後のアジア諸国からの研究者との継続的・発展的交流
4 □ 研究レベルの世界的な高さ
5 □ 研究施設・研究設備レベルの世界的な高さ
6 □ 研究資金の豊富さ
7 □ 居室、研究スペースの広さ
8 □ ディスカッションの活発さ、研究者の競争的な雰囲気
9 □ パソコン、インターネットの整備状況
10 □ 研究支援者（事務系、技術系）の状況
11 □ 図書館の、研究に必要な参考書・雑誌の整備状況
12 □ 研究に必要なデータベースやソフトの整備状況
13 □ その他　（具体的に　　）

～ アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）の日本での生活環境について ～

Ｑ９．アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境について、あなたはどのように感じていますか？　各項目について、1～5の中から、最もお気持ちに近い番号を1つだけお選び下さい。

	全く十分	まあ十分	どちらともいえない	やや不十分	全く不十分
1 母国語での対応について	□	□	□	□	□
2 手続きや規則の分かりやすさ	□	□	□	□	□
3 日本人全般の対応	□	□	□	□	□
4 住居状況	□	□	□	□	□
5 子弟の教育	□	□	□	□	□
6 配偶者の就職	□	□	□	□	□
7 病気・事故など、緊急時の対応体制	□	□	□	□	□
8 病院、市役所、銀行、郵便局の対応	□	□	□	□	□
9 その他（具体的に　　）	□	□	□	□	□

Ｑ９－１．アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境について、最も重要な改善すべき項目はどのようなことだとお感じになりますか。次の中から１つお選び下さい。

1 □ 母国語での対応について
2 □ 手続きや規則の分かりやすさ
3 □ 日本人全般の対応
4 □ 住居状況
5 □ 子弟の教育
6 □ 配偶者の就職
7 □ 病気・事故など、緊急時の対応体制
8 □ 病院、市役所、銀行、郵便局の対応
9 □ その他

～ アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）の雇用について ～

Q10. 日本の研究機関（あなたの機関を含めて）と企業が、アジア諸国からの研究者を雇用する場合の理由は何だと思いますか？重要と考えるものを3つまでお選び下さい。

- 1 ☐ 日本の研究人材の不足を補う
- 2 ☐ 多様な研究者による競争、協調、協力により創造的な発想が期待できる
- 3 ☐ 国際的に高レベルな研究を行うため、国際的に優秀な研究人材が必要
- 4 ☐ アジア諸国の研究者との共同研究をもっと発展させる
- 5 ☐ アジア諸国との関係を良好にする
- 6 ☐ アジア諸国との人的交流、研究交流などを活発にする
- 7 ☐ アジア諸国の研究者とのネットワークの構築
- 8 ☐ その他（具体的に　　）

Q10－1. 日本の研究機関（あなたの機関を含めて）と企業がアジア諸国からの研究者を雇用する場合の問題点は何だと思いますか？　重要と考えるものを3つまでお選び下さい。

- 1 ☐ 優秀かどうかの判定が困難である
- 2 ☐ 日本人研究者との言語の壁が大きい
- 3 ☐ 文化摩擦、宗教・習慣の違いによるトラブルなど多い
- 4 ☐ 知的財産（ノウハウを含めて）の管理が難しい
- 5 ☐ 部下を指揮する幹部職に昇格するなどの人事が難しい
- 6 ☐ その他（具体的に　　）

～ アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）との交流促進について ～

Q11. アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）との研究も含めた継続的・発展的交流促進に重要なことは何だと思いますか？　重要と考えるものを3つまでお選び下さい。

- 1 ☐ 個人的な交流の活発化
- 2 ☐ 世界的にレベルの高い研究成果を上げること
- 3 ☐ 相互訪問のため日本人研究者及びアジア諸国からの研究者への資金支援
- 4 ☐ 共同研究実施の活発化
- 5 ☐ 国際共同シンポジウム等の開催
- 6 ☐ アジア諸国からの研究者の雇用
- 7 ☐ 帰国後の母国における同窓会の設立と運営
- 8 ☐ 帰国後の日本での同窓会の設立と運営
- 9 ☐ 日本人研究者のリーダーシップによる交流
- 10 ☐ その他（具体的に　　）

～共同研究等について～

Q12　中国政府派遣研究員と受入研究者との共同研究等についてお伺いします。
日本での滞在期間中に十分共同研究が出来なかった場合もあると思います。その時は、
中国政府派遣研究員が中国に帰国後、受入教授との研究の継続や、更に論文執筆の可能性についてお答え下さい。

Q12—1.
本邦滞在中に中国政府派遣研究員と受入教授(含む研究室の他の研究者)が共同研究に進む事が出来たかどうかについてお伺いします。

1 ☐ 共同研究を行うことが出来た。
2 ☐ 忙しくて共同研究を行う時間が十分なかったが、他の研究者との共同研究を指導した。
3 ☐ 出来れば共同研究を行いたかったが何らかの理由で共同研究を行う事が出来なかった。
共同研究が出来なかった理由を具体的にお答えください。
(　　)
4 ☐ 中国政府派遣研究員を引き受ける時点で共同研究を行う積もりはなかったので共同研究はしなかった。
5 ☐ その他：　例えば、中国政府派遣研究員の専門知識など中国政府派遣研究員の能力、経験不足の面などがあれば忌憚のないご意見をお願いします。
(　　)

Q12－2.
引き続いて共同論文の執筆についてお伺いします。

共同研究の成果を共同論文として発表する予定(可能性)がありますか。

1 ☐ 研究成果を共同論文として学会に発表した（近々発表する予定）
2 ☐ 今後の共同研究の成果によっては発表する可能性がある。
3 ☐ 共同論文の執筆は無理かも知れないが、中国政府派遣研究員が帰国後日本での研究成　果として発表出来るように指導した。
4 ☐ まだ共同論文を出すまでの研究水準・成果に至って居らず今後の事はわからないが、中国政府派遣研究員が中国戻っても引き続き共同研究は行いたい。
5 ☐ その他共同論文の執筆まで両国の交流が発展するようにするにはどうしたら良いかのご意見をお伺いします。(例えば、中国政府派遣研究員の滞在期間、研究支援費など忌憚のないご意見をお願いします。)
(　　)

～ 総合的なご意見をお伺いします ～

Ｑ１３．中国政府派遣研究員制度、日本の大学等研究機関の改善すべき課題等について、忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。

1. 日本が世界的に優秀なアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）を引きつけるためには、何が重要だとお考えですか。（具体的に）
2. 日本が今後、世界的に優秀なアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）と研究協力を進めるためには、何が重要だとお考えですか。（具体的に）
3. これから来日制度に応募するアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）を受け入れる研究者へのアドバイスはありますか。（具体的に）
4. その他、ご意見があればお書き下さい。（具体的に）

様式７：事務担当者用

「中国政府派遣研究員制度」に係る
受入事務担当者へのアンケート調査票

我が国の研究環境の国際化及びアジア諸国の外国人研究者の受入れ促進手法開発を目的とし、下記①～③の事項を総合的かつ長期的な計画の下に調査分析する一環として、我が国で研究に従事された外国人研究者、その受入研究者及び大学等研究機関の事務担当者にアンケート調査を実施させていただくことになりました。つきましては、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。なお、ご回答いただきました内容は、すべて統計的に処理し、個別のデータを公表することはございませんので、忌憚のない回答、ご意見・コメントをお願い致します。

①アジア諸国の外国人研究者が日本で研究活動を行う上でのより良い環境作りのために改善が望まれる諸課題。

②受入れ期間終了後も引き続き日本の研究機関や企業で研究活動を行うことを希望するアジア諸国の外国人研究者が抱える問題とニーズ、及び受入れを希望する研究機関や企業が抱える問題とニーズ。

③日本で研究活動を行うアジア諸国の外国人研究者が帰国後に日本の受入れ研究機関との継続的・発展的な交流促進に携わる上での成功事例と諸課題。

提出期限：１０月１４日

※可能な限りメールでご提出くださいますようお願い申し上げます。

cgsr@jistec.or.jp　松本・畠山宛

（FAX　の場合は　０３－３８１８－０７５０）

～ ご回答いただく受入れ事務担当者の方について ～

氏　名	
性　別	□ 男性　□ 女性
事務担当年度	
貴機関名	

Q1. あなたが受入れ事務に携わった年数を教えて下さい。

受入れ事務担当年数　［　　年　］

Q2. あなたの年齢を、以下の中からお選び下さい。

1 □ ２０代
2 □ ３０代
3 □ ４０代
4 □ ５０代
5 □ ６０代以上

～ 外国人研究者の受入事務担当者としての能力向上について ～

Q3. あなたは外国人研究者の受入事務担当者として今後どのような能力を磨いていきたいとお考えですか？ 次の中から重要なものを3つまでお選び下さい。(□にチェックを入れてください)

1	□	外国語（中国語、英語など）の能力（会話、読む、書く）
2	□	事務処理の能力
3	□	連絡調整能力、交渉能力
4	□	プレゼンテーション能力、説明能力
5	□	本体業務（教育内容、研究内容）の理解
6	□	企画・立案の能力
7	□	法務、財務の知識
8	□	情報収集の能力、Information Technology の知識
9	□	新しいことへの挑戦意欲
10	□	その他（具体的に：　　）

Q4. 外国人研究者の受入事務担当者の能力向上策として何が重要だと思いますか？
次の中から重要なものを3つまでお選び下さい。(□にチェックを入れてください)

1	□	国内の研修プログラムへの参加
2	□	海外の短期研修プログラムへの参加
3	□	海外で１年程度の長期研修プログラムへの参加
4	□	機関内外の公的・私的な勉強会への参加
5	□	職員の自己開発、自己研修
6	□	OJT（On the Job Training）における上司の指導
7	□	その他（具体的に：　　）

～「中国政府派遣研究員制度」について ～

Q5. あなたの機関が中国政府派遣研究員の受け入れで期待していることは何であると思いますか？
次の中から重要なものを3つまでお選び下さい。(□にチェックを入れてください)

1	□	大学等研究機関の国際化戦略の一環として
2	□	日本が昔、西欧の大学等研究機関に助けられたように、今後はアジアの研究者育成に貢献したい
3	□	国際的に優秀な研究人材を受け入れて、国際的に高レベルな研究を行うため
4	□	日本でしかできない研究、独自の研究設備・装置を使用した研究をしてもらう
5	□	研究について新しい発想が期待できる
6	□	研究者としての人手が期待できる
7	□	中国及び中国人研究者との共同研究をもっと発展させる
8	□	日中関係を良好にする
9	□	日中間の人的交流、研究交流などを活発にする
10	□	その他（具体的に：　　）

～「中国政府派遣研究員」の受入事務について ～

Q6.「中国政府派遣研究員」の受入事務に関して、中国政府から提出される派遣研究員申請書に貴機関の受入研究者の「受入内諾書」が添付されている場合は、貴機関の正式受入承諾手続きは、次の内どれに該当しますか。1つだけ選択してください。(□にチェックを入れてください)

1	□	受入研究者の「受入内諾書」があれば組織内の正式「受入承諾」手続きをとることができる
2	□	受入研究者の「受入内諾書」があっても組織内の関連する委員会・教授会等での決定がないと組織としての「受入承諾」手続をとることができない
3	□	その他（具体的に：　　）

Q7.「中国政府派遣研究員」の受入事務に関して、ご苦労されることは何ですか。次のうちから該当するものを3つお選び下さい。(□にチェックを入れてください)

1	□	受入承諾書に関する事務手続き
2	□	研究支援費の請求、管理に関する事務
3	□	研究支援費の使用に関すること
4	□	派遣研究員の宿舎の予約、確保等に関する事務
5	□	事務室・備品の確保等に関する派遣研究員受入のため準備
6	□	派遣研究員の生活一般に関する助言・支援等に関すること
7	□	派遣研究員からの各種問い合わせに対する対応
8	□	受入研究者と派遣研究員との間の調整事務
9	□	その他（具体的に：　　）

～ アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）の日本での研究環境について ～

Ｑ８．アジア諸国からの研究者に対する日本の大学等研究機関の研究環境について、あなたはどのように感じていますか？各項目について、チェックを１カ所入れてください。	1 十分	2 まあ十分	3 どちらともいえない	4 やや不十分	5 全く不十分
1) アジア諸国からの研究者の受入れ数	□	□	□	□	□
2) アジア諸国からの研究者の雇用状況	□	□	□	□	□
3) 帰国後のアジア諸国からの研究者との継続的・発展的交流	□	□	□	□	□
4) 研究レベルの世界的な高さ	□	□	□	□	□
5) 研究施設・研究設備レベルの世界的な高さ	□	□	□	□	□
6) 研究資金の豊富さ	□	□	□	□	□
7) 居室、研究スペースの広さ	□	□	□	□	□
8) ディスカッションの活発さ、研究者の競争的な雰囲気	□	□	□	□	□
9) パソコン、インターネットの整備状況	□	□	□	□	□
10) 研究支援者（事務系、技術系）の状況	□	□	□	□	□
11) 図書館の、研究に必要な参考書・雑誌の整備状況	□	□	□	□	□
12) 研究に必要なデータベースやソフトの整備状況	□	□	□	□	□
13) その他（具体的に：　　）	□	□	□	□	□

Ｑ８－１．アジア諸国からの研究者に対する日本の研究環境について、最も重要な改善すべき項目はどのようなことだとお感じになりますか。次の中からお教え下さい。（チェックはひとつだけ）

1 □ アジア諸国からの研究者の受入れ数
2 □ アジア諸国からの研究者の雇用状況
3 □ 帰国後のアジア諸国からの研究者との継続的・発展的交流
4 □ 研究レベルの世界的な高さ
5 □ 研究施設・研究設備レベルの世界的な高さ
6 □ 研究資金の豊富さ
7 □ 居室、研究スペースの広さ
8 □ ディスカッションの活発さ、研究者の競争的な雰囲気
9 □ パソコン、インターネットの整備状況
10 □ 研究支援者（事務系、技術系）の状況
11 □ 図書館の、研究に必要な参考書・雑誌の整備状況
12 □ 研究に必要なデータベースやソフトの整備状況
13 □ その他（具体的に：　　）

～ アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）の日本での生活環境について ～

Ｑ９．アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境について、あなたはどのように感じていますか？ 各項目について、チェックを１カ所入れてください。	1 全く十分	2 まあ十分	3 どちらともいえない	4 やや不十分	5 全く不十分
1) 母国語での対応について	□	□	□	□	□
2) 手続きや規則の分かりやすさ	□	□	□	□	□
3) 日本人全般の対応	□	□	□	□	□
4) 住居状況	□	□	□	□	□
5) 子弟の教育	□	□	□	□	□
6) 配偶者の就職	□	□	□	□	□
7) 病気・事故など、緊急時の対応体制	□	□	□	□	□
8) 病院、市役所、銀行、郵便局の対応	□	□	□	□	□
9) その他（具体的に：　　）	□	□	□	□	□

Ｑ９－１．アジア諸国からの研究者に対する日本の生活環境について、最も重要な改善すべき項目はどのようなことだとお感じになりますか。次の中から１つお選びください。

1 □ 母国語での対応について
2 □ 手続きや規則の分かりやすさ
3 □ 日本人全般の対応
4 □ 住居状況
5 □ 子弟の教育
6 □ 配偶者の就職
7 □ 病気・事故など、緊急時の対応体制
8 □ 病院、市役所、銀行、郵便局の対応
9 □ その他（具体的に：　　）

～ アジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）の雇用について ～

Q10. 日本の研究機関と企業が、アジア諸国からの研究者を雇用する場合の理由は何だと思いますか？ 次の中から重要なもの3つまでお選び下さい。

1	☐	日本の研究人材の不足を補う
2	☐	多様な研究者による競争、協調、協力により創造的な発想が期待できる
3	☐	国際的に高レベルな研究を行うため、国際的に優秀な研究人材が必要
4	☐	アジア諸国の研究者との共同研究をもっと発展させる
5	☐	アジア諸国との関係を良好にする
6	☐	アジア諸国との人的交流、研究交流などを活発にする
7	☐	アジア諸国の研究者とのネットワークの構築
8	☐	その他（具体的に：　　）

Q10－1. 日本の研究機関と企業が、アジア諸国からの研究者を雇用する場合の問題点は何だと思いますか？ 次の中から重要なものを3つまでお選び下さい。

1	☐	優秀かどうかの判定が困難である
2	☐	日本人研究者との言語の壁が大きい
3	☐	文化摩擦、宗教・習慣の違いによるトラブルなど多い
4	☐	知的財産（ノウハウを含めて）の管理が難しい
5	☐	部下を指揮する幹部職に昇格するなどの人事が難しい
6	☐	その他（具体的に：　　）

＜全体について＞

Q11．外国人研究者の受入れに対して、忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。

1. 日本が世界的に優秀なアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）を引きつけるためには、何が重要だとお考えですか。（具体的に）
2. 日本が今後、世界的に優秀なアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）と研究協力を進めるためには、何が重要だとお考えですか。（具体的に）
3. これからアジア諸国からの研究者（中国人研究者含む）を受入れる大学等研究機関へのアドバイスはありますか。（具体的に）
4. その他、ご意見があればお書き下さい。（具体的に）

ご協力誠にありがとうございました